
黒竜異聞

真下守里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒竜異聞

【Nコード】

N6683W

【作者名】

真下守里

【あらすじ】

母一人子一人で育ってきた北方の村の少年リクは、母の死をきっかけに、単身王都を目指す。その懐には、顔も知らない父の形見だという短刀――それを手掛かりに父を探し、慰謝料のいくらかもふんどくってやろうという心積もりなのである。そんなリクが、旅のさなかに出会ったのは、手のひらサイズの黒いチビ竜。しかも、その正体は……！？ ※このお話は「野いちご」で公開していた『黒竜異聞』シリーズの加筆修正版です。このため、プロットがほぼ9割決まっていますので、ストーリー展開についてのご希望には添え

ないことが多いかと思います。あしからずご了承下さいませ。※改稿は、ほとんどが大筋には関わらない小さな変更です。

思いがけない拾いもの（前書き）

前作『竜を抱く』で、何げに人気だったらしいリク。そんな彼のお話を、あらためて紡ぎ直してみたくて、（忙しい忙しい騒いでるくせに）つい書き始めてしまいました。彼の両親の出会いから始めるので、相当な長編かつまったり更新となるかと思いますが、よろしくお付き合いいただければ幸いです。R15指定は念のため^^；

また、ほかの竜のシリーズ同様、単位は尺貫法を使っています。

※この序章に出てくる「リク」は、主人公「リク」の父親です。

思いがけない拾いもの

サラハン大陸暦892年、初冬――

秋口より始まった、北の隣国・ヘキギョク（と言っても、ここに至るまで何度も為政者が変わり、そのたびに国名も変わったので、近在の土地では、「上つ国^{かみくに}」という昔からの通り名で呼んでいたのだが）との戦は、寒さの到来とともに膠着状態に陥った。

戦場^{いくさば}となった国境が雪に降り込められ、両軍ともに身動きが取れなくなったのだ。本当は秋の収穫の時期までには勝負を決したいところだったのだが、互いに想定していた以上に相手に善戦され、戦いが長引いてしまったのであった。

十六になるイヅチの住む山間^{やまあい}のカノへ村にも、程なくその噂は伝わった。国境まで十数里（約50km）という場所柄もあり、いつ戦火に巻き込まれるか、誰もが戦々恐々として成り行きを見守っていたからだ。

「けど、この分じゃ、春まではナンも起こらないっしょ」

こうした場合、往々にして女の方が割り切り良く、肝も据わっているものだ。加えて、イヅチは女だてらに「猿^{ましら}」の異名を取るほどのお転婆娘でもあった。そうとわかれば、家の中にじっとしてなどいられるはずもない。

「ついでに、山向^いこの市^{いち}で買い物^{もん}もして来てやつから！」

取ってつけたように言い添えると、荷台付きの櫓^{そり}にまたがり、さっさと雪の中へ飛び出した。無論、買い物などただの口実。本当の

目的は、荷台にくくりつけてある「雪板」で、滑空の練習をするこ
とだった。

年明け早々に村を挙げての雪滑りの大会が行われることになって
おり、「猿のイヅチ」^{ましら}は、その優勝候補のひとりだったのである。
優勝者には、米一俵と金一封が贈られることになっていた。貧しい
小作の娘であるイヅチにとっては、滅多にできない親孝行となるだ
ろう。それに、

（今年こそは、けっちゃんけっちゃんにしてやんだから、あの庄屋
のバカ息子……！！）

「庄屋」とは、この村の長のことだ。^{おさ}その庄屋のひとり息子は、
村で唯一の寺子屋に入学したその日、イヅチに「猿」^{ましら}とあだ名をつ
けた張本人であった。十二でそこを卒業してからも、何かという
偉そうな態度で神経を逆撫でしてくる。例えば雪板のことひとつ取
っても、

『僕のは、毎年「お父様」^{みやこ}に王都で求めてきてもらう最新式のもの
なんだからね。十年一日、同じ古い板で滑っているおまえなんか、
逆立ちしたって敵いっこないさ！』

とか何とか、自慢たらしいことおびただしいのだ。

ところが、半刻^{とぎ}（約一時間）も経たぬうちに、イヅチは戻ってき
た。しかも、彼女が櫓の荷台に乗せて運んできたのは、肉でも野菜
でも魚でもなかった。山賊に外套を剥がれでもしたか、薄衣^{うすころも}と筒袴
のみを身にまとい、白磁のような額から血を流してぐったりと横た
わっている、イヅチと同年代の若い男――

「山さ下ってたら、ふらふらあって脇道から出てきてさ。ケガもし

てるし、凍えて死にそうだし、ほったらかしにしとくのもアレかな
って……」

驚く家族にそう説明すると、イヅチは手際良く男を古毛布でくる
んでやり、今度は、村でたったひとりの医者様の家に櫓を向けた。
方向を見失わないよう、視線は前方に置いたまま、

「あたし、イヅチってんだ。あんたの名前は？」

「……リク」

「どっから来たね？」

答えは返ってこなかった。頭を打った衝撃で忘れてしまったのか、
あるいは語りたくないのか……

（ま、どっちでもいいけどさ）

年の頃から推して、恐らくは、強制的に徴兵され、前線に駆り出
された少年兵なのだろう。だとすれば、雪が解ければ早々に仲間が
捜しに来るはずで、そうなったら、もう二度と会うこともないのだ。

ほかにも傷を負っているのか、リクが低く呻いた。思わず後ろを
振り返ると、相手は苦しげにまぶたを閉じていた。そのまつ毛の長
さに、はっと目を奪われる。スッと通った鼻筋と、薄いがくつきり
と紅い唇にも……

「……あたしより女らしいかも」

呟いてしまってから、いけない、とイヅチは首をすくめた。案の
定、リクの眉が、たちまちキッと吊り上がった。

「どうせ私はチビで女顔だ！」

「や、チビだとまでは言っていないけど」

「……っ！」

真っ赤になって、リクは再び黙り込んだ。つまりはそれだけ身の丈の低さを気にしているのだ、ということが丸わかりである。

「やだ、可愛——」

「可愛いなどと言うなっ！！」

ますます真っ赤になって、リクは怒鳴った。よほど普段から言われたっけていて苛立ちの種にでもなっているのか、涙目にまでなっていづちを睨んでいる。

やっぱり可愛い、といづちは思ったが、今度は口には出さなかった。相手の名誉のために、というだけでなく、ふと、心の中で警鐘が鳴った気がしたからでもあった。

リクが口にしたのは、自分がしゃべっているような訛りまじりの荒っぽい言葉ではなく、王都みやこで話されている「お上品な言葉」だった。それも、庄屋の息子のように格好をつけるためにわざと使っているのではなく、本当に日頃から使い慣れているのだということが、たった二言三言からでも、ちゃんと伝わってくる。

ということは、もしかしたらリクはただの少年兵などではなく、どこか「いいところのお坊ちゃん」なのかもしれない。豪商の息子か、あるいは騎士か貴族の家系の出か……

（だったら、下手に「深入り」なんかしない方がいいよね）

上つ国と同じく王制が敷かれているこの国・カムナギ（といっても、こちらにも、いづちたちには「ウチの国」だとか「中なかつ国くに」だと

「悪いが、手当てが終わったなら、この患者の様子を見とってくれんかの。この傷と打ち身の様子では、恐らく熱が出るじゃろう。しかし、儂^{わし}はこの通り、ひとりの患者ばかりにかかわずらってはおられないのでな」

村の全員の命を預かる医者様の頼みは、庄屋の命令と同じぐらい絶対だ。それに、お転婆が災いして日頃からケガの絶えないイツチは、この医者様に何度も手当てしてもらったり、時には冗談抜きに命を救ってもらったりもしていたから、そういう意味でも、返事は「はい」以外あり得ない。

かくて、イツチは一晚、リクの傍らに座って、彼の看病をした。医者様の診立て通り、夜半過ぎにはリクは高熱を発して呻き始めた。

「い、づち……」

覚えたばかりの彼女の名を何度も呼び、不安げにその手を求めるリクの姿に、なけなしの女心を揺さぶられてしまったとしても、誰がイツチを責められよう？

傷が癒えると、リクは、「自分には診療代が払えないから」と、引き続き医者様のもとに残り、その手伝いをするようになった。

よほど高等な教育を受けてきたのだろう、万事について呑み込みが早く、じきに診療の手順も覚えてしまったリクを、医者様はたいそう可愛がり、「春にはここを出て行くのだということであれば、このまま弟子にしてしまいたいところなんじゃが」と口惜しがった。

また、リクの整った顔立ちは、イツチ以外の村の娘たちの心も、あっという間に虜にした。イツチ自身は、彼の苦しみ喘いでいる顔か、「どうせチビだ」とムツとしている顔しか見たことがなかった

が、何でも、にっこり笑うと、その美貌はさらに際立つのだとか……
何故伝聞なのかと言え、あれ以来、一度もリクには会っていなかったからだ。リクに夢中になっている娘の中には、「小町」と評判の美少女も含まれていた。それ以外の娘たちにしても、それこそ野生の猿のごとくガサツで薄汚れた自分に比べれば、皆可愛らしくて、女の子らしくて……

（人にはさ、分ってもんがあるんだよ）

そう自分に言い聞かせつつ、イズチは、畑が雪で埋まってしまっている冬の間の仕事であるわらじ作りや菅笠作りに黙々と勤しみ、それを市へ売りに行っては、その帰り道に、ひたすら滑空の練習を続けた。

その甲斐あってか、雪滑り大会では文句なしの優勝だった。賞品を手喜び家族を微笑んで見つめながら、リクもどこかで見ていてくれるだろうか、という思いが、ちらりと心をかすめた。

けれど、すぐにイズチはそれを抑え込んだ。仮に見ていたとしても、「猿の異名は伊達ではなかったのだな」と思われるのが関の山だろう。それどころか、「女の身であるような野蛮なことなどして」と軽蔑されてしまうかもしれない……

降って湧いたような

雪解けの気配が漂い始めた頃、村の若者たちに取り囲まれて何か言われているリクの姿を見た。言葉の合間合間には、小突かれたり、殴る蹴るされたりもしている様子だ。何やってんだよおまえら、と怒鳴りかけて、しかし、イツチは口をつぐんだ。

男の子にまじって遊んで育ってきた彼女は、彼らが時に言葉以外のものでも語り合う人種であることを知っていた。もし、あれが、彼らなりの「リクを仲間を迎える儀式」のようなものだとしたら、そこへ割って入ることは、むしろ大いなる野暮となってしまう。

それに、せっかく抑え込んだ気持ちが一たびむくむくと頭をもたげそうな気もした。ケガをしていれば手当てしたくなるだろうし、傷ついていれば慰めてやりたくもなるだろう。けれど、それもまた、リクにしてみれば余計なお節介でしかないかもしれない。「小作の娘が、たかだか一度関わったぐらいでいい気になって」そんなふうに使われてしまったら……

しかも、さらに厄介なのは、そう思うであろう人間は、リクひとりではないということだった。例えば、リクに夢中になっている、あの「小町」――ハツセ、という名の彼女は、庄屋の分家筋の娘でもあり、それだけに影響力も庄屋の息子並みに強かった。否、「娘たちへの」と範囲を限定すれば最強とさえ言えるかもしれない。そんなハツセにも同様のことを思われ、へそを曲げられてしまえば、今後の村の女社会でのイツチの立場は最悪のものになってしまうだろう。

だが、切れ切れに聞こえる声の中に「よそ者が」「目障りだ」「さっさと出て行け」といった言葉がまじり始め、殴る蹴るの様子も明らかに常軌を逸していることが見て取れてくると、やはり、どう

にも捨てては置けなくなった。

「ああっ、喧嘩だ！　ねえねえ、喧嘩だよおっ！　……あ、ほらハツセちゃん、こっちこっち！！」

といっても、ハツセとは寺子屋で一緒だったという以外特に接点はない。だいいち、彼女の姿自体、実はどこにもなかったのだが、その名を使わせてもらうのが一番効果的だとイヅチは思ったのだ――「猿」に見られたところで連中は片腹痛くもないだろうが、相手が「小町」となれば話は別なはずだから。

案の定、連中は、こちらを振り返ることすらせず、脱兎の如く逃げ去って行った。その中に、というか、ほぼその中心に、庄屋の息子の姿を認めて、イヅチは、ああ、と納得した。

真面目でよく働くリクは、最近では、医者様だけでなく村人のほとんどに好意をもって受け入れられつつあった。中には、「春にはお別れなんて残念だねえ」などと声をかける者さえいる。おまけに、娘たちの間での大人気ぶりも相変わらずで……「常に僕が一番」でなければ気の済まない庄屋の息子としては、面白くないことこのうえなかったのだろう。それで、同じようにリクをやっかんでいた者たちを集めて、こんな愚行に及んだのだ。

「……かたじけない」

リクの声がした。振り返ると、彼は、右手でみぞおちを押さえ、左手で唇の端についた血を拭いながら立ち上がるところだった。その唇に苦笑が浮かぶ。

「何やら、いつも格好のつかぬところばかり見せているな、そなたには」

「え……」

返答に困って、イツチは立ち尽くした。はいと答えれば失礼だし、さりとていいえと答えれば嘘になる。おまけに、「そなた」という呼びかけ方——いくら「いいとこの坊ちゃん」でも、相手を「そなた」などと呼ぶ者はそうそういない。そう、例えば……

「えと……リク——様って、まさか、お——」

しかし、そこでイツチは硬直した。

「リクで良い」

相手のすんなりした人差し指が、そつ、と唇に当てられたのだ。

「すまん、今のは失言だった。出自がわかってしまうような物言いは、なるべくせぬように努めていたのだがな……どうも、そな——いや、おまえの前だと気が緩んでしまつて」

最初の最初で恥を掻き尽したからかな、と付け加えて、くすりとリクは笑った。息をするのも忘れて、イツチはその笑顔を凝視していた。

（みんなの言ってた通りだ……）

美しくて、神々しくて、何だか目がくらみそう——そこまで思ったところで、本当に目がくらんだ。ぐるり、と景色がひっくり返り、そのままイツチは気を失った。

次に気がついたときには、医者様の家の離れに寝かされていた。

「何をやっているのだ！ あのように息を止めていては、倒れるのは当たり前ではないか！！」

開口一番怒鳴られて、逆にイヅチはホッとした。初対面の印象が印象だったせいか、こちらの方が、ずっとリクらしい気がする。それに、あんな攻撃力抜群の笑みをこれ以上向けられ続けたら、今度こそ確実に窒息死してしまうかもしれない。

「あ、あの……ありが——」

そこまで言って、再び彼女は硬直した。掛け布団の上に出ている自分の右手——そこに、相手の右手の指が、しっかりとからめられていたから。

「いつぞやと、立場が逆になったな」

イヅチの変化に気づいたのか、リクも、いささか面映ゆげな顔になった。が、握られた手が離されることはなかった。

「あのときは、この手に随分と救われた。あたたかくて、心強くて……」

だから、夜が明けて、いつの間にか、手も、おまえも、どこかに消えてしまっているのに気づいたときには、本当に、その……」

言葉が途切れ、代わりに、手の方にさらにぐっと力がこもった。

「何故、あれからずっと顔を見せなかったのだ！

あ、いや……こちらから会いに行くことも、無論何度も考えたのだぞ？ だが、その……私のように、いろいろな意味で男らしくな

い、というか……そんな男は、おまえのような凜々しい女の好みには合わんのだろうか、と思うと……」

「……へ!？」

とうとう真っ赤になって口ごもってしまった相手を、まじまじとイヅチは見直していた。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

リクが医者様に正式に弟子入りを志願したのは、その日のうちのことだった。しかも、彼はイヅチをわざわざ家まで送ってくれ、その玄関先で、親たちに向かって、今後もこの村で暮らし、ゆくゆくは今の医者様のあとを継ぐことに決めたので、ぜひイヅチを嫁に貰い受けたい、と頭を下げたのである。

降って湧いたような話に、父も母も当然戸惑いをあらわにした。特に母などは、「分不相応では」と、わざわざ医者様のところへ問い合わせにまで出かけた。けれど、応対した医者様の答えは、

「何、ウチだって、持ち出しの方が多い貧乏医者じゃ。それに、イヅチなら、よく働かし機転も利くし、下手なお嬢様に来られるより、よっぽど助かるでな」

というものだった。それというのも、彼は、最初の晩の様子を見てとくに二人の気持ちを察しており、あたたかい目で成り行きを見守ってくれていたのである。

そんなこんなで、最終的には、両親も「幸せになるんだよ」と喜

んでイヅチを送り出してくれた。患者が最優先ということで、祝言は形ばかりのものを内輪でごくひっそりで行い、リクがイヅチに想いを告白したあの離れで、二人は夫婦として暮らし始めた。

「ねえ……本当に、良かったの？」

初めて床を共にする前、やはりどうしても信じられなくて、イヅチは確かめた。

「元の身分を捨てて、おまけに、あたしみたいな猿――」
ましら

その先は、リクの唇に阻まれた。それ以上の続きは許さない、と言わんばかりに深い口づけを何度も繰り返すと、彼はかたくかたく新妻を抱きしめた。

「猿ましらではない、天女だ」

「え……？」

「正月に、雪板を駆って大空に舞うおまえを見た。あれは、まさしく天女だった――それ以前からまた会いたいと思うてはいたし、人づてに、決して浮つくことなく、常に地に足のついた暮らしを心がけていると聞いて、そのことも好ましく感じてはいたが、あの滑空で完全にとどめを刺された」

呆然となった彼女をそっと布団に横たえ、上から覆いかぶさって、その胸元に顔を埋める。

「それに……どのみち、私には帰る場所などない。

おまえも聞いているであろう？ 数日前、上かみ（つ国）との間に講和条約が結ばれた、と……

ここだけの話だが、あれに調印するためには、本来なら私の立ち

合いと血判が必要なのだ。だが、実際には、何事もなかったかのよう
に事が進められた――恐らく、私は既に死んだものとされ、すべ
ての権限は副将として同行していた弟に移されたのだろう。

その点、ここでは……無論、まだまだ修業は必要だが、それでも、
私を――私の立場やそれに付随する権力ちからではなく、私という人間そ
のものを必要とし、頼ってくれる者がたくさんいる。

しかも、医者というのは人の命を救う仕事だ。それが、何よりも
嬉しい――正直、もうたくさんなのだ。この口から発せられた命令
ひとつで、これまでいったい何百、何千の兵が……」

声が詰まった。ぎゅっと自分の寝巻にすがりつき、肩を震わせる
夫を見やって、ああ、やはりこのひとは王族か、それに連なる家系
の出であったかとイヅチは確信したが、口にはしなかった。

（このひとが、自分からその家を捨てようって決めたんだものね……
…）

ならば、自分はその気持ちに寄り添うまで。何も知らない、何も
聞かなかったふりをして、このひとの「リクである部分」だけを見
つめ、愛おしんで行けば、それで……

「い、づち……」

あの夜と同じように、心もとなげに夫が呼んだ。

「リク……」

呼び返して、イヅチはそっと寝巻の帯を解き、相手のすべてを受
け入れた。近くの川で、雪解け水が音を立てて流れ始めたのを聞き
ながら、二人は激しく互いを求め、いつしかひとつに溶け合った。

懷刀と幻の手紙

(……なのに、あのバカ二人が余計なことすっから!)

憤然と、イツチは嘆息した。久々に昔を思い出して頭に血が上ったせいか、体じゅうが妙にカッカと熱い。

大陸歴910年の、冬の終わり――あれから十八年の時が過ぎ、「猿まじら」と呼ばれた少女は、「狒狒ひび」という形容の方がふさわしい貫録を備えた中年女になっていた。

そして、でっこりと居間の円卓の前に陣取ったイツチと向かい合って座っているのは、あの当時の夫に瓜二つの容貌と、彼女によく似た茶色い髪と瞳を持った、次の誕生日には十七になる息子だったが、夫の姿は、どこにもない――あの初夜から一月と経たぬうちに、「国王ユアンⅡナスルⅡハシム四世配下の隠密」を名乗る者たちに連れ去られてしまったのである。

その原因を作った者こそが、イツチが言うところの「バカ二人」――庄屋の息子と「小町」ことハツセであった。

リクとイツチがつつましくも幸せな夫婦生活を送り始めたのを知って、露骨に地団駄踏んで悔しがったのがこの二人だった。リクを毛嫌いしていた庄屋の息子と、リクに惚れていたハツセ――同じ人間に全く反対の感情を抱いていた二人であったが、思わぬところで利害関係が一致した。

『絶対、引き裂いてやる』

かくて彼らは結託し、上つ国・ヘキギョクとの講和が成って王都みやこへ帰りかけていた軍隊のもとへ走って、「これこれこういう特徴の

脱走兵がウチの村にいて、イヅチという女に匿われている」と密告したのである。

軍隊からの脱走者は死罪、これを匿った者は追放刑となるのが、昔からの習わしだった。庄屋の息子はまさしくそれを狙っていたのであろうし、ハツセにしても「このあたしを振って、あんな猿ましうななかを選んで……！」という「可愛さ余って憎さ百倍」的な気持ちの方が勝まさっていたものらしい。また、「あたしを差し置いて、あのひとと恋仲なんかになった性悪女に天誅が下るんだったら……！」という気持ちも少なからずあったのだろう。

ただ、ひとつだけ彼らは誤算をしていた。さすがの軍部も、自分たちの総大将であったリクを死罪に処すわけには行かなかったのだ。そこで、隠密がこっそりと彼を連れに來たのであった。

イヅチや医者様の前ではあくまでも只人ただひとでありたかったのだろうが、リクは、やって來た隠密たちを別室へと誘いざなった。

「私は、もう戻るつもりは……」 「ならば、せめて妻だけでも連れて……」 「ドウタク、そこを何とか……！」 そんな声が途切れ途切れに聞こえたが、どうやら全く聞く耳持ってもらえなかったらしい。四半刻しはんとき（約30分）ほどして再び現れた彼は、絶望にうなだれていた。

『すまぬ……しかし、戻らねば、おまえと、それに医者様が……！』

リクが戻ろうと戻るまいと、イヅチは罪に問われ、追放刑となる——「脱走兵を匿っていたこと」自体は冤罪だとしても、「総大将がここにいることを軍に隠していた罪」 「彼を平民になるよう唆そそのかし、あまつさえ婚姻関係まで結んだ罪」 など、挙げようとすればいくらでも挙げられるのだとか。しかも、それを見て見ぬふりしていた医者様も同罪なのだという。

『ですが、お戻りになると確約いただければ、それらすべてのことに目をつぶりましょう。それだけのことをしても、あなた様にはお戻りいただきたいと、これは国王陛下じきじきの仰せにございますゆえ……』

リクに「ドウタク」と呼ばれていた隠密の頭領は、そう囁いて、リクのすべての抵抗を封じたのであった。「国王陛下じきじきの仰せ」と言われれば、理不尽な、と抗議するわけにも行かない。それに、「国王陛下の決定」としてイズチたちが罪に問われぬことが村に伝えられれば、庄屋の息子もハツセも、これを認めざるを得まい――そうしなければ、「陛下の仰せに逆らう」ことになってしまうのだから。

こうして、リクは、その晩のうちに村から姿を消したのだった。愛しい妻と、恩義ある医者様を守るために……

もつとも、イズチ自身も、半年後には村を去ることとなった。

「国王陛下の仰せ」が効いて、確かに表立っては何もされてはいなかったが、ハツセの音頭取りで、村の女社会から締め出されつつあるのはひしひしと感じていた。それ自体は想定の内だったし、自分ひとりのことなら耐えられる自信もあった。

ところが、二月ほどして珍しく体調が崩れ、医者様に診てもらうと、どうやら腹に子がいるらしいとわかった。

『あたしは何言われたって、何されたっていい。けど、何の罪科つみとがもないこの子が、やれ父ててなし子だの、脱走兵の子だのって後ろ指差されながら育つのだけは……！』

医者様にそう語ったイツチは、彼の助言に従って、つわりが収まり、腹の子が安定してきた頃を見計らって旅立つことにしたのである。幸い、カノヘから二十五里（約100km）ほど南へ下ったところにあるハクトという村に、医者様の医学所時代の友人が住んでいたので、そこで世話になれるよう手配りもしてもらった。

旅のしたくをしていると、リクの使っていた文机の引き出しから、一通の手紙と、その手紙に丁寧にくるまれた一振りの懐刀ふじころがたなが出てきた。

『此度のこと、どれほど詫びても詫び切れぬほどだ。また、たとえ少しの間でも夫婦として暮らしていたのであるから、子ができているかもしれぬと気にもかかっている。』

この懐刀は、我が家に代々伝わる唯一無二の宝刀である。もし女子が生まれたら、これを売って嫁入り道具を買ってやるように。また、男子が生まれたら、私と同じリクという名をつけ、成人した暁には、この刀を持たせて王都へ来させてほしい。名前と刀、二つの証さえあれば、どれほど成長してようと、私の子だとすぐにわかる。そして、父子の対面が叶ったならば、せめてもの罪滅ぼしに、何とか身が立つようにしてやるつもりだ』

このような形で託すことにしたのは、隠密たちの前で「唯一無二の伝家の宝刀」を人手に渡すのは憚られたからだったのだろう。

《ありがとよ、旦那様。最後まで、こったら氣いつかってくれて…》

押し戴くように刀を手にし、しっかりと懐に収めると、イツチは手紙をいろいろにくべた。道中の護身の手段としても使えそうな刀はともかく、手紙の方は、こうするのが一番だと思ったのである。

《だって、万が一落としてもしたら……》

そうして、まかり間違ってリクの家の子の目に触れるようなことにでもなれば、きつとリクに迷惑がかかってしまう。その文面にこめられた気持ちが本当に嬉しかっただけに、それだけは絶対に避けたかった。

また、同じ理由で、彼の厚意にもすがるつもりはなかった。だから、約束を守るという意味で、月満ちて生まれてきた息子には、名前こそ同じ「リク」とつけたが、何故そのような名をつけたのかも含め、手紙に書かれていた内容は一切教えていない。無論、父親の出自もだ——もつとも、こちらについては、本人がとうとう語らなかったこともあり、相変わらず「たぶん、王侯貴族の誰かなんだろうねえ」という推測で止まっているのだけだ。

ガタン、と音を立てて、ぶんむくれた顔の息子が卓に突っ伏した。

（ま、この子が独り立ちしないうちにあたしが死ぬようなことにもなれば、遺言ぐらいはしてやってもいいけども……）

まんず、それはないだろうねえ、と、イズチは肩をすくめた。何しろ、幼い頃から風邪ひとつ引かず、つわりのときですら寝込んだことがないほど丈夫なのである。

（っていうか、下手したら、この子の方が先に逝っちまいそうだよ）

自分に似たのか大病こそしたことはないものの、父親譲りの小柄で華奢な体格に、人形の如く優しげな顔立ち。おまけに、母一人子一人で育ったせいも、無類の甘えん坊ときている。頼りないことこ

のうえない。

今日も今日とて、中等学校の級友に「チビの女男」とからかわれたとかで、半ベソになりながら帰ってきたのだ。そして、そんな息子を自分の向かいに座らせ、

『何だい何だいそんな情けないことで！ 母ちゃんなんか、あんたの年頃には、もうあんたのことを産んで、ひとりで頑張って子育てしてたんだよっ！！』

と説教したところで、芋づる式にどうしてそうなったのかということまで思い出し、ついついかあっとなってしまったところで今に至る、というわけなのだった。

「……腹減った」

さらに情けない声で、息子が呟いた。再び深々とイヅチは嘆息した。

「まったく説教しがないのな子だねえあんたは。……でもま、確かに時分ときではあるか。どれ、夕飯にでも――」

言いながら立ち上がったところで、突然ぐらりと体が揺れた。

（あ、れ……？）

おかしい。節々に全然力が入らなくて、体の火照りも、さっきと全く変わらない……

「……母ちゃんっ！？ どうしたんだよ母ちゃん、すごい熱じゃないかー！！」

悲鳴にも似た息子の声を聞いたところで、ぷつと意識が途切れた。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

イズチが罹ったのは、この一帯で数年おきに流行る厄介な疫病だった。高熱が何日も続き、激しい嘔吐と下痢にも見舞われる。この結果、脱水症状を起こして三人に一人は死に至るのだ。

一度この病を乗り越えた者には免疫ができ、次に流行ったときには罹らずに済むか、罹っても軽く終わるのだが、イズチの場合は、これまで病気ひとつしたことがなかったことが、逆に裏目に出た。あれよあれよという間に病状は進行し、それからたった三日後、彼女は息子に心を残しつつ、三十四年の生涯を閉じた。

この疫病は三年前にも全国的に流行し、このときには、国王ハシム四世と、嫡子の王太子も命を落としていた。その王太子――ユアンⅡリクこそ、イズチの終生愛した夫・リクにほかならなかったのだが、彼女がそれを知ることとは、ついぞなかったのである。

旅立ち

葬式を出してそろそろ三月は経つというのに、いまだ毎日のように夢に見る。発病後たった三日で、別人のように痩せこけてしまった母の顔。血の気を失った唇から、かすかに発せられた最期の言葉――

『……か、たな……そこの、引き出しの、奥、に……ふところ、がたな、が……それ、持って……み、やこへ、おゆ、き……父ちゃんが……おまえの、父ちゃんが、そこに……』

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

サラハン大陸歴910年、初夏――

「あー、ハクト村のイヅチが息子リク、数え十八（歳）、と……」

目の前に置かれた通行手形を見ながら、関所の役人は、しかつめらしくその内容を記帳した。

「よし、通れ。それから……先刻は、その……悪かったな」

この役人、リクの顔を見るなり、「ここは女子おなごの来るところではない！ 女子の関所は向こうだぞ！」と一喝したのである。

髪を伸ばしていたわけでも、女物の服を着ていたわけでもないのに、「身を守るために男の格好で旅をしている女」だと勘違いされ

てしまったのだ——誰が見ても迷うことなく「女らしい」と形容するような、厄介な造作に生まれついてしまったばかりに。

この冬には満で十七（歳）にもなるのに、いまだに背丈が五尺一寸（約155cm）程度しかないということも手伝って、手形を見せても一向に信じてもらえなかった。拳句の果てに、明らかに下心満載な手つきで全身をくまなく触られ、その手が股間に来たところで、ようやく誤解が解けたのであった。

だから、本音を言えば「『悪かった』で済むんだったら捕り方なんか必要ねえだろ！」と啖呵の一つも切ってやりたいリクだったのだが、とりあえずは、ぐっと我慢した。

（王都^{みやこ}まで、まだまだ先は長いからな……）

ここは、村から三里（約12km）と離れていない最初の関所だった。こんな近場で早くも騒ぎを起こして牢屋にぶち込まれているようでは、いつ目指す場所にたどり着けるかわかったものではない。

「い……いえ、そんな！」

首を振り、精一杯の愛想笑いを浮かべる。が、そこで、しまった、とリクは後悔した。相手の顔が、みるみるうちに首まで真っ赤になっ
って行く。

「とっ……とにかく、もう行け！」

「はっ、はいいーっ!!」

悪いことをしたわけでもないのに、逃げるようにその場をあとにした。一丁（約100m）ばかり離れた場所まで来たところで、ようやく足を止め、ふうう……と息をつく。

「つたく、何なんだよもお……」

自分の笑顔を見て、他人がしばしばさっきの役人のような反応を起こすことに気づいたのは、村の寺子屋を出て隣町の中等学校に進んだ時分のことだった。さらに長じて、数え十五（歳）の成年式を迎える頃になると、女よりも男の方にその傾向が強いという、非常にありがたくない事実にも気づかされた。

（おかげで、ほんととロクな目に遭わないんだよなあ……好きな娘ができたって、いっつも「お友達」止まりだし、男らなんて、二言目には「女男！」だし）

中等学校をはじめとする上級学校は男女別学が基本で、恒常的に異性に飢えていたということもあったのだろう、時には「片恋の女の代わりだ」とか何とか言われて、触られたり、抱きつかれたり、場合によっては押し倒されそうになったりすることもあった——もちろん、手に噛みついたり股間を蹴り飛ばしたりして、どうにかこうにか回避はしてきたのだけれど。

死んだ母・イヅチには、「からかわれたぐらいで涙目になって情けない！」とよく叱られたものだったが、本当のことを言えば、「からかわれたぐらいじゃ済まなかったから」涙目になっていたのだ。しかし、男の誇りにかけても、そのようなことなど、よりによって母に言えるはずはなかったのであった。

（あああ……それもこれも、どう考えたって全部、「父ちゃん」とかいいうクソ野郎に似ちまったせいじゃないか！）

……と言っても、顔も知らない相手なので、本当のところは定かではない。ただ、自分から見て、母に似ていると思われるのは、茶

色い髪と瞳と、村の人々に比べてかなり白い肌ぐらいだったので、ならば顔立ちは父親から受け継いだのだろうと思ったままでだ。

（だいたい、ヤツが生きてるってこと自体、あのときまで全然知らなかったもんなあ俺……）

あんまりにも母がその話題に触れないものだから、てっきりとつくに死んでいるものだと思っていた。

それに、土地がやせていて、農作物を作って売るだけでは暮らしが成り立たないハクト村では、野良仕事をしているのは、年寄りか、それを手伝う女・子どもばかり。父親世代の男たちは、盆暮れや祭りのとき以外は、王都や近在の大きな町に出稼ぎに行っているのが常だった。つまり、どこの家でも「父ちゃんはいない」のが当たり前——だから、自分の家が母一人子一人でもさほど気にならなかったし、そのことを問いただしてみようとも思わなかったのである。

けれど、母が亡くなったあと、言われた場所を開けてみると、確かに、手拭いに幾重にもくるまれた短刀が大事にしまわれてあった。花と鳥らしき図柄の入った黒鞘はかなり古ぼけていて、全く冴えない印象だったが、刃の方は台所の包丁よりもはるかに入念に砥がれており、それだけ母にとって思い入れの強い品であったことが窺えた。

《きっと、体よく遊ばれて捨てられたんだろうなあ……》

「狒狒ひひみたいな母ちゃん」にも「天女」と呼ばれていた時期があった、などとは夢にも思わぬ息子としては、絶対そうだとは思えないようななかった。

《どうせこの刀だって、ヤツにとっちゃガラクタ同然の骨董品だっ

たんだろうさ》

それを、さも由緒ある宝物のように装って母に渡し、「たとえ別れても、この短刀と同じぐらいあなたのことを大切に思っているから。何かあったらいつでも王都へ訪ねておいで」とか何とか、さんざん甘い言葉を駆使して言いくるめたのではあるまいか。

『……だったら、訪ねてってやろうじゃねえか！』

我知らず、眩きが口をついて出ていた。

『んでもって、罵声のひとつやふたつ浴びせて、がっばり慰謝料ふんどくってやるからよ。覚悟しとけ……！！』

正直、雲をつかむような話ではあった。学校の地理の時間はたいてい夢の中だったので、王都がいかにどの広さなのか、具体的な数字はパツとは出てこないのだが、少なくとも、ハクト村などとは比べ物にならないほど大規模な都市であることだけは確かだ。人口だって桁違いなのに違いない。そこで、この刀だけを手掛かりに、たったひとりの人間を捜すなど……

《だけど、村で、いつまでもパツとしない暮らし続けてるよりは、ずうっとましろうからな》

本来なら寺子屋を出たらすぐに働きに出るような身分と暮らし向きであったにもかかわらず、家計を必死にやりくりして、母はリクを進学させ、「いずれは医学所に進んで医者様におなり」と口癖のように言っていた。あるいは、父親自身が、ほかでもない「医者様」だったのかもしれない。

しかし、残念ながら自分には学問はあまり向いていないようだ。リクの方では思っていた。地理もそうだが、歴史や文学の授業にしても、催眠作用のある念仏にしか聞こえない。「乏しい小遣いで、いかに多くのおやつやメンコや喧嘩独楽けんかごまを手に入れるか」といったことに常に腐心していたおかげで、算盤勘定や損得の判断には若干自信があるものの、これも「数学」や「経済学」という学問になると一気に頭痛の種と化す。医師になるのに最も必要となるであろう生物学の授業に至っては、カエルの腑分け（解剖）にすら耐え切れず、かわや厠に走ったという体たらくであった。

かと言って、武術や体術で身を立てられるかというところ、こちらも少々難しそうだった。その昔は「猿まゐ」と呼ばれていた母の血を継いだか、走ったり飛んだりすることは比較的得意だったが、剣術や柔術となると、体格が災いしてか、毎回相手に叩きのめされて終わる。たとえば小兵こひょうであろうと、勝てる者は勝てるのだから、要は素質がないということなのだろう。

これらのことを総合してみると、自分に向いているのは、何かの商売か、出納事務方担当の村役人あたりなのだろうとリクは見ていた。が、村役人は庄屋と同様にほぼ世襲に近く、親が役人ではないリクに割り込む余地はなかった。

となれば、都会へ出て商売を立ち上げ、これを足掛かりに一旗挙げるか、村のほかの男たちと同様に出嫁ぎに行くか……ならば、魅力的なのは断然前者だ。事と次第によっては、王侯貴族並みの大金持ちになって父親を見返してやることだってできるかもしれない。

「……っし、頑張ろ！」

気合を入れ直すようにひとりごちると、リクは再び歩き始めた。この先何があるのかも、果たして父親に会えるのかどうかもわからなかったけれど、とにかく前を向いて進めば、きっと何とかなるは

ず
だ
…
…
…

「災いのもと」、現る……？

その後は、おおむね順調に旅は進んだ。

南下するにつれて、気温が北国育ちの者にとっては尋常ではない暑さに変わって行ったり、相変わらず関所で女と間違われて不愉快な思いをしたり、路銀（旅費）の足しに口入屋で料理屋の下働きの仕事を紹介してもらい、皿洗いや掃除のつもりで出かけてみたら、女の着物を着て酌をすることを求められてやっぱり不愉快な思いをしたり……といったこともあるにはあったが、大きな事故に遭ったり、大病をしたりすることに比べたら、まあ「ささやかな災難」の範囲内であつたろう。

それに、意外にも、この外見で得をしたことも多々あった。宿屋の、特に女将さん連中に、かなり受けが良かったのだ。ただでさえ顔立ちが「可愛らしい」部類に入るうえに、小柄で華奢なところが、いわゆる母性本能をくすぐるのだろう。

毎回のように「まだ小さいのに、ひとりで旅してるのかい！」と誤解されるのが難点ではあったが、そこで「いえ、俺はもう数え十八で」などと余計なことを言っただけではない。「はい、母ちゃんが死んじゃって……生き別れた父ちゃんを捜して王都まで行く途中なんです」としおらしい声音で答えれば、たいてい「そうかい、それは大変だねえ……」と宿代を大幅にまけてくれるうえに、翌日の朝昼の弁当まで作って持たせてくれるのである。

もわっと熱い空気に、ようやくいくばくかの秋の気配が混じり始めた頃、何とか王都から十里（約40km）ちよつとのところまでたどり着いた。

リクの身分と手持ちの路銀では、当然全行程徒歩であるが、街道

には、土煙を上げて駆けて行く騎士の馬や、軽快な足取りであつた
いう間に遠ざかつて行く豪商の籠や、悠然とすれ違つていく貴人の
牛車ぎっしゃの姿もあつた。

そういった「いけ好かねえ連中」を横目に、あらためてきつぱりと決意を固める。

（いつかは絶対乗ぜってーつてやる！！）

そして、どこかに座つて今朝持たせてもらった弁当でも食おう、と路傍の様子を見渡したところで、不意にリクは目を剥いた。真っ黒い何かが、猛然とこちらへ向かつて飛んできたのだ。

（な、何だあ……！？）

呆然としているうちに、突然視界が真っ暗になった。「何か」が、まともにべしゃつと顔面にぶつかったのである。

「うおっ！！」

あわてて引き剥がそうとするのだが、爪のようなものがっちりとしがみつかれていて埒が明かない。

（猫？ 蝙蝠……！？）

って、猫は飛ばねえか——内心で自分に突っ込みを入れたところで、やっと相手の力が緩んだ。

「ったく——」

ボヤきつつ、その首根っこをつかんで、ぶらーん、とぶら下げる。
が、そこでリクは再び目を剥いた。

その生き物はもちろん猫ではなかったし、さりとて蝙蝠でもなかった。手のひらに乗るほど小さく、胴体とほぼ同じ長さの尻尾を含む全身が、真っ黒な鱗うろこに覆われている。頭から背中にかけてだけは、やはり黒くてぼわわした鬣たてがみが生えており、この鬣の間から、ピンと立った耳と、瘤こぶのように小さい灰色の角が二本覗いていた。口元には真っ白な牙。背中には、それこそ蝙蝠のような翼が一对――

(……って)

ぞぞぞ、つと背筋を怖気おぞけが走った。まさか、これは……

「どわあああゝゝゝつつっ!」

思わず叫び声を上げて、リクはそれを投げ捨てた。きゅうつ、という悲鳴が聞こえた気もしたが、そんなものに構ってはいられない。

「わ、わ、『災いのもと』だあゝゝゝつつっ!!」

ダン、と地面を蹴っ飛ばすと、脱兎の如く彼は駆け出した。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

サラハン大陸に並び立つヘキギョク(通称・上つ国^{かみくに})、カムナギ(中つ国)、ウナバル(下つ国^{しも})の三国には、こんな伝説が伝わっている。

はるか太古の昔、この大陸には人だけでなく、竜の一族も暮らしていた。姿かたちの全く違う二つの種族は、それはそれは仲が悪く、あるとき、とうとう戦^{いくさ}が起こった。

最初は、空を自由に飛べる竜族が圧倒的優位に立っていた。けれど、人族も負けてはいなかった。空を飛べない分、知恵を絞って、ついに竜族を撃退したのだ。

敗北した竜族は、天高く、雲の上まで逃げて行き、そこに「天空城」を構えて竜の国を建国した。そして、今も彼らは、水晶玉を通じてこの城から地上界を覗いては、人族へ復讐する機会を狙っているのだという――

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

そんなわけで、この三国の民の間では、竜といえば「災いの象徴」。祭祀をつかさどる僧侶や呪術師の中には、「竜の姿を見た者は必ずや不幸になる」と断言する者さえある。子どもたちは、これを寝物語に聞かされて育ち、どんな悪童でも、「竜に連れに来てもらうぞ!」と一喝されれば、たちまちべそを掻いて謝るほどであった。

(で……「あれ」って、どう見ても、その「竜」ってヤツ、だよな……?)

しかも、角以外、頭のとっぺんから尻尾の先まで真っ黒ときいてる。

(……でえええっ、不吉だあ! 不吉すぎるよおおおっ!っ!)

心中でさらに悲鳴を上げつつ、リクは走った。全速力で走った。ひたすら走った。わき目も振らずに走った。一刻も早く、少しでも遠く、あの生き物から離れるために……何しろ、一生が決まるかもしれない旅の途中なのだ。あんな「験げんの悪い物もん」のせいで水を差されたら、たまったものではない。

ところが、しばらくして何気なく後ろを振り返ったリクは、げ、と硬直した。

(何、で……)

一間けん(約1.8m)と離れていないところに、黒竜がいた。小さな翼を目一杯広げ、異様なまでの速さで滑空しつつ、どんどんこちらに近づいてくる。

(何っっでくっついて来んだよこいつ……っっっ?!?!?!?)

心で絶叫したのと、スーッと前に回り込まれたのが、ほぼ同時だった。

(うっわ……)

へなへな、と座り込むと、リクは天を仰いだ。すっかり息が切れていた。膝もガクガクと笑っていて、走ることはおろか、立ち上がることもすら、もう無理だ。

「ええい、こうなったらヤケだ!」

やぶれかぶれに、開き直る。

「煮るなり焼くなり、好きにしゃがれ……!!」

すると、黒竜はゆっくりと地上に下りた。黒くて丸い目が、ひたとこちらを見つめる。

「きゅう……」

甲高い声が、牙の間から漏れた。刹那、リクはあっけに取られた。相手が、まるで謝罪でもするかのように、ぺこり、と頭を下げたのだ。

「おまえ……さっきぶつかったこと、謝ってる、のか……？」

つい話しかけてしまったから、リクは苦笑した。

（何やってんだ、俺……）

竜に人の言葉など、わかるはずもないのに……

そんなリクを尻目に、黒竜はくると踵を返した。何故か今度は飛ばずに、とてとてと歩き始める。

（……へえ）

自分でも信じがたいことに、その後ろ姿にリクは目を吸い寄せられていた。

（よく見たら……案外面白^{おもしろ}えな、こいつ）

短い足で、長い尻尾を振り振り、とてとてとて……「不幸を

運んでくるもの」というよりは、愛すべき珍獣といった趣だ。

と、突然、その背中が前のめりになった。かと思うと、ぱたん、とその場に倒れ伏す。

「おいっ!?!」

とっさに、リクは相手を拾い上げていた。手のひらに寄せ、ちょいちよい、と頬のあたりを指で突いてみる。

「おい! 大丈夫かよ、おいっ……!?!」

「きゅ……」

かすかに鳴いて、黒竜は薄く片目だけを開けた。

『腹が、減った……』

「……何だ」

一気に脱力して、リクは大きくため息をついた。

「まったく、驚かせんな——」

たしなめかけて、え、とまたしても硬直する。

(こ、こいつ……今、喋らなかった、か……!?!?)

しかも、その声ときたら——ちんまりした外見とも、それまで発していた「きゅう」という啼き声とも、全くと言っていいほどそぐわない。低くて渋くて、まさに「大人の漢^{おとし}」という形容がふさわしいような……

(何だよ、こいつ……)

頭の中を、大量の疑問符が飛び交い始める。

(こいつ、いったい何者……!?)

すると、黒竜が、再び「きゅるっ、きゅるる……」と小さく啼いた。それと重なるようにして、先ほどの重低音が響く。

『ああ……団子が食いたい……』

「はぁ!？」

すつとんきょうな声をリクは上げ……さらにがっくりと脱力した。

「おまえな……そういうことを、そういう声でしみじみと呟くなよ」

——そんな黒竜が、この先、自分の人生にこれでもか、というほど関わってこようとは、このときのリクには、まだ知る由もなかった。

さっそく、事件です！

誰かに見られでもしたらまずかろうと思い、黒竜のことは懐に入れて、茶店を目指すことにした。茶店なら、黒竜が食べたがっている団子も売っているだろうし、店主に断って、茶の一杯も別に頼めば、リクの手持ちの弁当も食べさせてもらえるはずだ。

唯一の問題は、懐に余計なものが入っているせいで、着物の帯の上あたりが不自然に膨らんでいることだった。そう、ちょうど女の胸元のように……

「よおよおねえちゃん！　ひとりっきりでどこ行くのお？」

「なあなあ、俺らと遊ぼうぜえ？」

案の定、茶店を見つける前に、目ざとい遊び人風の連中に見つかった。

（だあれが「ねえちゃん」だっつーのっつー！！）

リクは憤然としたが、口には出さなかった。最初に声をかけてきたのは腕全体に真っ青に刺青を入れた着流し姿の男で、もうひとりとは坊主よろしく紫の袈裟など羽織り、金剛杖を手にした男——どちらも筋骨隆々として、腕っ節ではとても敵いそうにない。こういう手合いは、無視してやり過ごすに限るのだ。

折良く、探していた茶店が目に入った。すかさずそこへ駆け込むと、リクは、店先にいた女将にひしつとすがりついた。

「助けて！　変なヤツが……！！」

「何だって!？」

在りし日の母・イツチを思わせるような貫禄たっぷりの女将は、
たちまち目を吊り上げて、ぎろりと男たちを睨んだ。

「ウチの前で騒ぎを起こそうたあ、随分といい度胸じゃないか。言
つとくけどね、ウチの亭主^{ひと}は、御上^{おかみ}から御用を仰せつかってるんだ。
あんたらみたいな破落戸^{へらくつぎ}なんか、あつという間にお縄にされて牢屋
行きだよ! ……あんた、ちよいとあんた、出ておいで!!」

幸運にも、どうやらここは捕り方の住まいでもあったらしい。ち
つと舌打ちして、男たちは去って行った。

「ありがとう、おねえさん!」

にこつと笑うと、ぺこつとリクは頭を下げた。実は、どう見ても
「おばさん」にしか思えない女将なのだが、そこはそれ、笑顔と同
様、お得意の処世術という奴である。

そして、その狙いは見事に当たった。

「あれま、おねえさんだなんて……嬉しいこと言ってくれた礼に、
お茶ぐらい御馳走しようかね」

「ええっ? いいよ、そんな……俺、ほんとのこと言っただけなん
だし」

「まあ、やだよこの子は。ほんとに口がうまいんだから——って、
あんた男の子だったのかい! いや、ごめんねえ。可愛い顔してる
し、あんなのに追っかけられてたから、てつきり、その……」

「ああ、いいいいよ、気にしないで。いつものことだし、おねえ
さんに『可愛い』なんて褒められたら悪い気しないし」

「そうかい？　ならいいけど……そうだ、勘違いの詫びに、もう一品つけたげるよ。何がいい？」

「ほんとっ！？　じゃあさ、団子一串くれる？　あと、良かったらなんだけど、その縁台で弁当も食わしてもらえると……」

「ああ、いいともいいとも。ゆっくり食べて行きな！」

胸を叩いて請け合うと、女将は店の奥に消えた。と同時に、こそこそ、と膨らんだ胸元が動く。

『おい……良いのか？　いくら金子きんすを払わずに済んだとはいえ、おまえが侮辱されたことには変わりないだろう。だいいち、「おねえさん」とは若い女性にょしょうのことではないのか？　あの女将に対してそのような呼称を使うとは、まるで詐欺——』

「バカ、いいんだよそれで！」

慌ててリクは遮った。

「竜の世界ではどうだか知らないけどな、人の世界じゃ、こういうのは互いにわかってやってるもんなんだよ」

『わかって……？』

「ああ。女将さんだって、あんなのは俺の世辞だって百も承知だよ。でも、わかってたって、ああ言われりゃ気分が良くなるもんなんだ。俺にしたってそうさ。確かに何にも思わないつつたら大嘘になるけど、結果的には、こっちの得になることの方が多かった——つまり、双方不愉快な思いはしてないってことだろ？　おまえみたくなかつ正直にほんとのことなんか言ってみろ、団子さえ売ってもらえずに店から叩き出されちまうのがオチだぞ」

『そ、そうなのか？　それは困る』

きゅう……と情けない声を発して、黒竜は黙り込んだ。

やがて女将がお茶と共に運んできたのは、ひしお醬と砂糖と酒で甘辛く味をつけた団子と、餡子のたっぷりついた団子の二種類だった。リクは「団子一串」と頼んだはずだったのだが、これも、たぶん「おねえさん」の礼のつもりなのだろう。

「きゅん！」

興奮したように声を上げると、黒竜がぴよこりと顔を出した。

「こちら、それじゃ見つかるって。それに、できたてでまだ熱いし……」

リクがたしなめるのにも構わず、ぱくり、と彼が持っていた餡団子の串にかぶりつく。とたん、それこそあつという間に見つかりそうな勢いで、甲高い悲鳴が響き渡った。

「きゅいゅんっ!!」

「ほーら、だから言わんこつちやない」

肩をすくめて、リクは黒竜を懷の中へ押し戻した。ふう、ふうと、息を吹きかけて、念入りに団子を冷ましてやる。

「しかし、竜のくせに猫舌かよ。ほんと、変わってんなあおまえ」
「……きゅんっ！」

ぶんむくれたように応じると、くるりと黒竜は蜷局とぐろを巻いた。

[illegible]

互いの食欲を満たし、店をあとにしたのは、それから四半刻（約30分）ほどあとのことだった。

「なあ、おまえ」

懐の黒竜に向かって、リクは声をかけた。

「腹も膨れたんだしさ、そろそろ——って、寝てんのかよっ!!」

懐は、規則正しく上下を繰り返していた。よくよく耳をすますと、イビキらしきものも聞こえてきている。

（やれやれ……）

リクはため息をついた。

先ほど来の様子を見て、相手に対する偏見自体はだいぶ薄れつつあったものの、だからと言って、いつまでもこの生き物を懐に入れたまま旅を続けるわけには行かない。

何しろ、自分は王都で商売を始めようと思っているのだ。もし「災いの元」が傍にいる、などとわかったら、その商売に大いに差し障ってしまうだろう。今回はたまたま一銭も払わずに済んだが、食い扶持だって確実に増える。竜が財布を持っているなどとは聞いたこともないから、当然、それは自分の乏しい手持ちの中から出さねばならないわけで……

「おい、起きろ——」

着物の上から相手を揺り起こしかけて、しかし、リクはその手を止めた。

（やっぱ、もうちょっとぐらいなら、いっか……）

鱗などで覆われているから、魚や蛇のようにひんやりとして、触れた感じも、ゴツゴツ、ぬらぬら、べちよべちよといった不快なものを想像していたのだが、実際にはそうではなかった。

（案外、あったかいんだな、こいつ……）

どちらかといえば、犬や猫の仔を抱いているような気分だ。手を触れている部分からは、着物を通して、どく、どくと心臓の鼓動が伝わってくる。それに、すう、すうと安心し切ったような寝息——本来ならば、彼ら竜とリクたち人は「敵」同士。いわば「敵の手に落ちた」も同然なのだから、もっと警戒してしかるべきだろうに……

（……やっべ）

一瞬、冗談抜きに母性本能をくすぐられてしまった——男なのに。

「きゅうん……」

懷の中から、かすかに啼き声が聞こえた。

「おう、起きたか」

ならば、今度こそ、これからの話を……そう思って覗き込んでみると、相手はまだ蜷局を巻いたままだった。

「何だ、寝言かよ……」

というか、竜でも夢を見たり、寝言を口走ったりすることがあるのだろうか——そんな素朴な疑問が胸中を去来したそのとき、黒竜が小さく頭を振った。

『か、んにん……』

あの重低音の「人の声」だった。が、今までとは違い、か細く、震えてすらいる。そして、その声に連動したかのように、全身も小刻みに震え始めた。

『かにん、して……あね、さ……ク……ユ、イ……』

「かにんして」とは、確か「申し訳ない」ということだったか——リク自身は、ほとんど使わない言葉だ。西の隣国・ウナバルの言い回しで、そこからたまに物売りにやってくる商人からは何度か聞いたことがあったが……

（そしたら、こいつ、下つ国しもくにから来たのか……？）

たかだか団子を恵んでやっただけの自分に、こんなにも無防備に懷いてしまったのも、異郷の地で、異形ゆえに誰かに頼ることもできず、ひとり心細い思いをしていたから……？

ぐっと胸を衝かれた刹那、予期せぬことが起きた。

いきなり体が宙に浮いたかと思うと、ビターン、と地面に叩きつけられたのだ。誰かの足に引っかけられ、転ばされたのだと悟るのに、数瞬を要した。

「いってて……」

まともに地面に打ちつけたのか、鼻に妙な違和感がある。口に流れ込んできた鉄の味に顔をしかめたところで、胸元がぺしゃんこになっているのに気がついた。

（げ、つぶしちまった！？）

慌てて跳ね起きて、探してみる。

（良かった、いねえや……）

どうやら黒竜は、今の衝撃で懷から飛び出したようだった。が、安心するのはまだ早かった。

（ちょっと待て。どこ行ったあいつ！？）

あんなにチビで、外^と国から来て右も左もわからなくて、おまけに「災いの元」なのだ。今度、誰か別の人間に見つかって捕まりでもしたら、どんな目に遭わされるかわからないではないか……！！

「おーい——」

しかし、呼びかけようとした声は、そこで凍りついた。みるみるうちに、全身から血の気が引いて行く。

「おい。さっきはよくも恥掻かせてくれたな！」

「何でえ、おまえ男だったのかよ。だったら、お兄さんたちにちょっと金貸してくれや。……返さねえけどよ！！」

先ほどの二人の破落戸どもが、ニヤニヤしながら立ちはだかって
いたのである。

ウソだろマジかよ信じらんねえ!!

「あ、いやあ……ははははは……」

ひきつった笑いをリクは浮かべた。「まったく冗談じゃねえぞ！
だあれがてめえらなんかに……！！」と啖呵を切ってやりたいのは
山々だが、彼我戦力があまりに違いすぎる。

「えーっと、その……じゃっ！！」

片手をひよい、と挙げたのと同時に、リクは前方に突進した。まさか自分から向かってくるとは思わなかったのだろう、破落戸ごろつき二人は、たじろいだように身を引いた。

すかさずその間を駆け抜け、リクはひたすら突っ走った。全速力で。わき目も振らずに。一刻も早く。ちよっとでも遠く……

（……って、さっきから俺、こればっかだな）

だが、こんな連中に関わっていたら、金を巻き上げられるのはもちろんのこと、命だってどうなるかわからない。

（そうさ、命があれば何でもできる！　これ、俺ん家の家訓っ！
……今決めたんだけどっ！！）

ところが、数丁（数百メートル）と行かないうちに、急に足取りが重くなった。

（まずいな……）

思えば、こうして突っ走るのはこれで二度目なのだ。それも、団子屋での休憩をはさんで、ほぼ立て続け——脚力だって落ちるはずである。

「ぜ……は……はぁ……」

だんだん息が上がり始めた。左の足首の具合も、何だかおかしい。関節が浮いているような感覚と、ずきずきとした痛みが、数歩おきに襲ってくる。

（そっか……引っかけられたとき、ひねっちまったんだ……）

そう思い当たった瞬間、とうとう、かくんと体が傾き、ザザーッとその場に転倒した。

「う……ううっ……」

再び傷めた足首を押さえて、リクは呻いた。どうか振り切れていきますように、と祈る気持ちで後方を窺う。が、祈りむなく、破落戸たちはしつこくリクを追ってきていた。

（やっべ、こんなところで座り込んでる場合じゃねえぞ……）

渾身の力をこめて、リクは立ち上がろうとした。とたん、激痛が足から脳天までを貫き、またしても呻き声を上げて倒れ込む。逃げるどころか、もはや動くことすらかなわなかった。

（これまでか……！）

観念して、リクは目をつぶった——

「うぎゃあああああ!!」

突如、絶叫が響き渡った。

(……へ?)

驚いて、リクは目を開けた。恐る恐る、後ろを振り返ってみる。
そして……啞然とした。

本来なら喜ぶべき場面が、そこには展開されていた——悲鳴を上げてのた打ち回っていたのは、刺青の男だったのだから。その手は必死に右目を押さえており、そこからは、だらだらと血が流れ落ちている。

「い、痛^{いて}え……痛えよお……!!」

「だっ……誰でえ、こんな真似しやがったのは!」

仲間を襲った突然の悲劇に、袈裟の男が怯えたような声を張り上げた。

「ふ、ふ、ふ、ふざけやがって……!!」

「ふざけてなどいない」

間髪入れずに答え、ずずいと進み出たのは、リクの全く知らない男だった。六尺(約180cm)はありそうながつしりとした長身に、ほんの少し癖のかかった長くて黒い髪。浅黒く彫りの深い顔立ち、役者と見まごうほど整っている。

つまり、この男こそが、刺青男に華麗なる一撃を放った「救いの神」だったのである。その状況から考えても、まさに颯爽という形

容がふさわしい登場ぶり――

――の、はずなのだ、が。

（ど、どうしょ……俺、全然喜べねえんだけど）

刺青男の目には、串が突き立っていた――明らかに、どこかで見た竹串が。

「私は極めて大真面目だが？」

そう続けた声にも、これまたどこかで聞いた覚えがあった。いかにも「大人の漢^{おとし}」という感じの、渋みの効いた重低音……

（こいつって……黒竜^{あいつ}、だよな……？）

あの、ちんちくりんとてとて歩きの黒竜の特徴自体は、かけらほども残っていなかった。けれど、声が声だし、得物（武器）に至っては団子の串ときているのだ。おまけに……

（何ってこいつ、上半身真っ裸^ばなんだよおおおっ！！）

下半身だって、どこから持ってきたのか、薄汚れた変な布きれを形ばかり巻いただけで……風呂上がりか！と突っ込みたくなるような姿である。そんな外見^{なり}をしておきながら、「大真面目」と言い切るその「ズレっぷり」――どう考えても、あの黒竜以外あり得ないではないか。

「ち、ち、畜生お……おっ、覚えてやがれ……！！」

お決まりの捨て台詞を放った袈裟の男が、相棒をひきずってささと逃げて行ったのも、恐らくは「危ない」と直感したからなのだろう——いろいろな意味で。

そして、そう思ったのは、どうやらリクひとりだけではなかったらしい。ただでさえ「関わりたくない」という風情で遠巻きにこちらを見ているだけだった人の群れが、あっという間に掻き消えた。誰もが、まるで今のことなどなかったかのような顔で、心なしか足早にその場を去って行くこうとしている。

（何か、俺も、ちょっとこの場からいなくなりたいんすけど……）

思わず、リクはべそを掻いた。はつきり言って、不本意だったのだ——

「まったく、何を考えているのやら……嘆かわしいことだ」

自分の方がよっぽど「何考えてんだか」という格好のまま、もつともらしくため息などついているこの男と「仲間だ」などと思われるのは。

「どうした少年。先を急がんと日が暮れるぞ」

「……ええ、急ぎますとも!」

あんたと別経路でね……!! と、こちらは助けられた手前こそり心だけで呟くと、リクは、傷めた足を引きずりながらも、猛然と歩き始めた。

あとには、怪訝な顔の黒竜のみが残された。

「何だ、助けられたというのに礼の一言も言わずに」

ぼそり、と黒竜は呟いた。それから、あらためて自分の身を眺め、はあ、と深くため息をつく。

（まあ、この姿ではしかたがない、か……だが、私とて、好きでこのような有様になったわけではないのだがな）

一刻も早く助けたいと思った。そのためには、小さくて非力な仔竜の姿ではなく、人の姿になる必要があった。ところが、何しろ竜は服を着ていないから、そのままでは上半身どころか全裸となってしまう。それで、とりあえず下半身だけ隠して、急いで駆けつけたのだ。

（こんなことなら、多少無理をしてでも、衣服の入った巾着を持ってくるのだった……）

天を仰ぎ、慨嘆したそのときだった。いきなり、強烈な眩暈に襲われた。

（……しまった！）

仔竜であったときなら、団子一本で十分に腹が膨れた。が、六尺余りの人にとっては、それでは全く腹の足しにならない。それなのに、あのような形で体力を使ったりしたから……

しかし、時、既に遅かった。すうつと目の前から色彩が消え、やがて、ぷつん、と意識が途絶えた。

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

次に気がついたときには、布団の上に寝かされていた。

(ここは……宿屋、か……?)

見回すと、果たしてそこは宿屋の大部屋であるようだった。相部屋になった男たちの好奇の混じった視線を感じて、慌てて我が身を確認してみると、いまだ人の姿のままであった。どうやら、「竜だから」ではなく、「病人らしき者が運ばれてきたから」、様子を窺われていたものらしい。

「……目え覚めたか」

ぶっきらぼうな声が頭の上から聞こえた。

「少年——」

「『少年』じゃねえ、リクだ」

さらにぶっきらぼうに、リクは答えた。その眉が、次の瞬間、ぴーん、と吊り上がる。

「ああああもお、おまえってヤツは……っっ！

そりゃあ、おまえのおかげであいつらにとっ捕まらないで済んだことは認めるよ？ けどな、それと引き換えに、どんだけ俺が大変な思いさせられたか！

ああやって半身真っ裸で現れられただけでも十分こっ恥ずかしかったのに、そのカッコのまんま、あんな道端でぶっ倒れやがって……『あれ、あんたの念兄（男色における攻め役）じゃないのかい』

って知らねえヤツに呼びに来られたときには、こっちがぶっ倒れそうになったぞマジで!!

おまけに、んなこと言われたせいで、今度はその辺のヤツらみんなに思いつ切りヘンな目で見られてさ。で、その「ヘンな目」浴びつつ、おまえ引きずって、まずは呉服屋行って、ほら、今おまえが着てるその服買って。おまえ寝かすのに宿探して、泊まる算段もして――ああ、ぶっちゃけ地獄だったねほんと! 足は痛えし、おまえ超重いし……氣い失ってっから余計にさ!!

あと、服代と宿代、当然いっぺんになんか支払えねえから、どっちもツケにしてもらう羽目にもなるし――おかげで今晚っから、この風呂掃除に便所掃除に皿洗いに……ああ、おまえは手伝ってくなくていいからな? んなことされたら、かえって仕事が増えちまいそうだからっつ!!」

こちらに口を差し挟む暇も与えず一気に喋り倒すと、ぜい、ぜい、はあ、はあと肩で息をつく。確かに、相当疲労困憊しているように見えた。

「その……済まなかったな」

身を起こすと、ひとまず黒竜は頭を下げた。

「頭を触ってくれれば、竜体になったのだが……」

「りゅう、たい……?」

リクの目が、裏返らんばかりにひん剥かれた。それ自体は、黒竜がとっさに思いついた造語である。「竜の身体」や「竜の姿」などと言えば同室の者がどんな反応を示すかわからないので、音を聞いただけでは何のことだかわからないような、しかし、彼が竜であることを知っている者――つまり、リクが聞けば、なるほど、と思い

当たる表現を使ったのだ。

「ってことは何か、あそこでおまえの頭を一発ひっぱたいてササツと懷あたりに突っ込んだきゃ、少なくともそのあと、あんな重たい思いだけはしなくて済んだ、と……」

「まあ……そうなるな」

「……それを先に教えろ、この大バカ野郎ーっっ!!」

黒竜の胸ぐらを引っつかんで、リクは吼えた。

黒竜、はじめてのおてつだい!？」

「……カイっ!!」

それから半刻（約1時間）ほど後。相変わらず、リクの眉は吊り上がりまくっていた。

「俺、おまえに『手伝うな』って言ったよなあ……!？」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「カイ」というのは黒竜の名だ。人前で「竜」という言葉を連呼するのも憚られたので、自分が名乗ったのをきっかけに確認したのである。

思えば、そのときの方が、まだ状況はましだった。というか、その時点が最高だったとも言えた。

くるぶしの痛みがなかなか引かず、このままでは約束していた宿の手伝いにも差し支えそうだったので、荷物の中から湿布薬と包帯を出して手当てをすることにした。すると、「ひとりでするのは難儀であろう」と言って、カイが包帯を巻くのを手伝ってくれたのだ。最初は「ほんとに大丈夫なのか……？」と危ぶんでいたリクだったのだが、相手が手を動かし始めた瞬間、息を呑んだ。

『おまえ、医者様みたいだな……』

実際、巻き終わる頃には、痛みはほぼ半減していた。しかも、カ

イは、この処置に加えて、どうやって交渉したのか宿屋の主人から水を少しばかり分けてもらい、手拭いに包んで患部を丹念に冷やしてもくれた。おかげで、板場（厨房）に手伝いに向かう刻限には、歩くのにもほとんど不自由しなくなった。

だから、カイは満で二十歳だとも言っていたので、明らかにあり得ないことではあるが、「もし父ちゃんって野郎が医者様だったら、こんな感じのヤツなんだろうか……」などということさえ、ちらりと思っただったのに……

大部屋に泊まっている者たちは外で食事をするのが普通だが、個室を取るような金持ち連中は、自分の部屋に運んでもらって食えることが多い。彼らの使った食器を洗うのが、今夜の板場でのリクの仕事だった。

ところが、あれほど「手伝うな」と言い含めていたはずのカイが突然現れ、洗い終わった食器を重ねて棚にしまおうとしたのである。本人は「やはりおまえひとりでは大変そうだから」と言っていたが、まず間違はなく、くるぶしの手当ての件で調子づいたからなのに決まっている。

しかし、柳の下に同じドジョウは二匹とないものだ。折悪しく、そこへ板前のひとりがやってきた。そして、食器を抱えて一歩踏み出そうとしたカイと派手に衝突したのである。

ぽんっ！

腹が立つほど小気味いい音と共に、リクの目の前で着物「だけ」がふわりと宙に浮いた。それが、ふあさり、と床に落ちたのと、がっしやーん！！と全部の皿が床に叩きつけられたのが、ほぼ同時であった。

『うわあぁっ！ すみませんすみませんすみませんっっ！！』

慌てて、リクは平身低頭した。とにかく、ここは謝り倒すしかない。それに、人ひとりが忽然と消え失せた、という不可思議な状況を、一刻も早く相手に忘れさせねば……という思惑もあった。

『すーっつぐに片付けますからっつ!!』

もう一発、深々と頭を下げて、そのついでに、足元の着物を「中身」ごとひょいとつまみ上げる。

『とりあえず、まず、これ何とかしますねえ!』

お愛想笑いしつつ、いかにもそれをどこかへ捨てに行くようなふりをしていったんその場を離れ――

『……カイっ!! 俺、おまえに「手伝うな」って言ったよなあ……!?!?』

――この時点に至るのであった。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「いいか？」

こそこそ、と声を潜めて、リクは命令した。

「人目につかないところにぶん投げてやるから、さっさと人になって、ここの掃除しろ!」

「きゆう……?」

布地の内側から、怪訝な声が響く。

『何故だ……今「手伝うな」と言うたばかりではないか』

「……あのなあ!」

ますますリクは眉を吊り上げた。

「これは『手伝い』じゃねえ、『落とし前』だ! 自分の尻拭いぐらい、自分できつちりやりやがれっ!!」

言い捨てて、憤然と元の場所に戻る。

(……とはいえ、俺も知らん顔ってわけには行かねえだろうなあ)

ため息をついて、リクはその場に屈んだ。

床の上は、まるで花火大会のような有様になっていた。赤やら青やら黄色やらの派手な絵皿のなれの果てが、あっちこちと一面に飛び散っている。薄青色の模様入りの破片は、醬か味噌用の小皿だろうか。てろんと茶色いかけらは、たぶん、酒か何かを入れるぐい呑みといったところか……

(まあ、俺でも泊まれるような宿だ、目ん玉飛び出るほど高価な品ってのはないだろうけど……)

それでも、これだけたくさん割れてしまったのだ、一日や二日ぐらい無償働きしたところで、弁償し切れるかどうか……

(……ああああ、それもこれも、ぜくんぶあの「バカ竜」のせいだ

！)

「伝説」は、正しかったのだ。実際、あの竜と出会ってから、口
くな目に遭っていないではないか……

「おい、いつまでぐずぐずしてんだよっ!!」

たちまち腹わたが煮えくり返ってきて、リクは相手を「捨ててき
た」方に向かって怒鳴った。

「さっさと——」

しかし、そこで彼は瞠目した。

リクに言われるまでもなく、カイは「さっさと働いて」いた。そ
れも、文字通り「さっさと」——「ものすごい速さ」で。

異様に慣れた手つきで、床に散った皿のかけらを次々、次々と小
脇に抱えた塵箱ごみに入れて行く。それが終わると、いつの間に見つけ
たのか、短めの棕櫚しゅうろ箒を持ってきて、食器をぶちまけた場所のみな
らず、板場の床という床を一寸の隙もなく掃き清める。さらにその
床を、これもどこからか持ってきた雑巾で、きゅっきゅ、きゅっき
ゅと磨き上げ……

「……って！ こっ、こらこらこら、待てってば、おい……!!」

ぶったまげて、リクは相手の次の動きを制した。

「何、床なんか舐めようとしてんだよ、おまえ!?!」

いくらきれいに拭いたとはいえ……面妖な趣味の客を取る店でも

あるまいし。

しかし、カイは顔色ひとつ変えなかった。

「以前、教わったのだ。掃除をしたあとは、本当に何も残っておらぬかどうか、必ず舐めて確認しろと……」

「……げ」

どんな教えだ、それは――それとも、竜の国では、それが「常識」としてまことしやかに通用しているのだろうか？

「なあ……それ、絶対おかし^{ぜってー}いって。誰に教わったんだよ、そんな妙なこと？」

「そうだな……遠い親戚と言ったところか」

ふと、記憶をたどるまなざしになってカイは答えた。

「事情があつて預けられていたのだが、そのこの当主の息子が、よくこのように床に食器をぶちまけてな。それを掃除するのが、私の日課のようなものだった……」

「……おまえさあ」

リクは、ありありと顔をしかめた。

「それって、もしかして……ってか、もしかしなくても、はっきりきっぱり『いじめられてた』んじゃないね？」

「そうとも言うな」

あっさりと、カイは肯定した。その表情が、次の瞬間、何故かふつと緩む。

「そうか……やはりあれは『嫌がらせ』であって、『常識』ではなかったのだな。いや、自分でも、不愉快だとはいつも思っていたのだ。だが、もし、それが世の習いであって、万民が同じようにしているのであれば、私も我慢すべきなのだろうな、とも……しかし、そうではなかったのだな。良かった。あのような思いをしていたのが私ひとりだけであって……」

「カイ……」

微笑みさえ浮かべて述懐する相手を、信じ難い思いでリクは見つめた。

「おまえ、相当なお人好しだな——そんなことだから、つけ入れられていじめられたりするんじゃない？」

言いながら、心の隅に、妙な引っかかりを覚える。が、その「引っかかり」が何なのかを見極める前に、背後でどよめきが上がった。

「おおっ、こいつあすげえ！」

「まるで職人技みてえにぴっぴかじゃねえか！！」

「ウチにも掃除しに来てもらいたいぐらいだよ」

驚いて振り返ると、板前や下働きの女たちが揃って感嘆の声を上げていた。その中には、何と宿屋の主人の顔も見える。

「いやはや、思っていた以上の仕事ぶり、感心しました。その気持ちの印と言ってはナンですが、湯屋の掃除のとき、ついでに一風呂浴びてくれて構いませんよ——無論、追加のお代はなしでね」

「鍋釜も磨いてくれたら、あとで賄いも差し入れてやるぜ。さっきの詫びも兼ねてな」

横合いから、カイとぶつかった板前も口をはさむ。

「うわぁ、ほんとつすか!?!」

たちまちリクは舞い上がった。食事と同様、宿屋備えつけの内風呂も、基本的には個室の客のもの。大部屋の客は別料金を払わねば入れないので、外の湯屋に行くのが当たり前だったのだ。それに、板場の賄いとはいえ、食事代が浮くのもありがたかった。

「よしカイ、それじゃ、まずは鍋釜から行くか!!!」

張り切って、彼はカイを急ぎ立て……それっきり、「引っかかり」のことはすっかり忘れてしまった。

廁と湯屋でも大騒ぎ!

板場での作業が一通り終わると、二人は廁かわやへ移動した。廁掃除も約束のうちであったし、湯屋の方は、まだ人が使っている気配がしていたので後回しにすることにしたのだ。

「……なあ」

先ほどと同じ調子で壁やら床やらをきゅつきゅ、きゅつきゅと拭き清めているカイを見やって、おもむろにリクが口を開いた。

「ひょっとしておまえ、食器の始末だけじゃなくって、便所掃除も『日課のようなもの』だったとか……?」

あの板前たちの言ではないが、カイの手つきときたら、まさに本職の掃除屋のようだったのだ。こうして見ている間にも、あつという間に、見違えるように何もかもがきれいになって行く。

だから、実を言えばリクの出番は全くなかった。それどころか、こんなお喋りをしている暇があったら、先に湯屋に回って、湯浴み客がいなくなる頃合いを待ち待ち、三助（風呂を沸かしたり客の背中を流したりする者）の手伝いでもした方が良いのではないかという気もする。それなのに、何となくここを離れられずにいたのは、えらく不安だったからであった。

（だって、こいつのことひとりで置いといたら、今度は便器でも舐めかねえじゃんか!）

いくら真実がわかったとはいえ、一度身についた習慣はそうそう簡単に消えるものではない。ましてやこの男、茶屋の女将の一件で

もわかるように、筋金入りの堅物で、融通など全く利きそうにないのだ。

「いや、それは日課ではなかった」

その便器を拭き始めながら、淡々とカイは答えた。

「そっか」

思わずほんと、リクは吐息を漏らした。

「そうだよな、さすがにそこまでは――」

「そちらは、三日に一度ぐらいで許してもらえた」

「そ、そうですか……」

としか言えずに、リクはポリポリと頭を掻いた。

予想通り極めて自然に便器を舐めかけたカイを大わらわで制止し、湯屋に向かったのは、それから半刻（約1時間）ほどしてからのことだった。

掃除してから自分たちが入っては、せっかくきれいにしたものをまた汚してしまうことになりかねないので、先に湯浴みをし、その湯を落としてつつ掃除をすることにした。このあたりの湯はどうやら温泉の質を持っているらしく、傷めた足にじんわりと心地良さが広がって行く。

「あまり長いことは浸かるなよ。温めすぎて、腫れがぶり返しでもしたら難儀ゆえな」

「ああ、わかってるって」

やはり医者様のような口をきくカイに、いささかうるさそうに應じると、リクは、湯の中で、うーん、と伸びをした。

「何っーか……おまえって、案外『苦労人』だったんだな。いや、竜なんだから『苦労竜』か」

誰もいないのをいいことに、つい口が滑った。ところが、並んで浴槽に身を沈めたカイから返ってきたのは、意外すぎる反応だった。

「いや、前者で正解だ。苦労したかどうか、ということとはともかく、少なくとも私は人として生まれ、人として育ってきたからな」

「……へっっ!？」

うっかり湯屋じゅうにこだまするような声を上げて、リクは慌てて首をすくめた。

「だ、だけど……その……」

「まあ、おまえが誤解するのも無理はないがな」

カイは苦笑した。

「先に、あの姿の私と出会ったのだから……恐らく、今のこの姿も『人に化けた結果』だと思っていたのだろう？」

「……はい。大当たりです……」

素直に認めて、ぶくぶく、とリクは口まで湯に沈んだ。

そんな彼を見やって、もう一度カイは苦笑した。それから、少しだけ迷うように視線を泳がせ……話しても構わぬかな、と呟いて、

さらに続けた。

「確かに私は、厳密に言えば、人だとも言い切れぬ——片親が竜なのだよ。つまり、人と竜との混血児あいのこだというわけだ。

しかし、私自身がその事実を知ったのは、ほんの半年ほど前のことだったのだ。頭の、ちょうど竜体だと角のある位置に何らかの形で触れると竜になってしまうのだ、ということもな。

それゆえ、そのような現象には少々不慣れで……実のところ、自分でもこの変化をいまひとつ制御へんげしきれていないのだ。そのせいで、おまえにもあれこれと迷惑をかけてしまっ……」

……ばしゃん。

いきなり、カイは湯に顔をつけ、そのままぶくぶくぶく……と水中に潜った。

「おい……?」

驚いて覗き込んだリクは、次の瞬間、はっとした。相手の肩が、昼間と同じように小刻みに震えている。何となく追求してはいけなような気がして、何食わぬ顔でリクは浴槽から出た。

ところが、ついでに床ぐらいは先に磨いておこうか、と浴場の隅に置いてある束子たわしを取りに行き、それを持って戻ってきたところで、異変に気づいた。湯の表面が、鏡のように鎮まり返っていたのだ。それは、潜っている者が一切の動きを止めたのだということに他ならなかった。すなわち……

「なっっにやってんだよおまええ……っっ!!」

無我夢中で湯に手を突っ込むと、リクはカイの頭をぺしん、と叩いた。人よりは仔竜になっていた方が助け上げやすいと思ったのだ。たちまち水中に波紋が起こり、六尺超えの偉丈夫は、手のひら大のチビ黒竜に変化^{へんげ}した。恐れていた通り、ピクリとも動くことなく、ますます底へ底へと沈んで行く。

「ちょ、おいっ……！」

そんな相手を湯から引っ張り出し、逆さ吊りにしてその背をびしびし引っぱたいた。無論、いじめているのではない。飲み込んでしまった湯を吐かせて息を吹き返させるためだ。

「きゅ……びゅるるるーっ！」

ややあつて、甲高い啼き声と共に、湯が空中に弧を描いた。耳を近づけてみると、荒いながらも呼吸が蘇^{よみがえ}ってきている。

「やれやれ……ほんと、おまえってば騒ぎしか起こさねえのな」

リクは眉をひそめたが、その口調には確実に安堵が含まれていた。

『何やら、また面倒をかけてしまったようだな……』

手のひらの上から、恐縮した声が聞こえた。ひょいとその手のひらから飛び下りると、カイは自ら頭を叩き、再び人の姿に戻った。当然、全裸の男が現れるわけなのだが、今回の場合は湯屋なので何ら問題はない――股間を隠していた手拭いだけは湯の中に残ったままだったために、違う意味でリクに衝撃を与えてしまったことは別として。

(ま……しょうがねえよな。こんだけ体格差、あるんだし。……そ
おだよ、俺だって、もうちょっと背が伸びれば、きつと、きつと……
……っ！)

必死になって自分を鼓舞していると、ふう、と物憂げな吐息が聞こえた。見れば、カイは浴槽の縁に腰を掛け、窓の外に浮かんだ満月を振り仰いでいた。差し込んでくる月明かりが、端正な造作の上に絶妙な陰影を作り出し、あたかも一幅の絵のようである。

(まったく、全裸で、しかも溺れた直後だっつーのに、何でこんなにキマってやがんだよこいつは……！)

相手に負けないくらい陰鬱な表情にリクはなった。絵心があったら、このまんまの図描いて高値で売りさばいてやるところだけだな、と、やっかみ半分で不届きな了見を抱く。

けれど、程なく彼は、それを心から後悔することとなった。

「実を言うと、『熱いもの』には全般的に慣れていないのだ」

物憂げな表情を崩さぬまま、カイは言葉を継いだ。

「例の親戚の家にいた時分は、食事も風呂も皆が終わったあとの冷え切ったものを……という有様だったし、幸い今の屋敷ではそれなりに良くしてもらっているのだが、何と言うか……贅沢者と謗られそうだが、正直なところ『良くされすぎて』いると言うか……」

食事は毒見役を通して運ばれてくるので、私のところに来る頃には味すらよくわからぬほど冷え切っているし、風呂は風呂で、火傷でもさせたら切腹ものだからとか何とか言って、湯冷めのしそうなほどぬるい湯しか使わせてもらえぬし……

そんなわけで、せっかく焼きたての団子を食う機会に恵まれても、すぐに舌を火傷するし、先ほどのような熱い湯に浸ければ、あつという間に湯あたりを起こすし……

……リク？ どうしたのだ、リク……？」

完璧にリクは固まっていた。

（な……何なの？ その「屋敷」とか「毒見役」とか「火傷でもさせたら切腹もの」とかって……）

そして、唐突に思い当たった――先刻感じた「引っかかり」の正体に。

（そう言や、あんどきも「万民」とか言ってたよな、こいつ……）

もともと、堅苦しい物言いをする男だとは思っていた。だが、ただ性格的に堅苦しいだけで、このような言葉がするりと口について出るものだろうか……？

（だいたい、「万民」なんつー言葉使ったり、その「万民」に思いを馳せたりするのって、王侯貴族だとか、いっぱい領民抱えてる御領主様、ぐらい、なん、じゃ……）

さあつ、と顔から血の気が引いて行った。さすがに王侯貴族が王都から十里も離れた場所を普通にうろついているはずはないだろうが、「御領主様」ならば十分にあり得る。例えば、領内の視察に出ている、「変化を制御しきれず」突然竜の姿になってしまい、さすがに領民にそれが知れたらまずいので、取る物も取りあえず逃げ出してきた、とか……

(だと、したら……)

親戚に預けられ、虐げられて育ったという幼い頃はともかく、今では、この男——否、「この御方」は、庄屋や村役人でさえ「ははーっ!」と地べたに這いつくばらせることができる立場にあるのだ。ましてや、リクのような、さらに格下の庶民にとつては、それこそ「雲上人」以外の何者でもないわけで……

（お……おとおお俺、そんな御方のこと「おまえ」呼ばわりして、したり顔で説教したりとか、「この大バカ野郎ーっ！っ！」）「い
つまでぐずぐずしてんだよっ！」なんて怒鳴ったりとか……）

おまけに、頭引っぱたいて、宙吊りにして、背中ばしばし、とか
.....

$$\begin{pmatrix} \text{ど} \\ \vdots \end{pmatrix}$$

全身から、
一気に冷や汗が噴き出す。

(どどどどどどおしゅう~~~~~!!!!!!)

絶体絶命！からの……

「これは……何だ？」

脱衣場に土下座したリクと、目の前に捧げられた短刀とを、カイは訝しげに見比べた。

「ははははいっ、ふっ、懐刀ですっ！　その、父ちゃ——いや、父の形見でっ……！！」

震える声で、リクは答えた。カイの方では文字通り「何だ」と尋ねただけなのだが、「相手は雲上人なのだ」という先入観が邪魔して、「どういうことだ」と責められているようにしか聞こえていない。

「しっ、知らなかったこととはいえ、これまでの数々の御無礼——そっ、そのっ、お、お、御手打ちにされても、ぜ、全然、おかしくないか、とっ……！　だっ、だったら、せめて、父の、この刀でっ……！！」

「……それで、私に人殺しをせよ、と？」

「はひっ！？」

思ってもみない返しに、リクはますます縮み上がった。

（や、やべえ……かえって怒らせた！？）

彼の知っている「偉い御方」——村の庄屋や役人や大金持ちの商人たちは、こんな侮辱を受けたら、むしろ自分から率先して刀を振り上げ、相手に斬りつけることすら辞さない人々だった。その窮地

から逃れる方法は、ただひとつ——ひたすら謝り倒し、殊勝なところを見せ、できれば金一封も差し出して、相手の心変わりを誘うこと。だから、金一封は無理としても、せめて潔さを印象づけることで、何とか罪一等ぐらいは減じてもらえないだろうか、と思ったのだが……

（……って、そう言や、この御方って、そういう「常識」が通用しないんだった！）

今さら思い出して、リクは愕然とした。ああ、もうだめだ。「そんな小細工を弄して私の気が変わると思ったら大間違いだ！ だったら望むようにしてやろうではないか！！」とか何とか言われて、斬られちまうんだ……

ふう、と太いため息を漏らして、カイはリクの手から短刀を取り上げた。ちらり、と上目づかいに窺ってみると、じっとその鞘を見つめ、矯めつ眇めつ^{すが}している様子だ。「あ、それ、お気に召したんだったら差し上げますけど！」と言いかけて、リクは慌てて言葉を呑んだ——いけない、いけない。ほかの「偉いさん」だったらいざ知らず、この御方の場合、「今、父の形見だと言ったばかりではないか！ それをどのように簡単に差し出そうとは何事だ！」と逆に激昂されて、結局……

（ごめん母ちゃん！ こんなに早くそっちに行くことになっちまうて……！）

目を閉じ、体を固くしたそのときだった。

「杏に鶯か——美しい文様だな」
「へっ？」

「鞘自体は古いが、かなりの業物だ。わざもの 手入れも行き届いている——これは、おまえが？」

「え、い、いえっ、は、母が……」

「そうか」

相槌と共に、刀がリクの手に戻された。恐る恐る目を開けると、相手は穏やかに微笑んでいた。

「父御と母御の思いがこもった守り刀、というわけだな。羨ましいことだ。古来より、刀剣には魂が宿ると聞く。この先の道中でも、きつとおまえを守ってくれよう」

「……え？」

耳を疑ったせいで、一瞬反応が遅れた。

（この先の、道中……？）

と、いうことは……

「お、お赦し、ただけるの、で……？」

「赦すも赦さないも、おまえは私に、感謝されることはあっても責められることなど何もしておらぬだろうが」

呆れたようにカイは言った。刹那、その表情が一転して掻き曇る。

「それに……おまえは、人を斬り殺したことがあるのか？」

「え……」

ふるふるふる、と首を振って否定すると、「であろうな」と言つて、カイはかすかに唇を歪めた。

「ないから、そのように軽々しいことが言えるのだ。だがな、あれは……地獄ぞ」

雷に打たれたような心地で、リクは相手を凝視していた。

ぎこちない時間が流れて行った。頃合いを見て、どちらからともなく湯を落とし、掃除に取りかかったのだが、全くとっていいほど会話がない。

「……そのように堅苦しくするな」

その掃除が終わりに近づいた頃、耐えかねたようにカイが呟いた。

「確かに、私は屋敷に帰れば当主として持ち上げられ、傳かすずかれる立場にある。しかしな、それは、私自身の価値とは何ら関係がないのだ。

私の生母は王城の近くにある森の番人の娘で、妾しやうとして屋敷へ迎えられた。屋敷には正妻がいて、息子も三人もあった。私が高家へ預けられたのも、まあ、そのあたりの関係で……というのか？ その後、家を継ぐべき兄たちが不幸にも次々と亡くなり、私にそのお鉢が回ってこなかったら、恐らくは今も、預けられ先で奴婢ぬひ同然の暮らしを送っていたことだろうな。

しかも……私には竜の血が流れていると言ったであろう？ それは、母が、実は屋敷に入る前に竜と関わりを持ち、私を身ごもっていたからだっただ。つまり、私は――」

「いいよ、それ以上は」

ようやく、リクが口を開いた。

遮ったのも、言葉づかいを元に戻したのも、無論、話の流れを読

んでのことだった。要するに、カイは本当はその屋敷の当主の血筋でも何でもなく、リクと同様に庶民の子であり、おまけに実の父親は人ですらなかったのだ。カイの立場からすれば、当然それは絶対に秘密にしなければならないことなのだろうし、それを知ってしまったなお「いいですよ、それ以上はおっしゃらなくても」といった喋り方を続ければ、かえって嫌味に聞こえてもしまっただろう。

「あのさ……ひょっとして、お屋敷を出たのもそのことがらみで、とか……？」

迷いながらも確かめてみると、こくりとうなずきが返ってきた。

「このままではいかんと思うたのだ。血筋についてはもはや如何ともし難いが、せめて中身だけでも当主にふさわしい者であらねば、と……」

それで、まあ……格好をつけて言うなら、『修行の旅』に出た、とでも言うのか？ それゆえに、そろそろ戻るつもりではおるのだ——いつまでも当主不在では、家の者も困ろうしな」

「そっ、か……」

リクはため息をつき……それから、急に目の色を変えた。

「だから風呂の床なんか舐めちゃダメだってっ！」

「い、いや……すまん。つい、癖で」

「何が『つい』だよっ！ まずこっから『修行』しろおまえは——っ！——」

もっとも、これをきっかけに、お互い——特にリクが——完全に今までの調子に戻ることができたのだから、怪我の功名とも言えなくはなかったのだけれど。

ともあれ、何とか掃除も終わり、二人は湯屋から廊下に出た。すると、あの板前が向こうからやってきて、

「おう！ 例のもんだけどな、大部屋に運んじまうと人目も気になるだろうと思って、御主人さんとも相談して個室の方に運んどいたぜ。ちょうど空き部屋だったから、そのまんま泊まってもいいってさ。もちろん、御代もロハでいいってよ。ほれ、こっちだ」

どうやら、こちらの仕事が終わるのを見計らって、迎えに来てくれていたらしい。

個室は、大部屋とは別棟の平屋の建物の中にあつた。南側には大きな庭園もあり、ごちゃごちゃと人がひしめいているのしか見えないう大部屋とは雲泥の差だ。

ただし、リクたちに用意されていたのは、なるほど空いているのもうなずけるという趣の、北向きの小部屋だった。が、それでも何でも、相部屋の者たちを気にすることなくゆつくりできるのだから、贅沢の極みである。あらためて礼を言つて、その部屋の前で板前と別れると、リクは、わくわくしながら引き戸を開けた。

「うおお……すっげえ〜っつっ!!」

今朝、前の宿を出たときには想像もしていなかった豪華な料理が、四角い卓一面に並べられていた。煮込んだ肉と野菜、酢締めにした魚、網の上でじゅうじゅうと焼けている海老や貝……

「ほんとに賄いかよ、これ……」

もしかしくなくても、「賄い」というのは名目で、恐らくは板前自

身か、あるいは宿屋の主人が厚意で用意してくれたのだろう。

「こんなの見たの、マジ生まれて初めて——」

そこで初めて、隣の男を見やって頭を搔く。

「って、コーフンしてんの俺だけか。ま、そうだろうな。おまえにとっちゃ、こんなもん、珍しくも何とも——」

ところが、その言葉が終わらぬうちに、相手の口から素っ頓狂な声が上がった。

「うわ、うわあ、うわあーっ……!!」

こん肉、出来立て熱々じゃあ！ ナスビもナンキンも、ほかほか旨そうに煮えとる……！ 刺身も全然かぴかぴ乾いとらんし、こん貝なんぞ、まだ動いとるぞ！

なあ……なあリク、ほんまにええんか？ これ、皆オレらんもんなんか……!？ まさか、夢じゃ、ちゅうことはないろうな……?」

言いながらも、その双眸は料理に釘付けで、幼子のようにキラキラと輝いている。

（……な、何か、俺よりよっぽど感激しまくってねえか？ こいつ……）

しかも、またウナバル訛りがまじりまくりだ——どうやら、心ここにあらずというときに口をついて出てしまうらしい。

そんなリクの様子の変化に気づいたか、カイは、はっと身じろぎし、小さくコホンと咳払いした。

「あ、いや……直そうと努力はしているのだが、何せ十七年もあちらにいたものでな。それに、食事に関してあまり良い思い出がないせいか、このような料理を見ると、わけもなく嬉しくなってしまうのだよ——旅に出てからは、熱々のものも生きの良いものも、それなりに食すようになったはずなのだがな。いやはや、恥ずかしいところを見せた」

「そんなことねえよ」

首を振って、リクは卓についた。

「おまえ、いろんな意味でカンペキすぎるところあるからさ、そんならいの方がホツとする」

「……そうか？」

少しだけ間を開けてそう応じると、カイも向かい側に座った。その表情に、ちらりと影が走った。けれど、既に料理に夢中になっていたリクは、そのことには全く気づかなかった。

クウ、来たる

昼間、団子を食べたきりだったこともあって、それから四半刻（約30分）と経たないうちに、ほとんどの皿が空っぽになった。

「はぁ……食った食った！」

同時に全く同じ言葉が口をついて出て、二人は思わずふき出した。

「でもさ、ほんと旨かったよなあ！ それもこれも、みんなカイのおかげだよ。ありがとな」

素直にリクは言った。自分ひとりでは、たとえ全館津々浦々まで掃除をしたとしても、このような展開には決してならなかっただろう。

「いや……こちらこそ」

面はゆげな顔になって、カイは首を振った。

「おまえと出会えて、今までとはまた違った良い経験が数多くできた。それに……」

少しだけ考えるように視線をさまよわせてから、

「あのな、変な意味に取らずに聞いてくれよ？ 実を言うと、初めてなのだ——このように、同世代の、それも男の知己^{ちぎ}を得たのは。何しろ、虐げられるか傳^{かしず}かれるかの両極端しか経験がなくて、いわゆる『普通の』というのか？ そんな人間関係を築く機会に全く

恵まれなくてな。あえて『友』と呼べる者を挙げるとするなら、十とおの年に、今の竜体の私ぐらいのちんまりした体で大怪我をしているところを助けた竜ぐらいのものだったのだが、これも、蓋を開けてみたら実兄で」

「ジッケイ？ ……兄さんだった、ってことか？」

「そうだ。早い話が、それをきっかけに、芋づる式に私自身の出生の秘密までわかってしまったのだがな」

肩をすくめて、カイは手元の茶を口に運んだ。酒の入った徳利も並んでいるのだが、そちらには全く手をつけようとしな。何でも、飲めない体質たちなのだという。

だから、徳利の方は、リクがすべて空けていた。この国では数え十五が成人の年齢なので、既に飲酒歴は三年近くになる。それに、彼が育ったハクト村も含めた「北部」と呼ばれる地方では、冬の寒さをしのぐため、火を焚くことに加えて酒を飲むことでも暖を取るのが当たり前で、子どもの頃から酒をふんだんに入れた鍋物や酒粕を使った料理にも親しんでいる。結果、自然と「イケるクチ」となっていたのであった。

「おまえ……そんな水のように酒を飲んで、よく酔わぬな」

五本目の徳利を飲み干してもなお、顔色ひとつ変わらないリクを見て、半ば呆れたようにカイが慨嘆した。

「その体質、少し分けてもらいたいぐらいだ——私など、何が言うて酒席ほど気詰まりな『仕事』はないし、『男のくせにだらしない！』と連れにはどやされるし」

「ツレ？」

「ああ、そう言えばまだ話していなかったな」

聞きとがめたリクに、頭を掻いてカイは答えた。

「ゆえあってはぐれてしまっているのだが、実は、私には同行者がいい——」

ところが、その言葉が終わらないうちに、バタバタバタバツ、と、けたたましい足音が響いた。

「ちよいとごめんよっ!!」

威勢のいい声と同時に、バンッ!と部屋の扉が開く。飛び込んできたのは、白地に紺の矢羽模様の入った着物をまとった、リクより若干年下に見える少年だった。

「ここに——あああああつつつつ!!!!」

問いかけが、たちまち絶叫に取って代わる。震える人差し指が指し示していたのは、もちろんリクのことではなく……

「何やってたんだよこのストコドッコイっつ!!」

「……げ!」

目を剥いたのは、言われたカイではなく、リクであった。少年ときたら、「何やってたんだよ」の「な」と同時に、カイの頬をバツチーン!とビンタしたのだ。

(こ、こいつ、天下の「御領主様」に何っちゅうこと……!)

かく言う自分だって、さんざん「バカ野郎」呼ばわりしてはいたのだが、それでも、この少年に比べたら全然ましな部類に入るだろ

う。道理で、あれだけ「寛大にお赦しただけた」わけである。

が、さすがのカイも、今度ばかりはカチンと来たらしい——引っぱたかれた拍子に、ぽんっ！と仔竜になってしまっただけに、なおさら。

「……きゅっ！ きゅきゅきゅきゅっきゅ——」

「ええい、うるさいうるさいうるさいっ！！ 何するんだもかにするんだもないよっ！ 昨日今日って、あたしがどんな思いであんたのこと捜し回ってたと思ってんだっっ！！！！」

負けずに少年は怒鳴り返した。ほええ、とリクは瞠目した。

（竜語と人語で、ちゃんと会話成立してるよ……）

たぶん、少年の耳にだけは、人語も重なって聞こえているのだろう。

（俺と竜のカイが喋ってるときも、はたから見たらこんな感じなのかなあ……）

しかも、ちらりと聞こえた一人称は「あたし」だった。

（女の子、だったんだな……）

あらためて見直すと、確かに男にしてはいささか線が細い。ざんばら髪を整え、小花模様の衣でも着せれば、「元気な女の子」で十分に通りそうだ。現実にかこういう女性がいるからこそ、リクも、関所ごとに「男装した女じゃないのか」と誤解されてしまうのだろう。

（とはいえ、しょうがねえか……男の俺だって、昼間みたいな目に遭ったらマジでビビるもんなあ）

うっかり記憶まで甦って、思わずげんなりしたそのとき、あ！と声を上げて彼女が振り返った。

「ごめんねえ、せっかく食事中だったのに、とんだ邪魔しちゃって！ あたし、クウってんだ。このバカ竜の兄さんから、こいつのお目付け役を任されててさ」

「きゅっ！？ きゅきゅきゅきゅ——」

「うるさいね、バカをバカつつって何が悪いんだよっ！ ああ、いやね、このバカ、いわゆる『忍び旅』ってのをしてるんだけど、昨日、事もあるうに、それを知られちゃいけないヤツと鉢合わせしちゃまってさ。大慌てで逃げてるうちに、あたしと離れ離れになっちゃまったんだよ。」

で、もしかなくても、あんたがこいつの面倒見てくれたんだよね？ いやあありがと！ ほんつとありがと！！ 大変だったでしょ、ド天然だわ何しでかすかわかんないわで……

でも安心しな、あとのことは、こっちでちゃあんとやっつくからさ。そうだ、たぶん金銭おかしだってあれこれかったんだろ？ その辺のどこも、こいつからきっちり話聞いて、悪いようにはしないからね！」

異様なまでの早口でまくし立てるだけまくし立て、「じゃ！」と、つまんだチビ黒竜ごと片手を上げると、クウはさっさと出て行った。いささか呆然とそれを見送って、はあ、とリクはため息をついた。

（な、何か……嵐みたいなひと、だったな……）

おまけに、一気に静かになったせいとか、部屋がえらくだだっ広く

感じられる。何となく手持ち無沙汰になって口にした酒も、どういうわけか、さっきまでほど旨くはなくて……

「……片づけっか」

あえて声に出してひとりごちると、リクは皿を重ねて盆に置き、何度かに分けて板場へ運んで行った。

その皿を全部洗って食器棚に返し、戻ってきたときにも、部屋は無人のままだった。

「しょうがねえ、先に寝とくか」

再びひとりごちて、リクは押入れから布団を出した。

「うっひょー！ さすが個室の物は違もんうぜ！」

金持ちが使うだけあって、掛け敷き総真綿の高級品である。普段使っている煎餅布団とは比べ物にならないほど温かく、触り心地も格別だった。

それをまず自分の分だけ敷き、相手の分にも取りかかろうとしたところで、その手が止まった。

（この分じゃ、もう帰ってこないかもな、あいつ……）

喋っていた言葉つきから推して、クウはリクと同じ庶民の子だ。加えて、異性でもある。にもかかわらず、あれだけ遠慮がない態度が取れるということは、たぶん「お目付け役」などというのは単なる名目。その実は、いわゆる「わりない仲」とやらなのに違いない。

その証であるかのように、クウが叫んだ言葉が脳裏に甦る。

『あたしがどんな思いであんたのこと捜し回ってたと……！』

相手に格別の思い入れがなければ、あのような物言いにはならないだろう。

（つたく、あいつらしいぜ。男友達よりも彼女オンナの方が先にできちまってる、なんてさ）

そんな二人が思いがけず離れ離れになり、やっとのことで一両日ぶりの再会を果たしたのだとしたら——朝まで一緒にいない方がおかしいというものだ。

（……ってか、「家出」しちまった原因も、ひよっとするとそっちなんだったりしてな）

あのカイのことだ、出生の秘密に悩んでいたことも、それゆえに「修行の旅」に出たことも、決して嘘ではないだろう。けれど、実際に屋敷を飛び出した直接のきっかけは、道ならぬ恋を周囲に反対されたことだったのではあるまいか。想いを遂げるためには、手を取って出奔するしかなかったから……

だからこそ、クウも男の格好をし、色気も素っ気もなく振る舞っていたのに違いない。

考えてみれば、カイほど腕の立つ男と一緒にいるのだから、身の安全は保障されているも同然だ。それよりも、あれだけ様子のいい男と、女の姿のまま仲良さげに歩いている方が、別の意味ではるかに「危険」だろう。下手に悪目立ちして「ねえ、あれってもしかし

たら、駆け落ちした二人なんじゃないかい」などと巷で噂にでもなれば、あつという間に屋敷の者に見つかって、連れ戻されかねないのだから……

(……っと、待てよ？ だとしたら、よろしくやってるどころか、とっくの間に、こっそり出立しちまつてる、とか……)

不意にそう思い当たって、リクは愕然とした。心の臓のあたりに、ぽっかりと穴でも開いたかのような心地に襲われる。

(……って、何動揺してんだよ俺)

むしろ、ここは、肩の荷が下りたと喜ぶべきところではないのか。本人も言っていたように、あとは全部クウに任せてしまえば良いのだから……

(……そうだよ、それでいいんだ)

自分は、道楽で旅をしているわけではない。王都^{みやこ}に行って、大儲けして、自分と母を捨てた父を見返してやらねばならないのだ。厄介事ばかり起こして、何を考えているんだかも今一つよくわからなくて、おまけに竜で、そのくせ、とんでもなくバカ高い御身分で――そんな、あらゆる意味で「めんどくさい」あの男などと、ここですっぱり袂を分かってしまった方が……

相棒は手乗り竜

しかし、布団に潜り込んでしばらくの時間が過ぎても、相変わらず心は晴れなかった。

(……^{さみ}寒！)

ぶるる、と身震いして、リクは布団を胸元に掻き集めた。綿にくるまれているおかげで背中も手足もぽかぽかと温かいのに、何故か胸のあたりだけが、いつまでもうすら寒かったのだ。さっき穿たれたような錯覚を覚えた穴が本当に存在していて、そこから冷たい風が吹き込んでくるようで……

(湯たんぽ……欲しいなあ)

ふっ、とそんな思いが去来した。そうだ、こういうときには、湯たんぽを抱いているのが一番なのだ。懷^{ふとこ}にちんまりと収まる大きさに、まるで犬か猫の仔みたいに、ふんわり、ほわあっとほの温かくて……

「……きゅう」

そうそう、ときどきそんなふうに鳴いたりなんかする――

「……ってっ!!」

がばり、とリクは跳ね起きた。

「お、おまえっ……いつの間に!?!」

『何を言っている。既に四半刻はここにいるぞ』

懐の奥からリクを見上げて、しれっと黒竜は言っただけだ。

『だいたい、おまえが寝言で頼んだのだろう。「寒くてたまらんから、懐に入ってくれ」と』

「……っ!!」

たちまち、かあつと頬が熱くなった。窓の外は、とっくに夜明けの気配を漂わせていた――つまり、リクは知らないうちに寝入っていて、よりによってカイ本人相手にそのような恥ずかしい寝言を発していたのだ。

「もういっぺん寝るっ!!」

黒竜を懐から放り出すと、リクは頭から布団をひっかぶった。ぽんっ、と音がして、相手が人に変わった気配が伝わってくる。

もっとも、少し間を置いてそっと窺ってみると、カイは普通に着物をまとい座っていた。見慣れぬ巾着を手に、その中身を確かめている様子だ。

「ようやく荷物が我が手に戻ってきた」

リクの視線に気づいたのか、カイは巾着を振って、にっこりしてみせた。

「これで、おまえに着物代と宿代を支払える。替えの衣も何着か入っておるゆえ、今後の道中では、昨日のような迷惑をかけてしまうこともあるまい」

「へ……?」

再び、がばりとリクは跳ね起きた。金を支払ってもらえるのは無論ありがたかった。着物についても然り——もう、目のやり場に困るあの半裸を道端で拝まなくて済むのなら、それに越したことはない。が、

「『今後の道中』って……おまえ、あいつと一緒に行くんじゃないのか?」

「あいつ? ああ、連れのことか」

やけに淡々と、カイは答えた。その淡々とした口調を保ったまま、さらりと続ける。

「あれなら、先ほど袂を分かってきた」

「は……!?!」

まじまじと、リクは相手を凝視していた。

「何で——」

「初めから決まっていたことだからだ」

至極明快に遮られて、自分の推測が大きく間違っていたことに気づく——これは、「手に手を取っての逃避行」などではない。「やがて来る別れを覚悟しての、思い出作りの旅」だったのだ。現に、カイも言っていたではないか。「いつまでも当主不在というわけにも行かないから、そろそろ戻るつもりだ」と……そこに、「クウを連れて」という選択肢は、恐らくないのに違いない。

（庄屋だとか大商人なら、そういうときはたいてい相手を妾めかけにして

たもんだったけど……)

こいつじゃ、それはあり得ねえな、と、すぐに考えを引っ込める。そうでなくとも四角四面すぎるほど四角四面なうえに、自分自身、妾の子としてさんざん辛酸を舐めてきたのだ。相手に生母のような苦労はさせたくないだろうし、自分のような子ができることも望まないだろう。

「なあんか……御領主様っつーのも楽じゃねえんだなあ」

「ああ、むしろ難儀なことばかりだ」

あっさり肯定して、カイはかすかに口角を上げた。

「ましてや、私の場合、カムナギ全土の領主だからな。その分、難儀さも段違いだ」

「ふうん——」

何となく相槌を打ちかけて、ぎよつとリクは相手を見直した。「カムナギ全土の領主」——つまり、中つ国のすべてを治めている、ということとは……

(そういえば……)

いくら半分以上居眠りをしていたとはいえ、歴代国王の名と来歴ぐらゐは授業の中で聞き覚えていた。現国王は、末弟だったこともあって、幼いうちに下つ国・ウナバルへ「二国友好の証」として養子に行ったのだが、五年前、上つ国・ヘキギョクとの間に起きた大戦で次兄と三兄が討ち死にし、三年前には、長兄の王太子と父の前国王も流行病で死去して、王位を継ぐ者がいなくなったがために、呼び戻されて即位したのだ。名前は、ユアンⅡカイⅡハシム五世。

そして、目の前にいるこの男も、「カイ」と名乗り、ウナバルで十数年暮らしたという過去を持っている……

「……………どうする」

今まで以上に淡々と、カイは——国王ハシム五世は問いかけた。

「また平伏して畏まるか？ 別に、それでも構わぬが——隔てられることには慣れておるゆえな」

吐き捨てるように続けられた言葉には、何もかもを諦め切ったような響きがあった。昨夜は、「畏まるな」と自分から頼んできたというのに……

その響きを、リクは心で反芻した——どこかで覚えのある波長を感じたように思ったのだ。

『女男？ はっ、言うんなら言えよ！ こちとらなあ、んなこと言われんのは慣れっこなんだよっ！！』

本当は、ちっとも慣れてなどいなかった。どころか、言われるたびに深く深く傷ついていた。けれど、そんなことを表に出したら、ますます女みたいだと言われるから……「男のくせに情けない」と母にも叱られるから、精一杯虚勢を張って、わざと荒っぽく啖呵を切って……

（こいつも……きつとそうなんだ）

本当は、嫌なのだ——「国王陛下」と畏まれ、遠ざかれることも、その立場ゆえに、惚れた女と添い遂げるというささやかな幸

せすら許されないことも。でも、国王だからこそ、それを表に出すことはできない。出しようによっては、咎められるのはもちろんのこと、国の屋台骨を揺るがすようなことにだってなりかねないからだ。

下手に隔てをなくせば、逆に家臣や国民に舐められる危険性が出てくる――弱冠二十歳やそらの若さであるだけに、余計に。それで、肝心なときに国王命令が無視されるようなことにでもなれば、あつという間に国は乱れてしまうだろう。

それに、国王は、確かヘキギョクの一の姫と婚約していたはずだ。五年前の大戦おちづけのようなことを二度と繰り返さぬよう、「二国間の永遠の和睦の証」として縁組が整えられたのだと聞いている。

彼の性格を考えれば、相手が同世代の姫だったなら、恐らく素直にこの縁えにしを受け入れ、彼女を慈しむ努力も怠らなかつたはずだ。が、あいにく姫は数え七つの祝いもまだ済ませていない幼子だった。なればこそ、身近にいた同世代のクウに、つい心が動いてもしまったのだろう。

けれど、だからと言って、その心のままに突っ走ってしまえば、その先には悲劇しか待っていない――自らの娘を愚弄されたと激怒したヘキギョク王が、それを口実に攻め込んでくるであろうことは火を見るより明らかなのだから。そうなれば、結局また五年前のような戦が起こり、たくさんの人死にだって出る。

『……それで、私に人殺しをせよ、と？』

『おまえは、人を斬り殺したことがあるのか？ あれは……地獄ぞ』

いくら人目がなかったとはいえ、一片の迷いもなくそう言い放つたこの男が、そのような結末を望んでいるとは到底思われなかった。

(……って、どう考えたって、こいつの方が背景重すぎじゃんか)

ただ、根底に流れている気持ちはきつと同じだ、という妙な確信だけはあった。

『初めてなのだ——このように、同世代の、それも男の知己^{ちぎ}を得たのは』

そう語っていたこの男の、どこか嬉しげな顔が脳裏に甦る。そのとき、恐らく本当に彼は——カイは幸せだったのに違いない。国のため、「万民」のため、すべての個人的な望みを諦め、本音を封印してきた彼にとっては、同じ年頃の友と戯れることすら、かなわぬ望みだったのだろうから。

だったら何で正体を明かしたんだよ、とは思わなかった。むしろ、だからこそ明かしたのではないかという気さえした。

あまりにも幸せすぎるとき、人は往々にして思うものだ。「夢なら醒めないでくれ」と。あるいは「醒めるんだったら、さっさと醒めてくれよ——その方が、現実に戻っても早く諦めがつくからな」と……

そして、カイの場合は明らかに後者だったのだろう。王都^{みやこ}に戻れば、嫌でも現実に戻らざるを得ない立場であるからこそ……

しばしの後、ぽんっ！と変化^{へんげ}の音が響いた。次いで、チビ黒竜の驚愕したような声上がる。

「きゅっ!？ きゅきゅきゅ——」

「ばあか、誤解すんな」

ぎゅっ、と衣の上から相手を抱きしめると、ぶっきらぼうにリク

は言った。

「ウチの家訓なんだよ——『相手に心から信じてもらうには、百の言葉を並べるよりも、こうするのが一番なんだ』って」

これは今決めたわけではなく、母が生前よく言っていたことだったのだが。

「それにな、俺が出会ったのは、今の『このおまえ』なんだよ。真つ黒で、手のひらにのっかるくらいんまりしてて、たまあに人に変化^{へんげ}しちゃあ厄介事を起こす、ヘンな竜——とりあえずは、そんていいじゃねえか」

「きゅ……」

何事か言いかけた相手の声が詰まった。次いで、「き……き……」と、何かをこらえているような音が漏れてくる。

「つたく、無理すんなよばあか！」

衣の内側に手を突っ込むと、リクは相手のぽわぽわした鬣^{たてがみ}をくしやくしやと撫でてやった。あえて衣を剥がさなかったのは、無論、武士の情けという奴である——まあ、リク自身は武人でも騎士でもないのだが。

『……馬鹿馬鹿言うなあ、阿呆お!!』

ややあつて、ベソ搔き満載な人語が聞こえた。それを潮に、衣が小刻みに震え出す。最初は控えめに嗚咽が漏れ、それは、程なく激しい慟哭へと変わった。

第一章・了

季節外れの桜花

「どうしたんだい、こんなに……！」

素っ頓狂な声を上げて、宿屋の主人は、リクと彼が差し出した小判とを見比べた。

「昨日は素寒貧すかんぴんだと言ったじゃないか」

「ああ、昨夜のうちにカイのお連れさんが来て、『迷惑料だ』って置いてったんだ。あんな豪華な飯も食わしてもらったしさ、遠慮なく取っというてよ」

用意しておいた答えを返すと、リクはニコツとした。本当は、カイ自身がそう言って支払いができれば良かったのだが、何しろさんざん泣いたあとである。泣き腫らした目を見られたら、またぞろ妙な誤解をされかねないので、今は仔竜になってリクの懷で丸くなっていた。

「ああ……そう言や、あのでっかい兄ちゃんを訪ねて、昨夜、娘っ子が来たっけね」

主人は、ようやく納得した顔になった。

「男の格好をしちやいたが、あの必死ぶり見たら、いいひと捜しに来た女だって丸わかりだったもんだ——そうか、それで、今はあんなひとりなんだね。さしずめ、兄ちゃんしとねは、いいひとと先にいそいそ御出立か、逆にいまだ褥しとねでしっぽりとしてるか？」

「ま、そんなところかな」

適当に返事をする、リクはあらためて主人に礼を言い、あの板前にもよろしくと言付けて宿を出た。いったん反転して呉服屋へ向かう。ここでも同じような説明をして、着物代を支払う手はずになっていた。

『……何が「そんなとこかな」だ』

きゅきゅきゅ、という啼き声に重なって、重低音の人の声が響いた。

『というか、昨夜から少々気になっていたのだが、おまえ、もしかして、私と連れの関係を誤解してはいないか？ あれは、純粹に旅の連れだ——少なくとも、旅に出た時点では間違いなくそうだったのだ』

「まったまた——」

言いかけて、リクは口をつぐんだ。相手の気性を、もう一度思い出してみる。そして、眉をひそめた。

「……マジで？」

『ああ、真面目に言っている』

それこそ生真面目に、カイは言い直した。

『知っておるかもしれんが、私には許婚がいてな。婚儀こそまだだが、あれこれ事情があつて、既に城に住まわせておるのだ。何分十五近くも年が離れているので、今のところは、妹か、場合によっては娘のような感覚でしか見られずにおるのだが、幼くして実家を出されて異郷の地へ送られ、二親と離れた淋しさに懸命に耐えている様子を見るにつけ、それが、かつての自分とぴたりと重なるように

……だから、決してないがしろにしてはならぬと思うておる。一生かけて守り抜いてやろうともな。

そのような存在があるのだ、初めから女子^{おなご}として意識している者を旅に同道させるわけなどなからうが。ただ、旅の最中にはいろいろなことがあって……その際、連れの存在に救われるような場面も幾度となくあってな。正直なところ、今の気持ちは、旅に出た時点とはいささか異なりつつある。ゆえに、それが決定的なものにならぬうちに、潔く袂を分かつべきだと思うたのだ。……おかしいだろうか？ 私の言っていることは』

「い、いや……」

むしろ、いかにも堅物なこの男らしい物の考え方であり、けじめのつけ方だとさえ思った。

「ただ……あの娘^この方は、それで納得したの？ 世の中、おまえみたく理詰めで物を考えるヤツばっかじゃないんだぜ？」

殊に女性は――それは、母ひとり子ひとりの家庭で育ち、母親と接触する機会が人一倍多かったリクが、それこそ理屈ではなく、体感してきたことでもあった。

「うーん、『しなきゃしょうがなかった』ってのが正しいかな」

背後で、別の声が答えた。驚いてリクは振り返り……そこで、さらに驚いた。

「え、と……」

「何？ あたしの顔に何かついてる？」

くすりと笑ったクウは、昨夜とは違って薄紫の女衣を身に着けて

いた。ざんばらだった髪もきれいに櫛で梳かれ、耳元には桜色の簪が飾られている。薄く白粉を刷き、頬と唇にもかすかに紅を乗せたその顔は、どこからどう見ても女性だった。それも、ほんのり色気すらまとった「大人の女」――

「もう、男の格好をする必要もないんでね――あたしの旅は、ここ
で終わりだから。あっちこっち回ってはみたけど、やっぱり住み慣
れた王都みやこになるべく近い方が、食べ物もんも水も合って落ち着くみたい。
だから、この街に住むことにしたよ」

その言葉は、どちらかと言えば、リクではなくその懐に向けられ
ているようだった。それがわかったのか、「きゆるっ」と小さな相
槌が懐から聞こえたが、顔を覗かせる気配はない――あくまでも、
意思は固いようであった。

「……あのっ」

たまらなくなつて、リクはつい口をはさんだ。

「どうせだったら、王都みやこの木戸口ぐらいまでは一緒に――」
「それは、ダメ」

微笑んで、クウは遮った。

「あたしはね、この先には入っちゃいけないんだ――昔、いろいろ
とやらかしちまってさ」

はっとリクは息を呑んだ。自分の思い込みが、いよいよ的外れだ
ったことを痛感する。

「ご、ごめんなさい！ 俺、ろくに事情も知らないで、余計なこと……」

「いいんだよ、身から出た錆ってヤツなんだから」

鷹揚に、クウはかぶりを振った。その視線が、記憶をたどるように遠くの方へ注がれる。

「団子をね、恵んでやったんだよ——そのひとつってば、こっそり城下に出てきたはいいけど、懷に金貨しか入れてなくって、小銭に両替することも知らなかったからね。」

そしたら、たぶんその礼のつもりだったんだろ、それからすぐに、あたし、ドジ踏んで捕まっちゃったんだけど、ほんととは島流しになるか、下手したら獄門台に上んなきゃなんないとこを、所払い（追放刑）で済むように計らってくれてね。そのあとも、あたしの落ち着き先を探して、ずうっと一緒に旅してくれて……そ、もともとはね、この旅って、それがきっかけで始まったんだよ。そのひとのひとだから、きつとあんたには、そんなことなんか一言も言っていんだらうけどね。

こんだけのことをしてもらったんだ、もう十分に幸せだよ、あたしは——そう思わなくっちゃ、バチが当たっちゃまう。

だからさ、あたしのこと心配してくれるんだったら、その気持ち、そのひとの方に向けてやって。ほんと、危なっかしいひとなんだ。世間知らずだったのもそうなんだけど、優しすぎて、何でもかんでもひとりで背負い込んで、しまいにはそれに押しつぶされちゃうようにうなとこがあるんだよ。あたしの代わりに、そうならないようにしっかりと見張っててやってね」

「は……はいっ!!」

居住まいを正し、こくこく、とリクはうなずいた。

クウと別れて再び呉服屋へ向かってからも、足元が、どこかふわふわと落ち着かなかった。

『もう十分に幸せだよ、あたしは——そう思わなくっちゃ、バチが当たっちゃう』

『あたしの代わりに、見張っててやってね』

そんな彼女の言葉と、切なげな微笑とが、やけにくっきりと脳裏に焼きついてた。桜の花のような香りも、ずっと鼻孔にまとわりついて離れない気がして……

『……何だ。あれに惚れたのだったら、おまえともここで別れて良いぞ』

「なっ、何言ってたんだよっ!!」

どうやら、胸元に密着しているせいで、鼓動が速まったのに気づかれたらしい。

『おまえならば身分的に何も問題はなからうし、あれの過去を知る者も、このあたりまで来ればおらぬだろうし——そもそも、過去とは言っても、あれの場合、戦^{いくさ}で親を亡くし、生きるためにやむなく^{すり}胸摸に手を染めていただけだからな。私に言わせれば、ひとを奴婢^{ぬひ}のごとくこき使った挙句、床まで舐めさせた下^{しも}(つ国)の王太子の方が、よほど罪深いぐらいだ。

それに、別れで受けた痛手の一番の薬は新しい出会いだとも聞く。ならば、あれにとっても決して悪いことではあるまいよ。私も、自らの手で如何ともしがたいのなら、いつそ良い男と添うて幸せになつてくれればという気持ちでおるしな——その点、おまえは機転が効き、世渡りもうまい。半人半竜の私をこのように受け入れてくれる度量もある。安心してあとを託せるというものだ』

さ、遠慮せずに行って参れ、と揶揄するように続けられて、リクは首まで真っ赤になった。

「や、その……って、ダメ！ ダメダメダメダメ！！ 俺は王都みやこに行くのっ！ 行ってクソ親父に一泡吹かせてやんなきゃ、ここまで来た意味がねえんだからっ！！」

『……ほう』

カイの口調が変わった。

『それでは、父御は御存命ではあるのだな？』

「え……？」

聞き返したところで、昨夜、自分の懐刀を「父の形見だ」と説明していたことを思い出す。

「あ、や……それが、よくわかんないんだよね、実は」

正直に告白して、リクは頭を掻いた。

「俺は顔も知らなくって……母ちゃんも、死ぬまで親父のことなんか一度も話してくれたことなかったしさ。だから、まあ俺的には死んでるようなもんで、それで『形見だ』なんて言ったんだけど、もし生きてるんだったら、やっぱ一言言ってやりたいじゃない。『バカ野郎』とか、『何で俺と母ちゃんのこと捨てたんだ』とかさ」

そこで、ふと思いついた。

「なあ、カイ。あの刀、誰のもんだとか調べられる？ 多少時間が

かかったっていいからさ」

国内すべての王侯貴族を束ねるこの男なら、それも不可能ではないかもしれない——そう思ったのだった、が。

『いや、残念ながら無理だな。家紋でもあれば、話は別なのだが』
「え？」

耳を疑って、リクは聞き返した。杏に鶯、とカイが表現した文様が即座に脳裏に甦る。

「あの模様って、家紋じゃないの？」
『違うな』

「そつ、か……」

やはり、地道に家々を訪ねるか、骨董品屋でも回るしかないか……そう思ったため息をついたとき、ちよいちよい、とカイが鼻先でリクをつついた。

『呉服屋。今通り過ぎたぞ』

「え？　ちよ……それを早く言えよっ!!」

慌てて、リクは踵を返した。

クウと気まぐれ白竜

呉服屋で支払いを済ませ、リクは今度こそ王都に向かって歩き始めた。多少出る時刻が遅くはなったが、このまま歩いて行けば、夕方には王都の外れの関所付近まではたどり着けそうだった。

その様子を、クウは物陰からそっと見送っていた――正確には、いまだ黒竜の姿でリクの懷にちんまり収まっているはずのカイを、と言うべきだったが。

『半年前……そなたがいなければ、私は義姉^{あね}上のあとを追っていたかもしれない』

昨夜、彼の腕の中で囁かれた言葉が、耳の奥に甦る。

『あの頃は、ほとんど何も食えなかったし、夜も全く寝つけなかった。そなたが懷に入れて守ってくれたり、折を見て、手ずから粥や白湯を与えてくれたりしなかったら、早晚、餓死するか、犬猫にでも取られて死に至るか、どちらかであつたろう。』

なればこそ……そなたには、この先、誰よりもつつがなく、幸せな人生を送ってほしいのだ。本当は――』

その先を、彼は口にしようとはしなかった。けれど、まるでその代わりであるかのように、明け方近く、こんな声を聞いた。

『もっと、もっと一緒に居りたい……許されるもんなら、こんまま、城に連れて帰りたい……』

そして、うなじを這い、胸元を乱す唇と指の感触――それは、い

まだにクウの体の奥の奥に、切なくも甘い痺れとなって残っていた。

……ただ、こちらの方は明らかに夢であるとしか思えなかったのだが。

何故なら、その時刻よりはるかに前に、カイは自分の部屋に帰っていたのだ。「参ったなあ……おまえの懷に入れられて連れてこられたせいで、どう戻ったらええかわからんが」と途方に暮れたような顔で訴えられて、「ああそうだったねえ、ごめんごめん」と、苦笑しつつわざわざ部屋の前まで送ってやったのだから間違いはない。

それに、ふと気づくと、すべてが、見事なまでに寝る前の状態に戻っていたのである。乱れていたはずの布団も、胸元も、何もした記憶などないのにちゃんと整えられていたし、痛みすら覚えるほど激しく求められ、触れられたせいで、首筋や乳房にくつきりついてしまった赤い花びらも、一片たりとも見当たらなかった。布団や着物はともかく、肌に刻まれた痕跡まできれいさっぱり消えていたとなれば……

(……ま、今となってはどっちでもいいけどね。夢だろうと、現^{うつ}だろうと)

かたや一国の王、かたや一介の咎人。もう二度と、行く道が変わることはない。そもそも、こうして一度でも重なったこと自体、あり得ぬことだったのだ。ならば、すべてを「いい夢を見た」ということにして、新たな一步を踏み出すまで……

(あんただってそう思うよね、カイ。だから、何かってえと、ひと嫁に行け嫁に行けってうるさかったんだろ……?)

耳元の桜色の簪かんざしに、クウはそつと手を触れた。もう豆粒のようにしか見えないほど遠ざかってしまった相手が、「嫁入りのときにも使え」と購あがなってくれた唯一の品。そのときは、「ひとの気も知らないで!」と憤慨しまくっていたものだったけれど……

しゅるしゅるっ、という音と共に、突然、傍らに何かが降り立った。普通の人間なら、ここでびっくりして悲鳴のひとつも上げるところだろうが、クウは全く動じなかった——早い話が、知り合いだったからである。振り返るより先に、彼女は苦笑した。

「何だよティエン、また仕事サボって息抜きかい?」

ティエンは、カイの話にも出てきた彼の実の兄だ。弟と同じく半人半竜なのだが、十年近く年長であるためか、竜になったときの身の丈は、およそ六尺（約180cm）と彼よりはるかに大きい。体の色も弟とは対照的に雪のように真っ白で、二本の角は輝くばかりの黄金色こがね。瞳は焰ほむらの如く真っ赤だった。

もっとも、そんな竜が現れたらすぐに大騒ぎになってしまうし、弟とは違ってちんまり懷に収まるような大きさでもないのです、市中でのティエンはもっぱら人の姿を取っている。

人外の血が混じっているせいなのか、そろそろ三十路に差ししかかろうというのに、見た目は二十歳そこそこにしかならない。そして、その外見年齢と、血のつながった兄であるということとの双方が作用しているのだろう、人の姿をしているときのティエンは、面差しと言い、背格好と言い、カイと実によく似ていた——竜体のときの色合いを示唆するかのような、真っ白な肌と、銀色の髪と、赤い瞳を除いては。

しかも、肌はともかく、髪と目については、そのままではあまりにも目立ちすぎるので——何しろ、この近在では黒か茶色の髪と目

の者が九割方を占めていたから――、父親から手ほどきを受けたという幻術を使って黒髪黒目であるかのように見せていた。おかげで、ティエンは今やほとんどカイと瓜二つの容貌となっており、二人を見慣れているクウでさえ、時に見間違えてしまうほどだった――ありていに言えば、すぐに振り返らなかったのも、半分はそれが理由だと言っている。考えていたことがことでもあったから、いろいろな意味で、まともに相手の顔を見られない気がしたのだ。

それはさておき、そんなティエンは、カイが不在の今、彼に乞われてその影武者を務めていた。そうでなくとも容姿がそっくりであるうえに、執務もそつなくこなしていたから、大臣から下働きの者に至るまで、いまだ誰ひとりとしてこのことには気づいていないという。

ただ、どうも性格的に飽きっぽいところがあるらしく、しばしば「廁へ行ってくる」と偽って、こうしてクウの前に現れるのだ――ティエンは千里を見通せる「竜の水晶玉」を持っており、クウもその片割れを渡されているので、連絡ならば、それで十分に取れるはずなのに。

「あんたね、いくら竜になれば一瞬で飛んで来られるつつたつて――」

たしなめながら、ようやくクウは相手を見やった。その目が怪訝にしばたたかれる。

相手の真っ赤な瞳が、呆然としたように見開かれていた。変化へんげ後は牙となる八重歯の生えた口も、同じくぽかんと開かれている。やああって、その口がおもむろに動いた。

「怖え……！　よくそこまで化け――ってえ……！」

「もっとほかに言いようはないのかよっ……！」

相手の向こう脛に蹴りを食らわせると、憤然とクウは嚙みついた。

「ったく、あのおチビさんだって、もう少しマシな反応したってのに……兄弟揃って気が利かないったらありやしない！」

「俺まで一緒にすんなよ」

脛をさすりながら、ティエンはぼやいた。

「でも、ま……蹴りが出るようだったら、少しは安心、かな」
「え……？」

意味を取りかねて、クウは問い返し……次の瞬間、赤面した。相手の白くすんなりした指が、そつ、と目元に触れたのだ。

「ああ……まだちょっと腫れぼったいな。慣れねえ化粧なんかしたのは、これ隠すため……だろ？」

「なっ……」

何だよ、そういうところには気い利かせなくってもいいんだってば！
！　　と言ってやりたいのに、口が動かなかった。相手の手つきが、あまりにも優しく。幻術で隠しているはずの瞳の中の焰に、すうっと吸い込まれてしまいそうで……

（……って、いけないいけない！）

たぶん、この男が変にカイに似すぎているから良くないのだ。ついうっかり、カイにそうされているような気分になって、それで……

（そ、そうだ、さっきみたく顔を見なきゃいいんだよ！）

必死に自分にそう言い聞かせ、わたわたと視線を動かしたところで、いきなり鼻をつままれた。

「こーら、そやってまたカイのこと考えてる！」

ふごふごもがいているクウを、じとーっとティエンは睨んだ。

「あーあ、嘆かわしいなあ……お兄さん、おまえをそんなふうに育てた覚えはないよ？」

「育てられた覚えもないわっ!!」

やっとのことで相手の魔手から逃れると、クウはべえっと舌を出した。

「ってか仕事は！ だいたい、毎回毎回廁を理由に中座するなんて……あとでカイが『長糞陛下』とかあだ名つけられでもしたらどうするんだよっ!!」

「いや、それならもうとっくにつけられてっから」

「なっ……!？」

目を剥いたのと、ずしり、と何かが手のひらに載せられたのが、ほぼ同時だった。訝しげにそれを確かめたクウの目の玉が、さらに飛び出しそうにひん剥かれる——それはチビ竜のカイよりも大きな巾着袋で、中には、金銀銅貨と小銭が、これでもか、というほど詰まっていたのだ。

「何だよ、これ……」

「何だよって……報酬？」

飄々と、ティエンは答えた。

「先に言っとくけど、突っ返すなよ？　これは、カイも承知のことなんだからさ。っつーか、この旅の間、あんたがカイにしてくれたことだとか、ヤツがあんたにかけた迷惑だとか考えたら、むしろこんなんじゃ足りねえんじゃないかと思ってるんだ——俺も、それにカイもな。」

あとね、俺、今日は仕事ねえの。明日っから『^{かみ}上の荒熊（ヘキギョク王の異名）』のオッサンと首脳会談なんつーもんをするんで、目下あっちの国目指して馬車で移動中なんだよね。おまけに『今後』の段取り検討してっから、俺がいいぞっつーまで絶対^{ぜってー}覗くなよ！』って厳命してあっから、ぶっちゃけ動きたい放題ってヤツ？　ってことで、これからあんたの家と仕事探しに行くぞ」

「へっ!？」

「へっ!？　じゃねえよ。保証人がいるとしないとじゃ、話の進み具合が段違いだろうが——ましてや、あんたは女なんだからさ。それに、たとえその金を持ってたとしても、仕事はしてた方がいい。何にもしねえでぶらぶらしてるくせに暮らしには困ってねえんじゃない、御近所に思いつ切り怪しまれちまうだろ？」

「それは、そうだけど……って、ちよっと！　何先にすたすた行っちゃまってるんだよっ!！」

三度^{みたび}目を剥くと、クウは慌てて相手のあとを追った。

クウと気まぐれ白竜（後書き）

中盤のティエンのセリフ「そやって…」は脱字ではありません、念のため。

白竜王の気がかり

「まったくもお……兄弟揃って、ひとのこと振り回してばっか！」
「だあから一緒にすんなってば……！」

不満げな声をぶつけてきたクウを振り返ることなく、ティエンはひらひら、と手を振った。刹那、その唇に、かすかに苦笑が浮かぶ。

（ほんっと、見事なまでにあいつの「影」だよなあ俺ってば）

だが、もっと苦笑を禁じ得なかったのは、そのことに自分が思いのほか打ちのめされているという事実に対してだった。八つも年下の小娘だし、鼻っ柱は強いし、何かというと手足は出るし……どう考えても「やんちゃな妹」止まりだとばかり思っていたのに。

（畜生、てめえのせいだぞカイ……！）

まさに「男に惚れると女は変わる」を地で行くような変化であった。会うたび、会うたびに、あたかも芋虫が蝶になりなんとして一枚一枚皮を脱ぎ捨てて行くかの如く、どんどん垢抜けて、どんどん表情が艶めいて行って……

男の姿をしていたときでさえ、そのような有様だったのだ。女の格好をして化粧など施されてしまったては、息を吞んで絶句するしかなかった。とっさに軽口を飛ばして相手に脛を蹴ってもらわなかったら、間違いなく本能に負けて、あの場で抱き寄せてしまっていたことだろう。

（つつーか、どっちみち早々にビンタ食らって終わるに決まってるだから、やっちゃまったって良かったんじゃないやね？）

今さら気づいて、ティエンはがっくりと肩を落とした。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊

ユアンⅡカイⅡハシム五世の乗っている――ということになっている――馬車とお付きの騎馬隊の一行が、上つ国・ヘキギョクとの国境線の目前までたどり着いたのは、その日の昼過ぎのことであつた。国境を越えてしまつてからは、そうそう気を抜くわけにも行かない。ここで昼食にしようということになり、一行は歩みを止めた。

しゅるしゅるつ、と一陣の風が吹き抜けた。風は馬車の窓の遮光布を揺らして車内に入り込み、やがてゆるゆると人の形を取った。

（やれやれ、どうにか間に合つたぜ……）

座席の背もたれに身をゆだねて、ティエンは額の汗を拭った。いくら命令で誰も中を覗けないことになっているとはいえ、食事を取る様子ぐらいは見せないと、確実に怪しまれるだろう。幸い、クウの家と職探しの方はつつがなく終わっていたので、戻ることにも支障はなかった。ティエン自身が言った通り、「兄だ」と称して彼がついて行ったことで、驚くほど早く話がついたのだった。

ちなみに、幻術に長けているティエンは、変化を解くたびに素っ裸になるようなことはない。身に着けている衣服も含めて、自在に姿を変えることができるからだ。

「おお、そろそろ昼餉の刻限か」

何食わぬ顔でそう言いつつ馬車から顔を出した姿は、誰がどう見ても王族服で身を固めた国王陛下本人にほかならなかった。

一枚の衣を帯を締める形で着流すか、働きやすいよう短い丈の上衣と袴の組み合わせを身に着けることの多い一般庶民と違って、王侯貴族の服は、詰襟で長い筒袖のついた上衣に筒型の長尺の袴というかつちりとした形をしていた。国に有事あらば、即座に先頭に立って軍を率いられるようにということで、そのような体裁になったものらしい。

中でも、今ティエンが着ている濃紫いんむらさきの地に金糸銀糸で華やかな刺繍が施された王族服は、最上級の正装とされていた。国の命運を左右する大事な会談だというだけでなく、未来の舅殿である荒熊王に敬意を表して、という意味合いもあって、これを選んだのである。

頭に載せている黄金の冠も含め、普段自由すぎるほど自由に生きているティエンにとっては若干窮屈な代物ではあったが、微塵も表情には出ていない。それどころか、悠然と扇子を使いながら微笑んでさえている。天晴れなまでの影武者ぶり、と言いたいところだが、理由は全く別のところにあった。

(ま、天空城あつちでも十何年この手のカッコしてたからな……)

十年前まで、ティエンは天界において「白竜皇子はくりゅうのみこ」と呼ばれていた。というのも、彼とカイの父親は、天界の統治者「竜神王」だったからだ——つまり、カイは厳密には完全なる庶民の血筋ではなく、種族は違えど王者の血を引いていることに変わりはない、ということになるのだが、それはひとまず置くとして。

父は、まだ「青竜皇子^{せいりゅうのみこ}」と呼ばれていた皇太子時代、「人族殲滅」の大義を掲げる先代の竜神王に反発し、地上に下っていたことがあった。母とはその折に知り合い、所帯を持ったのである。

ところが、その母と、カムナギの先王ユアンⅡナスルⅡハシム四世が密通していた。

……と、少なくとも父は思った。

『見損なったぞ、ユアン！ それに、おまえもだ！ この恨み、いずれ必ず晴らさせてもらう……！！』

激怒した父はそう言い放ち、ティエンを連れて天界に戻ってしまった。その邪推が生まれるきっかけには実のところティエン自身も大いに関わっているのです、あまり偉そうなことは言えないのだが、そこを差し引いたとしても、やはり短慮であったとティエンは思う。

当時八つだったティエンは、ハシム四世と母の傍らにあって、彼らのやり取りの一部始終を見聞きしていた。そこには、父の勘繰っていたような内容は全く含まれていなかった――母はそのとき、どういうわけか半狂乱状態になっており、ハシム四世は、そんな母を幼子をなだめるような感じで抱き寄せ、頭を撫でていただけだったのだ。今思えば、このとき母の胎内にはもうカイが宿っていたはずで、つわりやそれに伴う気鬱に苦しんでいたのかもしれない。

それに、ハシム四世自身、他人の妻を略奪するような人物ではないともティエンは思っていた。何故なら、地上に下りた際に怪我を負った父を、何のためらいもなく手当てし、あたかも以前からの親友であるかのように遇してくれたのが、ほかでもないハシム四世だと聞いていたからだ。

そこで、ティエンは何度もそれを伝えようとした。けれど、父は全く聞く耳を持たなかった。

『御自分だって、一時は竜と人との融和を望まれておられたのでしように！』

『あの二人は、竜である父上を恐れることも蔑むこともなく受け入れてくれたかけがえのない存在だったのではなかったのですか……！！』

そう突っ込んでみただけけれど、結果は一緒だった。父にしてみれば、なまじ一度心から信頼を寄せた相手だっただけに、裏切られたという思いばかりが強まって、かえって頑なになってしまっていたのかもしれない。

『貴様……息子の分際で父にたてつくとは何事か！　ましてや、憎にくきあやつらをかばうなど……！！』

遂にそう咆哮した父はティエンを拷問にかけ、それでも考えが翻らないと見るや、城の地下牢に投獄した。このままでは死を待たばかりだと悟ったティエンは脱獄を敢行したが、「殺しても構わぬ」という父の非情の命により、追っ手が容赦なく攻撃をかけてきたこともあって、あっという間に満身創痍となり、真逆さまに下界へ落ちた。落ちた先が下つ国・ウナバルの王宮の庭であり、そんな彼を拾い上げたのが実の弟のカイだったのは、天の配剤であったのか、はたまた運命の神のいたずらであったのか――

（――ま、後者だろうな）

何しろ、落ちたときの衝撃で、ティエンは自分の名すら思い出せ

なくなってしまったのだ。ようやくすべての記憶が戻り、兄弟の名乗りを上げられたのは、ほんの半年ほど前のことであった。

ともあれ、そんなわけで、ティエンは、幼い頃から、いずれは竜一族を統べる者として徹底的な帝王教育を施されてきた。忌憚なく言ってしまうば、三年前に突然王位を継ぐことが決まり、王太子としての経験も積みぬまま即位してしまったカイとは、踏んできた場数が違うのだ。

だから、もしカイにとって今の立場が本当に重荷であって、すべてを捨ててもクウと添い遂げたいという意味もあるのならば、このまま何食わぬ顔で玉座に座り続けてやってもいいかな、とも思わないではなかった——カイのため、というよりは、クウのあんな「無理した」姿を見なくて済むのなら、という理由の方が大きかったのだが。

（ただ、なあ……）

それをしてしまうと、あの父の思う壺に完全にはまってしまう予感がする。実際、ティエンが時たまカイの影武者をしていることなど、執務室に設えられた巨大な水晶玉を通して、とっくの昔に知られてしまっているのだ。「このまま王位を奪ってしまえ。さすれば中つ国一國が勞せずして手に入る」と囁かれたことも一再ならずあった。そんな父が、ティエンが本当にカイに代わって国王になったなどと知ったなら……

『ようやくたぞ白竜！　これを足掛かりに、次は「そなたの」婚約者の実家である上つ国を狙うのだ——』

「誰がするかよ馬鹿——！」

「……陛下!？」

折しも手水鉢を捧げ持ってきた侍従のひとりが、ぴきん、と顔を引きつらせて硬直する。

「あ、いや……その」

げふげふげふ、と咳払いすると、ティエンは、あはは、とごまかし笑いをして見せた。

万が一にも刺客に狙われるようなことがあってはならぬので、食事は車の中で取らされた。例によって、毒見役を何人も通した末の冷えた菜ばかりだが、半日歩き回って空腹になっていたせいか、それなりに順調に箸は進んだ。

(つつーかあのチビ……)

もきゅもきゅと口を動かしつつ、ティエンは、ふと眉をひそめた。

父のそれよりはるかに小型とはいえ、ティエンの持っている水晶玉とて玩具ではない。昨日のうちに、だいたいのことは把握していた――カイが突然同行することを決めた「リク」という少年のことも、二人の間に何が起こったのかということも。

リクが「父の形見だ」と言って持っていた懐刀の文様は、カイが言った通り家紋だというわけではなかった。が、「御印^{みしるし}」ではあった。それも、国王かその嫡子だけが持つことを許されている品にしかつけられないという、まさに「国王または王太子であることの証」なのである。

無論、それだけでは模造品を所持しているという可能性もなきに

しもあらずなのだが、ティエン自身の記憶が、そうではないのだということをはっきりと証明していた。天空城にあった頃、例の巨大水晶玉を通して見たことがあったのだ――リクに極めて面差しが良く似た男の姿を。深紅の王族服に身を包んだ彼は、皆から「ユアンⅡリク王太子殿下」と呼ばれていた……

（……しかし、カイは何を考えてやがんだ）

ティエンほど確固たるものではないにしろ、あの懐刀を見た以上、カイにも推測ぐらいはついているはずだ――リクこそが、本来なら、王太子亡きあと王位を継ぐべきであった人間なのではないか、と。

幸い、リク本人はそのことには全く気付いていない様子だった。ならば、何かしらの理由をつけて、さりげなく離れるか、いつそ故郷に帰るよう促すべきではなかったのか。そうでなくとも、十数年を異国で暮らしてきたカイの即位については賛否両論あったのだ。何かの加減で、王宮の事情――殊に故王太子の顔をよく見知った者が、リクの姿や、彼の持っている懐刀を見たりしたら。しかも、その「誰か」が、実は「反・ハシム五世派」であつたとしたら……

王都到着！

「……ちよつと待ちなさい」

「はあ？」

露骨に嫌な顔をして、リクは立ち止まった。

（んだよ、珍しく役人には止められなかったのに……）

王都と各街道との境の木戸口には、王都から見て最初、街道から見れば最後の関所が設けられていた。どうせまた女と間違えられてすったもんだするんだろう、と覚悟していたのだが、そこでは驚くほどすんなりと「通ってよし」と言われたのである。なのに、まさかその直後に、こんなケチがつくことになるうとは……

行く手に立ちはだかっているのは、白髪の老人であった。年の頃は六十前後か。着ている衣と、鼻と顎の下にそれぞれ生やした立派な髭から察するに、それなりの身分の者と見える。

（けど、そうやってひとのこと舐めるみたくジロジロ見てる時点で、カンペキ、ドン引きってヤツだよなあ……）

はあ、と大きく嘆息すると、リクは渋々「いつもの台詞」を口にした。

「あのねじいちゃん。俺は、こう見えても男——」

ところが、思いがけず、相手は真顔でうなずいた。

「それはわかっておる」

「へ？」

「噂に聞いたのだ。私が捜している御方に良く似た偉丈夫が、昨夜、おまえのような少年と同じ宿に泊まっていたと……それで、先回りして、おまえが通りかかるのを待っていた次第なのだ。」

頼む。教えてくれ……！ その者は、どこにいるのだ？ もし途中で袂を分かったのなら、どのあたりでその者と別れた……！？」

「え……」
がしり、と両肩をつかまれ、取って食わんばかりの勢いで尋ねられて、リクは目を白黒させた。

（えーっと……それって、たぶんカイのこと、だよな……？）

自問したところで、あ、と思い当たる。

昨夜、クウは、カイと離れ離れになってしまった理由を「知られちゃいけないヤツと鉢合わせた」からだと言っていた。その「知られちゃいけないヤツ」こそが、この老人なのではないだろうか。恐らく老人は、「国王陛下」に極めて近いところにいる大臣か、お付きの誰かなのだろう。それで、カイは、大騒ぎになるのを避けたくて、早々に竜に変化^{へんげ}して逃げ出した……

（……っと待てよ？ 「捜してる」つつーことは、こいつ、カイのこと捕まえて、そのまんまお城に連れて帰るつもりなんじゃ……）

そういえば、懐の中の黒竜も、心なしか身を固くしているように思える。きつと嫌なのだ。せっかくの「修行の旅」が——自由に行きたいところへ行き、身分を気にすることなくさまざまな人々と触れ合い、あたたかい食べ物も存分に堪能することができる機会が、こんな形で強制終了してしまうなど……

(……させるかよ!)

即座にリクは決意した。どのみち、こうして王都に入ってしまった以上、旅が終わるのは時間の問題なのだ。ならば、せめてあと一両日ぐらいは好きなように過ごさせてやったって、罰は当たらないではないか……!

「……ああそうそう、確かに、昨夜はえらくガタイのある兄ちゃんと一緒に宿に泊まったよ」

ややあって、リクはおもむろに口を開いた。

「だけど……そいつって、ぶっちゃけ、竜だよ?」

「何……!?!」

たちまち相手の目が三角になった。

「貴様、ふざけたことを――」

「ふざけてなんかないさ。だって、頭触ったら、ぼんっ! って竜に変わるんだもん。おまけに、朝になったら、いつの間にかどっかに消えちまってさ――おかげで、俺、二人分の宿代払わされて、迷惑だったらありやしなかったよ。」

「っつーかさ、だいたい『御方』っつーからには、じいちゃんが捜してるのって、かなりの偉いさんなんだろう? そんな人が、俺ら庶民と一緒に宿に自分から泊まるわけなんかな?」

「だからさ、そう、あれだよ。たぶん、竜がその御方に化けてたんだ――ほら、キツネやタヌキが人を化かすみたくさ」

「なるほど……」

眉をひそめて、相手は考え込んだ。

「確かに、おまえの言う通りかもしれない。そもそも、へーいや、あの御方は、ずっとおし——お屋敷にいらしたのだ。先日、湯治に出かける際にも、面と向かってご挨拶申し上げたはずだし……それなのに、あのような場所で御姿をお見かけするなど、面妖なことだとは思っていたのだ。しかし、それもこれも竜めの仕業とあらば……いや、妙なことを聞いて申し訳なかったな。このことは、忘れてくれ——儂も、『じいちゃん』などと無礼な呼び方をされたことや、ぞんざいな口をきかれたことは見逃してやるゆえ。

そうとわかれば早々に戻らねば……！　いつまでも、副宰相に何もかもを任せてはおけんしな」

ぶつぶつ呟きつつ、そそくさと老人は去って行った。

「フクサイシヨウ……」

同じくぶつぶつと、リクは口の中で呟いた。

「ってことは、あのじいちゃん、もしかして——」

『ああ、ハクロウは我が国の宰相だ』

懷の中から重低音の声が答えた。

『それはそうと、済まなかったな。私とて、決して戻らぬつもりはないのだが——』

「わかってるって。要するに、『連れ戻される』んじゃないくって、『自分の意思で帰りたい』んだろ？」

ぽんぽん、と衣の上からリクは相手の背を叩いた。

「それに、こっちこそごめん。迷惑だとか言ったり、キツネやタヌキと同列扱いにしちまったりしてさ。でも——」

『わかってる。ああでも言わなければ、相手が納得せぬと思ったのであろう?』

遮り返して、黒竜はきゅきゅきゅ、と小さく笑った。

『その見立て、決して間違っではおらぬぞ——ハクロウは、一度言い出したらよほどのことがない限り引かぬからな。』

あの男は、私が即位するよりずっと前から、さまざまな大臣を歴任していてな。私などよりはるかに政務に通じておるゆえ、即位当時には、政のイロハからあれこれと教えてもろうたのだ。

ところが、少しでも私が妙な答えを返すと、自分の思う通りの返答になるまで、何度も何度も同じことを問うてきてな。おまけに、ほんのわずかでも下(つ国)の訛りが混じると、これまた何度でも言い直させられて——あれには、まこと往生させられたものよ。

まあ、だからと言うて、決して悪い人間だというわけではないのだが……私のことも、良くも悪くも非常に公正に評価してくれるしな。厳しい教えも、国のため、良き政のためを思うゆえであったのだろう。何しろ私は——』

そこで、突然カイは言葉を切った。

『いや、これ以上はよそう。つまらぬ繰り言になりそうな気がする——それよりも、ちいと腹がすかんか? 団子でも食いに行こうではないか』

「ええっ——」

また団子かよ、と言いかけて、リクはそれを呑み込んだ。思い出

したので――カイにとっては、団子とは、クウとの出会いの思い出につながる特別な食べ物だったのだ、ということ。ましてや、王宮に戻ってしまえば、もうそれを気軽に食べに行くこともできなくなる……

「つたくしうがねえな。ま、夕飯時までにはまだ間もあるし、付き合ってやっか」

「きゅるるーん!!」

懷の中から、歡喜の声が上がった。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「いやあ食った食った!」

それから半刻はんとぎ(約一時間)後。リクはすっかり満足して、その屋台をあとにした。

『この御店主はな、老舗の和菓子屋で、のれん分け寸前まで行ったという技うで量の持ち主なのだ。私が団子を食いに城下へ行きたくなつたのも、視察中、この屋台から流れてきた匂いに、どうしようもなく心惹かれたからだだったのだよ』

団子が焼き上がる前から、カイはそう言って絶賛しまくっていたのだが、その言葉に違たがわず、出された団子はどれも、外はカリッと香ばしく、中はふんわり柔らかで、甘辛いたれにしろ、餡子にしろ、これまでにリクが食べたどんな団子とも違う、うっとりするような味わいだった。

しかも、王都へ来た理由を問われるままに店主に話したところ、こんなことまで言ってもらえたのだ。

『なるほど、お父^とつつあんをねえ……そういうことなら、ウチで手伝いとして働いてみねえか？』

いや、別に団子屋になれつつつてるわけじゃねえんだぜ。ただ、人搜^{みやこ}したって、王都は見ての通り広^{ひれ}えんだ、一日二日で終わるもんじゃあんめえ？ だったら、食い扶持ぐれえはどつかで稼^{かせ}がねえとだろ？ おまけに、さっきから、でっかい兄ちゃんが、「頼む！ そうしてやってくれ！」ってな目でじいっとこっちを見てるしよ——俺^{おら}あ、兄ちゃんに初めて会ったときから、どうもその目に弱^{よわ}えんだよなあ。

ってことだからよ、落ち着き先が決まったら、いつでもまた訪ねてきな。そうだ、ナンだったら疳^{ねぐら}の方も、ウチの長屋の大家に口きいてやろうか？』

無論、リクにとっては願ったりかなったりの話である——もつとも、カイは、それを見越したうえで、わざわざ店主とリクを引き合わせたのかもしれないが。

「ほんと、おまえに付き合っ団子食いに行って良かったよ。ありがとな」

懷の中で、はたはた、と尻尾を振る気配があった。

直接帰着の挨拶をしたい、ということもあって、店主の前では人の姿をしていたカイだったのだが、今は、またチビ黒竜に戻って、リクの懷にちんまりと収まっていた。これは、団子屋に行く道すがら、二人で話し合って決めたことであつた。王都から十里以上も離

れた湯治場でさえ宰相と鉢合わせたのだ、王都の市中とあらば、「国王陛下」を見知っている者と出会う確率はさらに高くなるだろうと思われたからだ。

このような形で長時間隠れていなければならないのは、「人」として育ったカイにとっては、かなり窮屈であるはずだった。が、それでも「城に戻る」とは言い出さなかったところをみると、やはりまだ旅を終えたくはないのだろうとリクは見ていた。

だから、団子屋で働くことが本決まりになったとき、一瞬「ほんとはこのまんますぐに手伝いに取り掛かった方がいいんじゃないかな」と思いはしたものの、結局は当初の予定通り、引き続きカイと行動を共にすることにした。店主には、幾重にも礼を述べたうえで「これから王都^{みやこ}見物もしたいし、今夜はカイと到着祝いに飲みにも行きたいんで、明日また来ますね」と言い置いてきていた。

『こちらこそ……またしても何やら氣をつかわせてしもうたようで、申し訳なかったな』

自分から言って、カイはくるん、と蜷局^{とぐろ}を巻いた。程なく、ずしん、とその体が重くなる。腹が膨れて眠くなったのか、ここ数日の疲れがどっと出てきたのか……

「ま、俺は勝手にその辺見て回っから、ゆっくり寝てな」

そつと懷をつついてリクは相手に語りかけ……再び顔を上げたところ、ぎくりと立ちすくんだ。

V.S. 白竜!?

「カツ……!?!」

そこから先が続かない。思わず交互に見比べる――目の前に立っている男と、自分の懷を。

少し癖のかかった黒い短髪。浅黒くて均整の取れた長身。まさに「目元涼しい」という形容がぴったりの切れ長の目。役者のようにスツと通った鼻筋に、程よく引き締まった唇――着ている濃紫の王族服を若干薄汚れた着流しの麻衣に変え、髪を長く伸ばして後ろで結べば、彼は、まさにリクが知っているカイ以外の何者でもなかった。

(けど、あり得ねえよな……)

今も、懷はずっしり重いままなのだから。ちらりと覗いてみると、黒くてふさふさした鬚たてがみが規則正しく上下しているのも、はっきりと見て取れる。

「……そうか!」

突然閃いて、リクは身構えた。カイは、血のつながった兄がいると言っていた。兄弟ならば、顔が似ていても不思議はない。そして、もしかすると……

「あんたもカイを連れ戻しに来たのかよ!?!」

「『も』? ……ああ、そう言や宰相のオッサンに絡まれてたっけな、おまえ」

ひよい、と相手は肩をすくめた。

「そうね、ま、そんなとこかな——俺はティエン。おまえの懷ん中にいるちんまりした生き物の賢くて素敵なお兄様にして、有能な影武者様だ」

「影武者……？」

「ああ。だって、国王陛下がいきなりいなくなっちゃったら、城も巷も大騒ぎになっちゃまうじゃねえか。だから、俺がカイのふりしてやってたってわけ。宰相も言ってたろ？　カイは城にいて、湯治に出かけるときに挨拶だってしたはずだって——その挨拶の相手は、実は俺だったのさ。」

「だけど、本人がこうして戻ってきた以上、もはや俺は御役御免——つか、こんな窮屈な仕事、むしろこっちから御免こうむりたいです一刻も早く、みてえな？　ってことで、さっさとそいつをこっちによこしな。んでもって、おまえもさっさと故郷に引返した方がいい」

「だあれが……！」

叫んで、リクは着物ごとぎゅっとカイを抱え込んだ。

「つつーか、『賢くて素敵なお兄様』なんだったら、もっと弟の氣持ち汲み取ってやれよ！　このまんまトンスラするようなヤツじゃねえことぐらい、あんたにだってわかるはずだろ？　なのに、何であの四角四面なじいちゃんみたく、無理やり連れてこうとするんだよ——！　おまけに、どさくさに紛れて俺にまで妙な命令しやがって……あのな、俺は」

「親父さんだったら、この王都にゃいねえよ」

「……え？」

「カイから聞いたかどうか知んねえけど、俺、千里を見通せる水晶

玉つてのを持ってるんだよね——何せ、竜の息子なもんで？」

ふふん、と鼻を鳴らすと、ティエンは口角を上げ、牙を思わせる八重歯を見せた。

「だから、おまえとカイが出会ったときから今までのこともだいたいのところは知ってるし、おまえの親父さんらしき人が玉に映ったのも見たことがあるのさ」

「なっ……」

愕然と、リクは相手を見つめた。

「じゃ、じゃあ、あんたは、俺の父ちゃんが——」

どこの誰か知ってるのか、と聞きかけた、そのときだった。

だしぬけに、黒い影が懷から飛び出した。影はティエンめがけてまっすぐに飛んでいき、がぶり、とその腕に噛みついた。たちまち、ティエンの口から悲鳴が上がる。

「いいっ、てええ~~~~っつっ！　ちょ、カイ、おま、何やつ……
……てててっ！！」

「キイツ、キイツ、キーーーーッッ！！」

ティエンの腕に噛みついたまま、黒竜は甲高い警戒音を発した。黒くて丸い目が、真っ向から相手を睨みつける——その目にうるうるとした光が宿っていることにリクが気づいたのと、ティエンがハッとした顔になったのが、ほぼ同時だった。

「……わかったよ。だったら好きにしろ！」

吐き捨てるように言うと、ぷいとティエンはそっぽを向いた。

「その代わり、何があっても知んねえからな俺は!!」

「きゆるっ、きゆるるるっ!!」

嘸みついていた口を離すと、毅然とした声で黒竜は答えた。ティエンに向けられた言葉だったからか、リクには人語の方までは伝わってこなかったが、恐らく「ああ、わかっている」とか「無論、覚悟のうえだ」とかいったようなことを言ったのだろう。

「何だあ? あれ」

「真っ黒で、羽なんかついてやがるぞ」

「コウモリか……?」

悲鳴が響き渡ったせいにか、まわりがざわついてきた。チツと舌打ちして、ティエンはパチンと指を鳴らした。とたん、カイの姿が黒い猫に変わり、「にやうん!」と一鳴きしてリクの懷に飛び込んだ。さらにもう一度パチンと指が鳴ると、今度はティエン自身が真っ白な一本の煙となって、しゅるしゅるっ、と大空高く立ち上った。^{のぼ}

雲の上に出たところで、ティエンはすかさず白竜に変化し、^{へんげ}一直線に北を目指した。その先には、明日からの会談の場になっているヘキギョク王宮がある。本当は、カイを引き取ってそこまで連れて行き、宿泊のために用意された部屋で彼と入れ替わるつもりでいた。やはり、荒熊王には「本物の婿殿」に会ってもらうに越したことはない。それに、当初から覚えていた「本来の王位継承者」リクが王都に腰を据えてしまうことに対する懸念も、どうしても拭えなかった。なればこそ、朝から何度もの変化と移動で正直くたくたになっていた体に鞭打って、何千里もの距離を飛んで戻ってきたのである。

が、もちろん、そのようなことはティエン以外の誰も知る由もない。

「な、何だ、手妻（手品）か!？」

「幻術師だ! あれは絶対幻術師に違いないぞ……!!」

さっきまでカイに向いていた人々の視線は、今や上空のみに注がれていた。その隙に、急ぎ足でリクはその場を逃れた——結局ティエンに救われた形となってしまうのが、若干悔しくはあったけれど。

「……さてと、気を取り直して、王都見物再開すつか」
みやこ

ようやく人だからから離れたところで、そう言って懐を見下ろすと、カイは、またしてもこくこくと船を漕いでいた。それこそティエンの見せた一瞬の幻術だったのだろう、黒猫だったその姿は既に黒竜に戻っている。

「あれま、よっぽどくたびれてたんだな、おまえ」

リクは苦笑した。

（ほんととは、聞いてみたかったんだけどなあ……「おまえも、もしかしたら父ちゃんのこと、知ってたんじゃない？」って）

ティエンが知っていたということは、その可能性は大いにある。なのに黙っていたのだとすれば、その裏にはよほどの仔細があるのに違いない。ならば、包み隠さずに教えてほしかった。だって、クウに頼まれたのだから——「何でもかんでもひとりで背負い込んで、

しまいにはそれに押しつぶされちまうようなところがあるんだよ。あたしの代わりに、そうならないようにしっかり見張っててやってね」と。

（ああ、でもあれかな、俺があんまり張り切ってたもんだから、「王都にはいない」なんて言えなかったのかな……）

ふっとそんな思いが頭をかすめたとき、いきなり背後から荒っぽい声が響いた。

「どけどけどけどけいっ!」

「うおっ!」

慌てて飛びのくと、荷物を満載した大八車が恐ろしい勢いで走り抜けて行った。大八車だけではない。牛車も馬車も、人波を縫うようにして何台も走っている。牛車にしろ、馬車にしろ、月に一度通ればいい方だったハクト村とはえらい違いだ。

（つつーか、ナンもかもが全然違えよな……）

大通りには、村の全員よりはるかに多い人間がひしめいているし、その通りの両側には、見上げるだけで首が痛くなるような高い建物が所狭しと立ち並んでいた。きらびやかな着物や反物をこれでもか、というほど並べた呉服屋。食欲をそそる匂いをぷんぷんと漂わせている飯屋。リクの顔ほどもある大きな錠前ががちりとかかった米蔵や金蔵。路地の奥の暗がりからは、そこはかとなくなまめかしい芳香も流れてきていて……

ぽかん、と口を開けた状態でそれらの光景を見て回っているだけで、あっという間に時間が過ぎて行った。いつしか日はとっぷりと

暮れ、通りの店屋にも、ひとつ、またひとつと明かりが灯り始める――そのうちの一軒の軒先に一膳飯屋の提灯を認めて、腹の虫がぐうっと音を立てた。思わずリクは赤面した。

（あんなに団子食ったのになあ……）

ま、育ち盛りだもんな、と自分で自分に言い訳して、のれんをくぐる。いらっしやい、と威勢のいい声に迎えられ、店の隅の席に座った。

「何にしましょ？」

「そうだな……じゃあ、握り飯と粕汁と鶏の煮しめちょうだい。そうそう、握り飯と煮しめは、もう一人前作って包んでくれる？ もう少ししたら宿屋で連れと落ち合うことになってさ、そいつに食わしてやりたいんだ」

言い添えたのは、懐の中のカイが相変わらず目覚める気配がなかったからだ。この分なら、夜中あたりに目が覚めて、「腹が減った」と騒ぎ出すのに違いない。

刺身や焼き魚と違って、あらかじめ用意してある煮しめは出てくるのが早い。それをわしわしと掻っ込み、もぐもぐと握り飯を頬張っている、先ほど注文を取りに来た女将と常連客らしい連中とのやり取りが、聞くとともになしに聞こえてきた。

「しかし良かったよなあ、ここの立ち退きの話がなくなって」

「ほんとだよ。これも、国王様が悪徳地主たちをとっ捕まえて下すったおかげだねえ」

それを皮切りに、ひとしきり「国王陛下の政まつだい」についての評判が

飛び交う。やれ税金を下げて下さった、だの、歩きづらかった道を整備して下さった、だの、前の戦で身寄りを失った子たちのために、寝泊まりできる場所や、手に職をつけるための学校を増やして下さったおかげで、子どもの掏摸すりやかっぱらいが目に見えて減った、だの……

「いやあ、あの若さで王位を継いで、おまけに外とつ国人ぐにも同然だっ
たろ？ 最初はどうかと思っていたが……なかなかどうし
て、やってくれるじゃねえか」

「上下かみしもとの国境の警備も、前と比べてかなり手厚くなったらしいし
な——これで、この国もすっかり安泰だな！」

ずずず、とリクは粕汁を飲み干した。その椀の陰で、知らず知ら
ず笑みが浮かぶ。

（……そっか。良かったな、カイ……）

本人は「万事に不慣れで」などと謙遜していたが、見る者はやは
り見てくれていたのだ。どれほどカイが頑張って政務をこなしてい
たのか。どれほど「万民のため」を思い、心を砕いていたのか……

（つたく、こんなときに限って爆睡しまくりやがって）

それだけが、何とも残念だった。けれど、だからと言って、ぐっ
すり眠っているのを叩き起こすのも忍びない。

（あとで、ぜーんぶ話して聞かせてやろうっと）

耳の穴をくるくる、とほじくると、リクはさらにじつくりと話に
耳を傾けた。

我悩む、ゆえに我――

夕餉^{ゆうけ}を取った飯屋の程近くに小体^{こてい}な宿屋もあったので、そこへ逗留^{りゅうりゅう}することにした。無論、今夜は昨夜のようなわけには行かないから、泊まるのは、いつもの如く一番安い大部屋である。

部屋の隅に積んであった煎餅布団を窓際に敷き、ゴロリと横になると、リクは相部屋になった客たちに背を向けて死角を作った。懷からカイを出して、そっと布団の上に置いてやる。かすかにカイは身じろぎしたが、目はつぶったままだった。気持ち良さげに一伸びだけして、またくると蜷局^{とぐろ}を巻く。

（やれやれ……もしかして、朝まで寝る気かよ）

もっとも、苦笑したそばから、リク自身も、ふわあ……とあくびを漏らした。ほぼ一日近く街道を歩き、王都の市中も歩き回って、すっかりくたびれ切っていたのだ。またたく間に、体が鉛のように重くなって行く。カイが起きたら一緒に湯屋に行って、今日の汗と垢とをきれいさっぱり洗い流すつもりでいたのだが、

（やっべ……無理だわ）

目が覚めたとき、カイが匂いで食べ物があるとわかるよう、その鼻先に飯屋から持ち帰った菜^{さい}を置くと、リクは、とぷん、と眠りに落ちた。

リクがすうすうと寝息を立て始めたとき、黒竜が再び身じろぎし、うすく片目を開けた。まるで見計らったかのようであった。それもそのはず、カイが本当に眠り込んでいたのはティエンが来る前までで、そのあとはずっと、目を閉じたまま起きていたのである。

『おまえも、もしかしたら父ちゃんのこと、知ってたんじゃない？』

ティエンの言を聞いたリクが、そう問うてくるであろうことは、カイにも予想がついていた。そして、確かに、リクの懐刀を見たときから、彼の父親は自分の亡き長兄ではないかと思ってもいた。ただ、確信を持つまでには至っていなかった——実際にユアン・リク王太子の姿を見たことがあるティエンとは違って、懐刀以外の判断材料が全くなかったからだ。

生まれてすぐにウナバルへ送られてしまったので、長兄の顔など当然のことながら覚えていない。肖像画でもあれば話は別だったのだろうが、あいにくカムナギでは、国王のものしか描かれないのが慣例となっていた。国王そのものを神格化する、という意味合いもあったし、病死や戦死等が原因で、嫡子が何度も変わったり、今回のカイのように想定外の王子がいきなり王位を継いだり……といったようなこともままあったので、下手に「王太子」と銘打った絵は残せない、といういささか現実的な理由もあってのことだった。

そんなこんなで、昨日、文様のことを尋ねられたときにもはぐらかさざるを得なかったし、今回も、軽々しく「その通りだ」という返事はできなかった。かと言って、「知らなかった」というのも嘘になる。それで、寝たふりをして答えること自体を回避したのであった。

だから、飯屋では、ここで目が覚めた体^{てい}を装おうかなとも思ったのだ。ちようど小腹もすいてきており、煮しめや焼き魚煮魚の匂いも、しきりと食欲をくすぐっていた。

ところが、目を開けようとした刹那、その食欲が一気に減退した——「国王陛下の御評判」が、耳に飛び込んできたせいであった。

（あれは……「私の」功績などではない……）

すべては、カイが旅に出ていたこの半年の間になされたことだった。つまり、影武者を務めてくれていた兄・ティエンの手腕によるものののだ。

（私は……）

本当に、「あの」あとを引き継げるのだろうか――

ティエンにしてみれば、特に他意もなく、自らにできることをしたまでなのだろう。だが、同じことを、果たして自分はなし得るのだろうか。

……否、実は「同じ」ではいけないのだ。暮らし向きが良くなれば、さらに良き暮らしを望むのが人の常。その期待に、自分は応えられるのだろうか……

（……難しい、だろうか……）

「そのような御了見で、一国の王が務められるとお思いか！」
「その程度の御判断、何故瞬時にお出来になりませぬ！ 事が事ならば、一村すべてが飢えて死にかねませんぞ！」――宰相・ハクロウにも、何度……否、何十、何百度、そんな叱咤を受けたかわかりはしない。決して自分という個人への攻撃ではなく、国のため、民人のためを思っていることだと理解はできたから、必死にそれに応えようとはするのだけれど、そうやって気負えば気負うほど、ますます頭の回転が鈍って行った。まして、そのような折にウナバル訛りのことなど指摘されれば、さらに頭が真っ白になってしまっ……

（リクならば、きっと、そうではないのだろうか……）

数刻前、彼がとっさに見せた機転が、鮮やかに脳裏に甦る。あの判断力に加え、育ちも育ちだ。一般庶民の心の内を察することなどお手の物だろうし、それだけに、下すであろう決断もさぞかしの確なのには違いない。

加えて、「王家の嫡流」でもある――まだ不確定だとはいえ、ティエンのあの物言いから推して、恐らく、ほぼ間違いはないのだろう。

（私とは、大違いだ……）

本当は王家の血など一滴も流れてはおらず、それどころか、人外の――それも「災いのもと」であるとされる竜の血筋ですらある、この自分とは。

（やはり、彼を連れてきて良かった……）

明日にでも、リクを伴って城に戻ろう。そして、彼を、特に長兄を良く知る古い家臣たちに引き合わせ、「確かにこの方は、ユアン・リク殿下のお子様かもしれません」という声が上がれば、潔く王位を明け渡すのだ。無論、最初は不慣れで戸惑うこともあろうが、ティエンを説得して自分の姿をしたまま摂政になってもらい、政界の重鎮であるハクロウと共に補佐してもらえば、リクのことだ、すぐに持ち前の才覚を発揮して、良き国王となるのに違いない。

（さすれば、この国はもっと良くなる……）

少なくとも、単に戸籍上王家につながっているというだけの理由で「無能なよそ者」が玉座を占めているよりは、ずっと、ずっと……

「……っ！」

キリキリ、と胃の腑が痛み、吐き気がこみ上げた。矢も盾もたまらず、カイは布団から、そして大部屋の窓からも飛び出した。ほとんど落ちるように路傍の茂みに飛び込み、激しく咳き込む。空腹だったのが幸いして、出てきたのはわずかな胃液のみであった。が、吐き気は一向に止まらなかった。仔竜の小さな体であったのも良くなかったのだろう、どんどん体力が奪われて行き、だんだん目の前がかすんでくる。

「ぎゃうん！」

唸り声に我に返ったのと、左肩から右脇腹にかけて鋭い痛みが走ったのが、ほぼ同時だった。

「ぐるっ、ぐるるるる……」

狩人の目になった虎猫が、じいっとこちらを見下ろしていた。痛みをもたらししたのは、その両の前肢の爪だった。黒竜の小さな両肩をしっかりと押さえつけ、地面に繋ぎ止めている。人の姿をしていれば払いのけるなど造作もないが、相手の頭ほどこしか大きさがなく、しかも消耗し切っている状態では、いかんともしがたかった。カイは、じっと相手を見返し……ゆっくりと目を閉じた。

『殺^やるんなら、早^{はよ}うしいや』

口をついて出たのは、使い慣れたウナバル言葉であった。

（そうだ……思えば、あそこにいた頃から私には「居場所」などなかったのだ）

そんなものなど、求めてはいけなかった。中下両国なかしもの和睦の「証
拠品」。しかしながら、ひとたびその約定が破られれば、あつけな
く首を落とされる、まさに「捨て駒」——それが自分の立場であり、
「分」でもあったはずだった。ならばいっそ、この猫に食われてそ
の血肉となった方が、「捨てられ甲斐」だってあろうというもの……

ふっと体が軽くなった。一瞬、人の姿に戻ったのかと思ったが、
そうではなかった。

何事もなかったかのように悠然と、猫は立ち去ろうとしていた。
ピン、と上げた尻尾が、ふん、と嘲笑うように揺れる。

（猫に取られる価値すらなしか、私は……）

ズキリ、と痛んだのは、果たして体の傷だけだったのか……

『おのれユアンⅡカイⅡハシム……！　よくも我が弟を……！！』

今度は、半年前、とある山中で聞いた怨嗟えんさの言葉が、くつきりと
脳裏に甦った。翻る銀の刃、脾肉を絶つ嫌な感触、血しぶきと臓腑
の飛び散るさまも……

刃を向けてきたのは、ウナバル王の一の姫で、政略結婚によって
長兄の妻となっていたユナ妃であった。

さらにさかのぼること半年前、カイは、ユナ妃の弟であり、長年
の因縁の相手でもあったウナバル王太子を斬った——ことになって
いた。本当は、その原因となる国境紛争が起きたとき、カイは流行
病に臥せっていて、例によって影武者として代わりに戦場に出たテ
イエンが、「よくもカイに無体なことばっかしやがったな！」とば
かりにばっさりと斬り捨てたのであったが、そんなことなど知らな

いユナ妃にしてみれば、カイこそが弟の仇であることに他ならない。それで、どこで聞き知ったのか、旅先までカイを追いかけてきて、親しげな素振りで人気ひとけのない山の中へ誘い込み、斬りかかってきたのだ。

だから、返り討ちにした。

あのときは、それもしかたがないと思っていた。国王たるもの、国のため、民のために、たとえ相手を斬っても生き延びねばならぬのだ、と。だが……

(義姉様……)
あねさま

仰向けのまま見上げた夜空が、ぼんやりとかすむ。

(やはり、あのとき……あの瞬間、喜んであなた様の御手にかかっておくべきだったのですね……)

ユナ妃は、「用事で北部へ行くところなのです」と言っていた。これまでは、それはただの方便だったのだろうと思っていたのだが……

リクも、北部の出だ。団子屋の店主との世間話の中で、本人が「北部のハクトって村から来た」と言っていたのである。ということは、もしかするとユナ妃は、夫の忘れ形見の存在を知って、迎えに行く途中だったのではないだろうか。カイの義母の王太后がそうであったように、本来ならば妾腹の子など迎え入れたくはなかったのだろうが、「弟の仇」にのうのうと玉座にふんぞり返っているよりは、まだましだと考えて……

だと、するならば。

（死ぬべきだったのは、やはり私だ……）

そうすれば、リクは何の問題もなく父親の後を継げたのだ。ユナ妃も、長兄との間に恵まれた二人の姫君と共に、今も健やかに……
「憎^{にく}きユアンⅡカイ」への仇討ちも見事なし遂げて、心晴れやかに過ごせていたのであるに……

「かん、にん……」

堪忍してな、あねさま……その呟きを最後に、小さな黒竜は、ぴくりとも動かなくなった。

ババア降臨！？ 伏魔殿への正体！！

それから、一刻とせう（約二時間）ほど後。

「うーん……」

ごそごそとリクは身を起こした。飯屋で粕汁をお代わりしたうえに、厠に寄らずに寝てしまったので、今頃になって尿意と便意を覚えたのだ。

その手が偶然、菜さいの包みに触れた。そこで、はたと我に返る。

「あれ？ カイ……？」

包みの傍で寝ていたはずのカイが、いなくなっていた。包みを開いた形跡もない。

（あいつも、便所かなあ……）

しかし、厠にも彼の姿はなかった。おかしいな、入れ違ったのかなと訝りつつ用を足すと、リクは再び大部屋の布団に戻った。あらためて掛布団をめくり、敷布団の下まで覗いてみたが、やはり、黒竜の羽一本さえ見当たらない。

（まあ、荷物も一式ごっそり置いてあるし、そう遠くへは——）

そこまで考えて、ギクリとする。

（ちょ、待て……それって、むしろヤバくね！？）

荷物の方も、リクが置いたそのまま、カイが人に戻って着替えた気配は全くなかった。ということは、彼は黒竜の姿のまま街へ出たのだ。そんな状態で、万が一、何かの加減で変化が起こってしまったら……

「ちょっと出かけてくるから！」

宿の帳場に断って、リクは荷物小脇に、もう一度夜の街に飛び出した。

もう真夜中も近いというのに、相変わらず通りは人であふれ返っていた。ここに全裸の男がいきなり出現すれば、昨日以上の大騒ぎになってしまうのは必定だろう。

それに、ここは何と言っても「国王陛下のお膝元」。騒ぎを聞いて駆けつけてくる捕り方だって、みんな「本物の陛下」を見知っているはずだ。そうしたら、あっという間に正体が露見して、そのまま王宮に連れ戻されて……！！

「カイ？ カイ……！？ カーイ！！！」

叫びながら、リクはその辺一帯を走り回った。けれど、反応はなかった。

（何せ、あのちっちゃえ翼だ。いくら時間が経ってるつつたつて、せいぜい二つ三つ先の角ぐらいまでしか行けねえはずだけど……）

もしかして、ティエンを呼んで、自分から王宮に戻ってしまったのだろうか。

「でも、それだったら、カイのことだ、一言ぐらいあってもおかし

くねえよな……?」

半ば自分に言い聞かせるようにひとりごちたそのときだった。横合いから、ぐいっと袖をつかまれた。そのまま、路地に引きずり込まれる。

「何だよカイ、どこほっついてうおああーっ!？」

最後まで言えなかったのは、心底からぶったまげたからだった。

そこにいたのは、カイではなく。

……というか、男ですらなく。

(な、んなの、こいつ……)

ありとあらゆる化粧品で極彩色に塗られた顔。

でっぴりした腹に、ヒョウ柄の派手な着物。

活火山と見まごうほどに高々と盛り上げた真っ金金の髪――

(何これ、新手の化け物!?)
もん

それとも、悪魔の化身か何かだろうか……!?

死んだ母に「お年寄りのことは、ちゃあんと尊敬するんだよ」と教え込まれて育ったから、女性の年配者の呼び方はたいてい「おばあさん」。どんなに親しくても、せいぜい「ばあちゃん」止まりだったのだが、今回に限っては、そのどちらでも呼べそうにない。

(ほんっと申し訳ねえけど、マジ「ババア」としか言いようねえわ……)

「ど派手ババア、ここに降臨!？」——そんな瓦版の見出しが浮かびそうな勢いである。後光ならぬ金ぴかの髪の毛の光で、頭がくらくらしそうだ。

しかも、「恐怖体験」は、そこで終わりではなかった。

「……ク……」

わなわなわな、と唇を震わせたかと思うと、ババア——もとい老婆は、いきなりリクに抱きついてきた。そして、おんおんと声を上げて泣きじゃくり始めたのだ。

「おおお、リク……ユアン!!リクう~~~~っ!!」

「……はい!？」

穴のあくほど、リクは相手を見つめていた。

(何こいつ? 何で俺を「リク」って……)

一瞬混乱しかけたところで、ん?と眉をひそめる。

「あの、人違いなんじゃ……俺、確かに『リク』ですけど、ただの『リク』ですから! 『ユアン』?とかいうのはくっついてませんから……!!」

肖像画が描かれないのと同じ理由で、王子たちの名前も世間には公表されていなかった。国王となって初めて「御名」が明らかにされ、学校でも教えられるのである。王子たちの側近にだけは名が知らされてはいたものの、その彼らでさえ、本当に名を呼ぶ必要があ

ると認められたとき以外は、「王太子様」だとか「二の君（第二王子）様」だとかといった呼び方をするよう厳しく教育されていた。つまり、リクにとっては、「ユアンⅡリク」とは、

（つか、誰だよそれ……）

という存在にすぎなかったのである。もう少し平静であったなら、「ユアン」がカイの名前の一部と一致していることに気づけたかもしれないが、何しろ、妖怪変化のような生き物にがちりと抱きつかれたままなのだ、とてもそこまでは気が回らない。

そんな時間が永遠に続くのではないかと暗澹たる気分にとらわれ始めた頃、ようやくバタバタバタ、と別の人間の足音が響いた。

「姫様……姫様っ!!」

姫様？ 思わずきょろきょろとリクはあたりを見回した。無論、絵草子に出てくるような可憐で楚楚とした「お姫様」を想像してのことだ。が、そんな人物はどこにもいなかった。代わりに、白髪をびたりと七三に撫でつけ、針金のように細い体を渋茶の上下衣で包んだ老爺が、慌てふためいた足取りで駆け寄ってくる。

「ああ、申し訳ありません！ 姫様が失礼なことを」

「……は？」

ぎょっとして、リクはいまだ自分に抱きついていてる老婆を見直した。

「あの……姫様って」

「はい、その御方にございます」

何の迷いも見せず、老爺は肯定した。

「確かに、そう呼びするには畏れながらいささか臺^{どう}が立ちすぎて
いるきらいはございますが、十代の頃から執事としてずっと御傍に
お仕えしております私にとりましては、やはりこの御方は『姫様』
にほかなりませぬので」

「そ、そう、っすか……」

としか返しようがなく、リクは、あはは、と引きつった笑いを浮かべた。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「息子さんを亡くされた……?」

「ええ、三年前の流行病で」

ドウタクと名乗った老爺は、牛車を御しながら応じた。その横に
リクが座っているのは、後ろの座席にどっかりと鎮座ましましてい
る「姫様」が、どうしてもリクを屋敷へ連れて行くのだと言って聞
かなかったからであった。

「そして、あなた様は、そのお坊ちゃまの若かりし頃に大変そっく
りでいらっしゃるのです。ですので、姫様は、お坊ちゃまがこの世
に甦^{よみがえ}って来られたかのように錯覚してしまったのでしょうか。

聞けば、お名前もよく似ていらっしゃるとのこと、これも何かの
御縁かもしれませぬ。私からも、お願いいたします。今夜はぜひ私
どもの屋敷へお泊まりになり、明朝、お宿の方に戻られては……お

召し物も随分と汚してしまっただようので、お洗濯もさせていた
だきたいですし」

お宿の方にはこちらからご連絡させていただきますので、お友達が
が戻られても大丈夫だと思いますよ、と付け加えられれば、そうで
すね、と答えるしかないだろう——本当は「ちゃんと『戻られ』る
かどうか」自体が気になってならないのだが、この流れでそんなこ
とを口にすれば、「だったら、お友達も捜してお連れしましょうか」
などという話になりかねない。その結果、ということが起こるか
……少なくとも、吉報がもたらされるとは到底思えなかった。

（ごめんな、カイ……朝には絶対帰るからさ）

心でそつと謝ると、リクはその申し出を受け入れた。

屋敷は、王都の西の端の山中にあった。

「では、妾は部屋着に着替えてくるゆえ」
わらわ

どっしりした腰を振り振り、「姫様」は早々に自室へ消えた。

「さ、リク様も御召し替えを」

ドウタクに促されて、リクも、相手のあとについて歩きだした。
その口から、程なく感嘆のため息が出た。

（しっかし広えなあ……厠が最低十か所はなきや、確実に漏らしち
まうんじゃない？）
ひれ

おまけに、ドウタクの話では、ここは「姫様」の実家の別荘で、

もとは、王都の中心近くの、もっと広くて立派な屋敷に住まっていたのだという。

「ところが、お坊ちゃまが亡くなられ、そのあとを継いだのは、姫様にとってはなさぬ仲の……それで、姫様は、その者に追い出されるような形でこのような田舎に」

本当に、お坊ちゃまさえお元気であったなら……悔しげにそう呟いて、ドウタクは目頭を拭った。それから、はっと居住まいを直し、面映ゆげに付け加えた。

「ああ、申し訳ございません！　あまりお坊ちゃまの在りし日を思い出させてもと、姫様のいらっしやる前では極力このような話題は避けているのですが、その分、ということなのでしょう、今のように姫様が御傍にいらっしやらなくなると、つい本音が出てしまつて……」

さて、ここから先が、お客様の泊まりになるお部屋になります。今宵はこの一番手前のお部屋へお泊まり下さい。お召し替えもこちらでお願いいたします。脱いだお召し物は、扉の傍の籠にお入れ下さい。新しいお召し物は、部屋にあるものどれでも好きなものをお選びになって構いません。では、私はお茶のしたくがございますので……頃合いを見て、お迎えに上がります」

「は、はあ……」

戸惑いながらもうなずくと、リクは部屋に入った。言われた通りに脱いだ着物を籠に入れ、衣裳戸棚を開けたとたん、その表情が、ますます戸惑いの色を帯びる。

（何だよ、この着物……）

「姫様」などと呼ばれていて、これだけの屋敷に住まっていて、しかもそれが「田舎の山荘」だというのだ、それなりの家柄なのだろうとは思っていた。

（けど……これって、ぶっちゃけ王侯貴族の服じゃんか）

数刻前、カイに扮したティエンが全く同じ形の服を着ていたのを見たばかりだから、間違いはない。それに、寺子屋や中等学校で見た歴代国王の肖像画でも、王たちは皆、この手の衣裳を身に着けていた。

ちなみに、この肖像画、いまだに先代王のものまでしか描かれていない。王太子と国王の両方が立て続けに亡くなったので、その分、喪に服す期間も延ばしたからだと聞いている。リクがカイの正体に気づくのが遅れたのも、そのためだったのだが……

（……っと待てよ？　カイって言やあ……）

彼が妾腹なのにもかかわらず王位を継承することになったのは、王太子が亡くなり、ほかの王子たちも既に鬼籍の人となっていたからだだった。一方、この家では、「姫様」の息子が亡くなったために、妾腹の子が後継者になったという。これは、単なる偶然なのだろうか？　それとも……

ウソだろマジかよ信じらんねえ!! 再び

「……って、ふんどし一丁で悩んでもしょうがねえ、か」

あとでさりげなくドウタクに探りを入れてみよう、と決めて、リクは衣装戸棚の中では一番地味そうな紺無地の服を身に着けた。

（えへへへ、ちょっと偉くなったみてえな気分?）

こんな服装ができることなど、今後の人生ではまずあり得まい。だったら、せいぜい楽しまねば……そう思い直して、鏡の前で役者のように格好をつけたり、くるりと回ったりしているうちに、コンコン、と部屋の扉が叩かれた。

「お支度は整いましたでしょうか?」

そう言いながら入ってきたドウタクは、リクの姿を見るなり絶句した。

「ほ……本当に、よく似ておられる……」

しばしの間を置いて、ようやくそう呟くと、まるで気分を切り替えようとするかのようにそそくさと汚れ物の入った籠を持ち上げる。ところが、そこで再び彼は唸った。

「な、何と……!」

「あの……どうかされましたか?」

「どうかしたところのお話ではございません!」

今度は間髪入れずにドウタクは答えた。そして、やけに厳しいまなざしで、じっとリクを見据えた。

「正直にお答え下さい——この籠の中の懐刀、どちらで手に入れられたのです？」

「へ？ ……あ！」

言われて初めて、リクは脱いだ服と一緒に懐の中身まで籠に入れてしまっていたことに気が付いた。

「いやあ……すみません！ 俺、こんな立派な部屋に入るの初めてで、すっかり緊張しちまって……親父の形見なのに、うっかりそれ、洗濯に出しちまうとこだった」

無論、場を和ませようと、あえて冗談めかして言ったのである。しかし、ドウタクの表情は変わらなかった。

「お父様の形見……それは、まことなのでございますね？」

「え？ あ、はい……」

わけがわからずうなずくと、さらに畳み掛けるように聞いてくる。

「それで、あなたさまのご出身は」

「……は？」

ますますわけがわからず、リクは目を白黒させた。

「ご出身、って……えーっと、北部のハクト村——」

「その前は」

「はい？」

「先祖代々、ハクト村とやらに住まわけていたわけではないのでは？
お母様は、どちらからいらしたのです」

「母ちゃ——いや、母、ですか……？」

何でそんなことまで詮索するんだ、とは思ったものの、答えねば
次に進ませてもらえそうにない。

「えーっと……そういえば、俺が生まれるちょっと前まで、もっと
北の、カ……カノ……？」

「カノへ村、ではないですか？」

「ああそうそう！ ……って」

さすがに、疑いの眼を向けざるを得なかった。

「ヒツジさん。何で、そんなこと知ってるんです」

「……シツジ、でございます」

律儀にドウタクはリクの北部訛りを訂正した。それから、だしぬ
けに籠を放り出し、リクの前に跪いた。

「よくぞお戻り下さいました、新王陛下！」

「しん、おう……！？」

ナニソレ、オイシイノ？ そんな埒もない思いが頭に去来する。

「あ、あの……言っている意味が……」

「そのまま、にございます」

跪いたまま、ドウタクは応じた。

「あのような格好で街に出られていることが知れるといろいろと面倒ゆえ、あえて口をつぐませていたのですが……姫様こそ、前王妃様（前王后様）にして、現在の王太后陛下。そして、あなた様は、王太后陛下の実のお孫様——今は亡き王太子ユアンⅡリク殿下の忘れ形見に間違いございません！ その懷刀と、御母君の王太后陛下でさえ見間違われたほど殿下そっくりのお顔が何よりの証にございます……！！」

沈黙が流れた。リクは、相手の言葉を二回、心で反芻した。そして、三回目の反芻が終わった瞬間、素っ頓狂な叫びを上げた。

「嘘、だろ……！？」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

……嘘では、なかった。

それから間もなく、応接間に通されたリクは、一通の書状を手渡された。

『父上様、母上様。』

私は、もう長くはないでしょう。世を去るにあたって、唯一の心残り、ユナとの間に男子をもうけられなかったことです。これで王家嫡流の血筋が絶えてしまうかもしれないと思うと、お二人にはまこと申し訳なく、胸ふさがれる心地であります。

しかし、実を申さば、全く希望がないというわけではありません。父上はご存じの通り、そして母上も、もしかしたらお聞き及びかしれませぬが、私は十五年ほど前、まだユナと婚姻する以前に、北

方戦線はカノヘにて、村の娘イツチとの間に契りを結びました。この結果、子ができていて、それが男子であったとするなら……

イツチには、形見だと言って私の懐刀を渡し、もし男子が生まれし折には私の名の一部を取って「リク」と名付けよと記した書付を預けてあります。私に万一のことあらば、イツチを捜し出し、男子が生まれていれば、何卒この子を私の後継とお定め下さい。イツチのことも、側室待遇で快く王宮に迎え入れていただきたく……

お二人には、あれこれと思うところもおありかとは存じますが、王家存続と繁栄のため、曲げてお聞き届け下さりますよう、伏してお願い申し上げます。

大陸歴907年冬　カムナギ国王太子ユアンⅡリク記す』

紙には、リクの懐刀の文様と同じ杏と鶯の透かしが入っていた。それに何より、本来なら王太子のような立場の者が知るはずのない母の名がはつきりと記されていたことが、その書状にある「男子」が紛れもなくリク自身であることを物語っていた。

「これは、昨年末、王宮内で大掃除が行われた際に、殿下の使われていた御机の文箱の中より出てきたのです。そこにも書かれてあります通り、殿下と奥様のユナ妃殿下の間には姫君様しかお生まれにならなかったもので、恐らくは、病を得られた際に、お世継ぎのことをご心配されてお書きになられたものの、ご両親様にお渡しになられるには至らなかったものでございましょう」

そう説明して、ドウタクは目頭を押さえた。

「私どもは、狂喜いたしました。これも先ほど——いろいろとぼかしながらではございますが——お話ししました通り、今の国王陛下は王太后陛下とはお血が繋がっておられませんで……なさぬ仲の常にて、どうしてもわだかまりは避けられず、王太后陛下は新国王

の即位式後間もなくお城を出られたのです。ご主人様を亡くされたユナ妃殿下も、そんな王太后陛下を気づかれ、姫様たちとご一緒にこのお屋敷に移られて……

ですが、もしユアンⅡリク様の直系の男子が見つかり、ご遺言通り、今の陛下に代わってその男子が王位を継ぐことになれば、お二人は、晴れて再びお城にお戻りになることができる――そこで、まずはユナ妃殿下が、御自らあなた様のお母様に会いに行かれたのです。ところが、慣れぬ北の地で無理でもされたのでしょうか、しばらくして病にて身罷られたという知らせが……

それで、もはや希望はついたものとはかり思っていたのですが……まさか、このような形であなた様にお会いできるとは！」

これも亡きお父君のお引き合わせでしょうか、と言い添えて、遂によよよと泣き崩れたドウタクを、呆然とリクは見つめた。

（俺が……この俺が、国王に、だって……？）

カイに出会う前だったら、きっと「すっげえ……究極の大出世じゃん！！」と単純に喜んで、さっさと首を縦に振っていたことだろう。けれど……

（あいつみたいに強くて真面目で賢くて立派なヤツだって、ああして何もかも投げ出して旅に出たくなっちゃうぐらい大変な稼業なんだろう？　王様って……）

それを、カイほど腕が立つわけでもなく、賢いわけでもなく、王宮での暮らしも、王族としての立ち居振る舞いも、全く、かけらさえも知らない自分が、ただ血筋が直系だというだけの理由で、ましてやカイを押しつけてまで……

(や! いやいやいや……!!)

母が生きていたら、きっと横っ面のひとつもひっぱたかれて、こう言われるだろう。

『人にはね、「分」ってもんがあるんだよっ!!』

というか、だからこそ、母はリクに父のことを何も知らせずにいたのではないか。庶民の子として育った者がいきなり分不相応な立場になっても、何もいいことなどありはしないから、と……

(つつーか、だいたい、そうならカイはどうなるんだよ!?)

物心ついたときからウナバルで人扱いすらされずに育ち、やっと帰ってきた祖国でも苦労続きで……そんなカイを、また別の場所へ追い出そうというのか。

(まあ、全く行き場がないってわけじゃないんだろうけどな……)

国王という身分がなくなれば、クウとだって堂々と一緒になれるだろうし、ティエンと一緒に暮らす手だってある。が、だからと言って、「追い出された」という記憶まで帳消しになるわけではない。しかも、その後釜に座るのは、事もあるうにリクなのだ。

『俺が出会ったのは、今の「このおまえ」なんだよ。真っ黒で、手のひらにのっかるくらいちんまりしてて、たまあに人に変化しちゃうあ厄介事を起こす、ヘンな竜——とりあえずは、そんでいいじゃねえか』

そう言って、あるがままの自分を受け入れてくれたはずの相手。

初めてできた、掛け値なしの友だとはかり思っていた相手――その相手に、手のひらを返されたように自分の地位も居場所も奪われてしまったら、カイはどれほど傷つくだろう。どれほど哀しい思いをするだろう……

すれ違う思い、暴走する思惑

「無論、事が事でございますので、すぐに諾とおっしゃって下さいとは申しませぬ。ただ、お祖母様のお気持ちと我々お付きの者の思いもどうか御考慮に入れていただいて、何とぞ前向きに……」

そう言い置いてドウタクが去って行ってから、リクはまだ、座っていた長椅子を動けずにいた。

（つつーか、今の物言いからしたら、「嫌だ」つつー選択肢はなしってことじゃねえかよ……）

こんなことなら、ここに来ること自体、何が何でも断るんだった――後悔が心を去来したそのとき、そっと肩に手が置かれた。

「済まぬな、ドウタクが無理を言うて。そのように困らせることになるのなら、招待などするのではなかった……」

「いえ――」

応じかけて、リクは目を瞠った。

その声には、はつきりと覚えがあった。でっぷりとした腹回りに。だが、そこに立っていたのは、あの派手派手な物の怪のような「姫様」ではなかった。落ち着いた藤色の地に、裾の部分だけ銀糸で季節の花々が刺繍された衣。ゆるやかにひとつに結ばれた、ふんわりと癖のかかった銀髪。薄化粧を施した柔和な顔……リクの反応を見ても気分ひとつ害した様子もなく、にっこりと微笑んださまは、まさに「貴婦人」と形容するにふさわしかった。

「あのような面妖な格好、妾^{わらわ}として好きでやっておるのではないのじ

や。ただ、ほかの歴代の王妃と違って、妾は外^とつ国の王家の出ではなく、この王都で生まれ育ったゆえ、存外、市井^{しせい}に知り人も多くての。そういった者と万が一にもすれ違うのを心配したドウタクが、あのような変装を考え出して……気持ちほまことありがたいのじゃが、化粧のしかたと衣や鬘^{かつら}の選び方には、正直もちっと工夫をしてくれたら良いのにも思わぬではないの」

リクの隣に腰を下ろしながら、もう一度くすりと王太后は笑った。それから、ふと表情を引き締め、声を潜めた。

「ドウタクの話じゃがな……断って一向に構わぬのじゃぞ」
「え？」

耳を疑って、リクはまじまじと相手を見直していた。

「で、でも、ドウタクさんは……」
「あれは真面目な忠義者なのじゃが、少々一本気すぎるところがあつての。今回のことも、当人は、妾のためを思っているつもりなのであろうが……」

ふう、と王太后はため息をついた。

「妾は、決して五世殿——そなたらが今『国王陛下』と呼んでおるユアンⅡカイⅡハシム五世殿に追い出されたわけではない。妾の方から、顔を合わせるのを遠慮したのじゃ。なさぬ仲とは厄介なものでな、顔が合えば、余計なことがいつ口からこぼれ出るとも限らぬ現に、恥ずかしながらその昔は、そのせいで五世殿にもその御生母にも随分と酷い仕打ちをしてしもうた。ゆえに、二度と同じ轍を踏まぬよう、あえて離れて暮らし、一切互いに関わらぬ道を選んだのよ。」

しかし、妾がどんなにそう言うても、ドウタクは一向に聞く耳持たず、『たとえそうであったとしても、引き止めるのが当たり前と言うもの。それをしなかったのだから、やはりこれは五世殿の落度である』の一点張りで……それゆえに、そなたが現れたことで、これで五世殿に一矢報いられるとすっかり舞い上がってしまったのであろう。

じゃがの、妾は、何もそなたに、何が何でも五世殿の代わりに王位についてほしいとは願うておらぬのじゃ。五世殿が悪政を行っているというのならばいざ知らず、我が国は現在、内外共に近年稀に見るほど安定しておる。そのようなときに、いきなり上に立つ者が替わっては、かえって世の乱れに通じるといふもの――それに何より、そなたは、今の今まで何も聞かされることなく、平民の子として自由闊達に過ごしてきたのであろう？ そんなそなたをせまい王宮に閉じ込め、望んでもおらぬことをさせるなど……実の祖母なればこそ、孫にそのようなことを強いとうはないのじゃ」

鳶色の瞳が、ひととリクを見つめた。

「しつこうて申し訳ないようじゃが、ほんによう似ておる……今、いくつになる」

「へ？ あ、えっと……数え十八、ですが」

「そうか……そなたの父がそなたのお母御と出会ったのは二十歳はたちのときであつたから、だいたい同じぐらいの年頃じゃな。北方戦線で深手を負い、お母御に助けてもらうたのが縁であつたらしい。実は既に祝言も挙げておつてな、本人としては、そのまま平民となって添い遂げるつもりであつたようじゃ。ゆくゆくは一国の王となる者にそのようなわがままなど許されぬと、無理やり王宮へ連れ戻したのじゃが……どのみち王位も継げぬ運命さだめだったのじゃ、いっそ望み通りにさせてやれば良かったのかもしれぬのう。さすれば、親子三人、今も平穩無事に暮らせていたかもしれなかったものを……」

懷から手巾を取りだし、王太后はそつと目元を拭った。そうか、とリクはようやく得心した。その後悔をずつと胸の内に抱えていたからこそ、このひとは、こんなことを……

「あの……ありがとうございます」

少し考えてから、リクは言った。

「俺、ほんと言うと、父ちゃ——父には捨てられたんだってずうっと思つてて、心ん中じゃ、憎んでさえたんです。こうして王都みやこに出てきたのも、商売を始めて、大成功して、父に目に物見せてやろう、なんて思いがあったからで……

でも、さっきの手紙を見て、王太后様のお話も聞いて、決して父は俺や母を見捨てたわけじゃなかったんだなってわかつて……嬉しかったです、すごく。だから、ほんとなら、父の思いに応えなきゃならないのかもしれないんですけど——」

「わかつておる」

皆まで言わせず、王太后は深く首肯した。

「それに、商売をするというのなかなか良い考えじゃぞ。それこそ、血筋も血筋じゃからの」

「血筋……?」

「妾の父は、もとは両替商だったのよ。それが、先々代の三世陛下に商才を認められて、勘定方を任されることとなった。ところが、平民の立場では国政に携われぬゆえ、特別に貴族に列せられたのじゃ。実際、妾も、幼き頃は、商家の娘として街なかを普通に遊び回って育ったものよ。縁あって先代王に嫁いだ際に、言葉づかいも立ち居振る舞いも、姑であった当時の王太后様にしごかれて徹底的に

矯正されたゆえ、今では妾が平民の血筋であると思う者などほとんどおらぬがな」

「そうだったんですか……」

確かに、あのカイ以上に時代がかった喋り方だとは思っていたが、それは、先々代の王家で使っていた百年近く前の言葉を強制的に仕込まれた結果だったのか……

そう考えると、この王太后も、カイに負けず劣らず苦労が多かったのかもしれない。もしかすると、突然現れた側室とその子であるカイに「酷い仕打ち」とやらをしてしまったのも、それゆえだったのではあるまいか。自分はこんなに大変な思いをして王妃を務めているというのに、横合いから「おいしいところ」だけを搔っ攫って行って、という思いに駆られてしまって……もちろん、だからと言って、それが許されることなのかと問われれば、是非もないわけなのだが。

「とまれ、そなたには王家の血だけでなく、王都随一の大商人の血も流れておるのじゃ。もしそなたがそちらの才を受け継いでおって、自身でもたゆまず努力を重ねれば、曾祖父様ひいじいちゃんの再来になるのも夢ではないかもしれぬぞ」

自分から話を元に戻すと、王太后はつと立ち上がり、部屋の隅に置かれた書き物机に移動した。慣れた様子で紙と筆を用意し、さらさらと何事か書き付け始める。

「あの、それは……」

「紹介状じゃ」

「紹介、状……?」

「親族は、今も城下で商売をやっておる。妾の立場が立場ゆえ、中には寄合の取締役だとか称して幅を利かせている者もあるらしいか

ら、そなたが何を始めるにせよ、必ずや挨拶に行くことになるう。
その折に、多少なりとも助けになればと思うてな——そなたにして
みれば、このような手など借りずとも良いと言いたいところじゃろ
うが、使える物は賢く使うのも商いの極意のひとつぞ」

一瞬だけ「商人の娘」^{あきんど}の顔に戻ってにんまりと口角を上げると、
王太后は、書き上がった紹介状にふう、ふうと息を吹きかけた。完
全に乾いたところで、厚手の紙に包んで封をする。

「さ、これを持って、早々にここを去るが良い。事情が事情ゆえ送
ることもできぬが、くれぐれも気をつけてな」

「ありがとうございます！」

押し戴くようにリクはそれを受け取り……懷にしまおうとしたそ
のとき、手に固いものが触れた。この応接間に来る前に、籠から出
して隠しに戻した父の形見の懷刀であった。

「……あの、これ」

書状と入れ替わりにその懷刀を引っ張り出すと、リクはそれを王
太后に差し出した。

「俺は、もう持つてる必要ないんで」

「持つていて良いのか？ ……妾が」

王太后の両眼に驚きが宿った。ややあって、それはうるうるとし
た光に変わった。まるで我が子ユアン・リク自身であるかのように
ぎゅうっと刀を胸に掻き抱くと、またしても王太后はおんおんと号
泣した。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊

それから間もなく、リクはこっそりと客用寢室に戻った。

もう王太后の前に出ることもないのだから、畏まって王族服を着ている必要もない。荷物の中にあつた洗い替え用の普段着に着替えると、王太后からもらった書状と銭の入った巾着袋だけを懷にしまつて、再び忍び足で廊下に出た。雨合羽だとか、カイの着替えだとかも置いて行くことになつてしまふが、ドウタクに黙つて密かに出て行くことを考え、動きやすさを最優先したのだ。

（ま、たいていのもんは金さえ持つてりやまた買えるんだし、カイのことなら、お城に帰るまでずっと竜のまんま懷に入れといてやつてもいいんだし……）

街へは、多少遠いがほぼ一本道だと王太后から聞いていた。ならば、一晚中歩き続ければ――

「……どこへ行かれるのです、リク様」

ひんやりした声が呼び止めた。げ、と硬直してリクは立ちすくんだ。

「や、ちょ、ちよいと、かわや厠に――」

「そんな巷にでも出る格好をなされて、ですか」

さらに冷ややかに、ドウタクは指摘した。その声音が、一転、低くドスの利いたものになる。

「勝手なことをされては困るのですがね」

どこかで見たような……と思ったら、芝居によく出てくる悪代官の顔つきだった。その顔つきのまま、相手は何気ない様子で手を伸ばし……

「……がはっ！」

みぞおちを突かれたのだ、とわかったのは、腹を抱えてうずくま
ったあとだった。

（何だよ、こいつ……ジジイとは思えねえ攻撃りよ——）

心中での突っ込みが終わらないうちに、今度は首の後ろに手刀が
炸裂する。

「……っっ!!」

声にならない呻きを上げて、リクは床に転がった。すうっと暗く
なって行く景色の彼方で、これでもか、というほど冷酷な薄ら笑
いが閃く。

「あなたには、ぜひとも王位を篡奪^{さんだつ}していただかないと。王太后陛下
のためにも、そして……この私の名誉回復のためにもね」

「なっ……」

こいつ、何を——そう思ったところで、完全に目の前が真っ暗に
なった。

戻れない！

窓から日の光が差し込んで、ティエンの顔と、銀色に戻った髪を照らした。

「ん……もう朝か……」

ぼんやりとした眩きと共に、まぶたの奥から赤い瞳がゆっくりと姿を現し……

「やべっ！！」

叫んで、ティエンは跳ね起きた。昨夜、最後にカムナギの王都に行き、何百里もの距離を飛んで、このヘキギョク王宮へ戻ってきたところで、とうとうドツと疲れに襲われた。そのまま寝台に倒れ込み、「そうだ、寝る前にもう一度あいつらの様子見ないか」と思って……思っただけで、何もせずに爆睡してしまったのだ。

（まあ、一晩だけのことだし、たいしたことは起こっちゃいねえだろうが……）

半ば自分に言い聞かせながら、首にかけた小さな袋を引っ張り出す。銀地に紺の市松模様の入った縮緬の袋で、もともとは亡き母が守り袋として作ってくれた、いわば形見の品であった。今は、そこに爪ほどの大きさの水晶玉をいくつも入れている。そのうちのひとつを取り出し、ふっと息を吹きかけると、たちまち手のひら大に膨らんだ。カイとリクの姿を念じながら、透明な球体に気を送る。こうすることで、本当に見たいものだけを、確実に映し出すことができる――

——はずだった、のだが。

「う、そだろ……!？」

球体の中には、この部屋の景色が透けて見えているだけだったのである。

(まさか、疲れすぎで神通力出なくなっちゃった……!?)

恐る恐る、念ずる対象を変えてみる。すると、今度は、既に起き出して甲斐甲斐しく朝餉の支度をしているクウと、まだ寝台ですやすやと休んでいるカイの婚約者・ユイファの姿が、いずれもはつきりと映し出された。ということは、神通力そのものに問題が起こったわけではないのだ。

(だとしたら……何であの二人は映んねえんだよ!?)

考えられる理由は二つ。水晶玉が映し出せる範囲から出てしまっただか、ティエンの神通力を凌駕するほどの何らかの力を持った者に、どこかへ拉致されてしまったか——だが、千里四方が見渡せるのだ、前者である可能性はまずないだろう。

(とすると、拉致説濃厚ってか? ……っつか、まさかあのクソ親父の仕業じゃねえだろうな)

決してあり得ない話ではなかった。父・竜神王は、カイが血を分けたもうひとりの我が子であることをいまだに知らず、「憎き^{にく}人^{ひと}族のひよっ子王」だという認識しか持っていない。それゆえに、隙あらばカイを亡き者としてカムナギを我が物にしようと狙っているし、

一度など、実際に刃を向けたことさえあったのだ。その折には、カイもまだ相手が実の父親だとは知らず、全力を振り絞って戦ったので、今も竜神王の左の目には、カイの短剣に刺された傷跡がくつきりと残っている。

（ただ……）

あの父のことだ、もし本当にそんなことをやらかしたのであれば、眠っているティエンを叩き起こしてでも、意気揚々とその旨報告してきたはずだ。

（ってことは、幻術が使える別の誰か、か……？）

となると、それはたぶん「反・ハシム五世派」の者なのに違いはない。自分たちの陰謀が万が一にも露見しないよう、特殊な結界を張って、その中に二人を誘い込んだのではないだろうか。もちろん、その目的は、カイの命を奪い、リクを「新王・ハシム六世」に仕立て上げること……

（だとしたら……こうしちゃいらんねえ！）

急いでティエンは窓辺に寄った。まずは、昨日同様、風に姿を変えて、一路カムナギへ向かおうと思ったのだ。

ところが、窓を開け放ち、頭に触れようとしたそのとき、とんとんと扉が叩かれた。

「陛下。お目覚めになられましたでしょうか？ 上（かみつ国）の国王陛下が、朝餉をご一緒にと……」

「……げ」

あまりの間の悪さに、ティエンは露骨に顔をしかめた。けれど、舅殿のお招きとあれば、たとえ体調が悪かったとしても断るわけには行かない——つまりは、「ちよつと腹具合が悪いので厠に……」とか何とかごまかして……という手も使えない、ということだ。

「わかった。すぐ参る」

白竜の代わりに黒髪黒目のユアンⅡカイⅡハシム五世に変化^{へんげ}すると、ティエンは身支度を整え始めた——はるか彼方のカムナギに心を残しつつ。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

だが、本当は、ティエンはもっと竜神王を疑ってかかるべきだったのかもしれない。そうして、水晶玉を通じて相手に問い合わせてみるべきだったのだ——そうすれば、少なくともカイの居場所だけは判明し、一緒にリクを助けに行けたかもしれないのだから。

「……きゅっ!？」

目を開けたとたん、カイは悲鳴を上げて硬直していた。

どうやら、傷の痛みのせいで、いつの間にか気絶していたらしい。そこを、運良く救われたのだろう。よく見ると、傷もきれいに手当てされ、寝心地の良い寝台に寝かせてまでもらっている。

……のは、良いのだが。

（何故、その「救いの神」が、よりによって……）

豪華絢爛な細工の施された天井にまで届きそうな巨大な体。

立派な顎鬚がたくわえられた、青銅色の角張った顔。

たてがみ 鬣の如く長い黒髪の間に生えた、緑青色の二本の角。

恐らく前の対決でカイにつけられた傷跡を隠すためなのだろう、真っ黒な眼帯に覆われた左の目――

どう見てもそれは、「竜人体」とでもいうべき姿となった竜神王の姿にほかならなかった。天空にあると伝えられし竜の国の帝王であり、カイの本当の父でもある男……

一方、カイはといえば、いくら半分は竜の血が流れているとはいえ、今現在の立場は紛れもなく「人族の王」であり、竜神王にとつては「敵国の将」でもあった。おまけに、相手は、よもやカイが半人半竜で、かつ我が子でもあるなどとは夢にも思っていない。どころか、「生意気にも自分に真っ向から立ち向かい、左目を傷つけました不届き者め……！」と、新たな憎悪まで燃やしているかもしれないのだ。

（そんな、いわく因縁ありすぎな私を、どうして――）

そう思いかけて、カイは、自分がまだちんまりとした竜体のままであつたことに気がついた。

（ということは、彼は私をただの竜の子どもだと思って……？）

その推測を裏付けるかのように、竜神王は、見えている方の目を、まるで孫に対する老爺の如く優しく細めてみせた。

「おお、目が覚めたか。傷が膿んで、三日三晩生死の境をさまよっておったのだぞ。どうだ、気分は？ 何ぞ欲しいものはあるか……？」

青くゴツゴツとした手が伸び、カイの鬣をたてがみわしゃわしゃと撫でる

「……きゆるっ!？」

カイは、再び悲鳴を上げていた。万が一、その手が角に触れてしまったら、自分は……!!

……ところが。

「どうした？ そのように怖がらずとも良いのだぞ」

慈愛に満ちた語りかけとともに、なおもわしゃわしゃと鬣を撫で続ける手は、確かにカイの二本の灰色の角に触れていた。

……はずなのに。

カイの体は、相変わらず、ちんまりした仔竜のままだった。

「何故だ……」

思わずカイは眩きを漏らし……次の瞬間、愕然とした。その言葉が相手に通じてしまった——からではない。その逆だった。カイの発した——発した「つもりだった」言葉は、文字通り「きゆるん……」という「音声」にしかならなかったのだ。慌てて言葉を継ごうとするも、

「きゅっ！ きゆるきゆるきゆるっ……！？」
「おおそうか、腹でも減ったのかな。どれ、何か滋養のつくものでも作らせよう」

やはり、見事なまでに通じていない。恐らく相手の耳には、カイの声は、赤子が発する意味を持たぬ喃語（なんご赤ちゃん言葉）のようにしか聞こえていないのだろう。

（何ということだ……）

呆然と、カイは心でひとりごちた。

（私は……私は、いったいどうなってしまったのだ……！？）

我が名は「きゅるるん」！？

結局、竜神王の庇護のもと、カイはこの場——天空城にとどまることとなった。人に戻ることもかなわず、事情を説明する言葉すら奪われてしまった状態では、それ以外に選択肢がなかったのだ。

「ここは息子の部屋なのだが、今は誰も使ってはおらぬゆえ、自由にしていよいよ、きゅるるん」

今一度カイの頭を撫でると、竜神王は微笑んだ。

（そうか、この部屋はティエンの……）

思わずしみじみとカイは室内を眺め……ふと眉をひそめた。

（今、最後に何やら妙な言葉が聞こえなかったか……？）

確か、「きゅるるん」とか……

（まさかとは思うが、それは……）

嫌な予感と共に相手の顔を窺うと、至極あっけらかんとした反応が返ってきた。

「何だ『きゅるるん』、変な顔をして」

「きゅるーっ!？」

完璧にカイは目を剥いた。

『嘘、じゃろ……!?!? そげなごつい外見なりしといて、「きゆるるん」……? あり得んがなほんま!』

驚愕と動揺のあまり、ウナバル言葉が口をついて出てしまう——もつとも、幸か不幸か、それはやはり「きゆるきゆる、きゅつきゅつ」といった音声にしかならなかったのだが。

「ん? どうしたきゆるるん。……そうか、もしやこの呼び方が不満なのか?」

ようやくカイの心中を悟ったのか、竜神王が、カッカッカッと哄笑した。

「だが、しかたがあるまい? 『きゆるるん、きゆるるん』ばかり言うて、名がわからんのだから。かと言うて、そちにも親からもらった名があるのだから、こちらで名付けをするわけにも行かんだろう?」

「きゅ……」

言われてみれば、確かにその通りではあるのだが……

そんなカイの困惑をよそに、竜神王はさっさと家臣を呼びつけ、自分の食事とカイの分らしい粥の支度をさせた。

「おお、良い具合に煮えておるぞ。しかし、まだ少々熱いようだな。どれ、ふう……ふう……ふう……うむ、こんなものだろう。ほれきゆるるん、『あーん』せい」

「……きゅっ!?!?」

ぴきん、と音でも立ちそうな勢いで、カイは固まっていた。

『な……な……何しよんぞ貴様！？』

通じないと知りつつ、再びウナバル言葉で叫んでしまう。相手が何をしたいのか、全くわからなかったのだ。何故、自ら粥を冷まして差し出したりなどする？ まさか、毒でも仕込んであるのではあるまいな……！？

「……何だ何だ」

粥をのせた匙を持ったまま、竜神王は苦笑した。

「だから、そのように怖がらずとも……儂を親だと思って、存分に甘えて構わんのだぞ」

オ、ヤ……？

とたん、フツと体から力が抜けた。

（そう、か……親とは、こういうことを子にするものなのか……）

そういえば、遠い記憶の中で、ウナバルの王太子が乳母にそのようなことをしてもらっていたのを見たような気がする。

……そう、「してもらっていたのを見た」だけ。

すべての者の目が自分に注がれていなければ気が済まなかったのだろう、王太子は、乳母をはじめ、周囲の者たちがカイに少しでも関わろうとすると、烈火の如く激怒した。だから、カイは常にほったらかしにされていた。食事のときには、無造作に目の前に乳や菜の入った器が置かれて、それでおしまい。飲むのも食べるのも、すべて見よう見真似でひとりで覚えた。

それが、こんな年齢としにもなって、このような形で、しかも、こんなにも慈愛に満ちたまなざしと共に、食事を与えてもらえる機会に恵まれるとは……無論、これとて所詮はかりそめの関係。何かの加減でこちらの正体がわかれれば、あっけなく霧散してしまうたぐいのものではあろうが……

「きゅ……」

こみ上げた何かと共に、ごくりと飲み下した粥は、どこか塩辛い味がした。

「おお、済まぬ済まぬ。わしが不用意なことを言うてしもうたから、かえって親が恋しうなったか」

いささかの外れな言と同時に、ひょいと体が持ち上げられ、相手のたなこころの掌に包みこまれた。

「よしよし、もう泣くでない」

わしゃわしゃと頭を撫でた太い指がまた角に当たったが、依然としてカイは仔竜の姿のままだった。が、今は、それがありがたかった。むしろ、夢なら醒めないでくれとすら思った。

「……おや、眠うなってきたか」

おとなしくなったカイを見て、竜神王はまた何か誤解をしたようだった。

「良い良い。寝つくまでちゃんと抱っこしておるゆえ、何も心配は要らぬぞ」

ダッコ……？ 怪訝に首をかしげたとき、体が相手の胸元に押しつけられ、ぎゅっと抱きしめられた。

（なるほど、親が子をこのように抱擁することを「ダッコ」と称するのか……）

そんなことも知らないほど、その手の経験とは縁遠かったカイであつた。

（しかし、何やら不思議な気分だな……）

抱擁されたという経験自体は、ないこともない。各国要人との挨拶にはこの行為がつきものだし、ティエンにも、落ち込んだときなどに、何度か肩を抱いて慰めてもらったことがあつた。

が、今覚えている感触は、そのどちらとも微妙に違う。あたたかくて、心地良くて……強いて言えば、懷の中に通ずるものがあるだろうか。ただ、懷がふんわりと包み込むような心地良さなのに対し、こちらは、がっしりと支えられているという安心感に根ざした心地良さ、というのか……

「思い出すのう……ティエンのやつも、かつてはこのようであつたわ」

問わず語りの弦きが降ってきて、あ、とようやく思い当たる。

すると、これが。

これが、親の——父親の……

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

次に気づいたときには、室内に日が燦々と差し込んでいた。心地良すぎて、いつしか本当に眠ってしまっていたのだ。

執務にでも出かけたのか、竜神王の姿はなかった。それを幸いに、カイは布団を深くかぶって自分で角を叩いてみた。けれど、相変わらず微塵の変化も起こらなかった。

（本当に、どういことなのだろう……）

天意というものがあるのならば、何のために、自分にはこのような試練が……

体の痛みはほとんど引いていた。カイは恐る恐る翼を動かし、飛べると認識できたので、室内をあちこち見て回った。

ティエンが暮らしていたときそのままの状態であるのか、衣装をしまつてある戸棚には、彼のものと思われる王族服が、きれいに洗濯された状態で掛けられていた。背の方に翼と尾を出す穴が開いているところがいかにも竜族の着物といった趣だが、仕様自体は詰め襟の上衣と細身の長袴の組み合わせで、大きさも含めて、カイが普段着用しているそれとさして変わらない。もし人に戻っても、これを借りれば何とかしのげるだろう。

続いて目に留まったのは、壁一面にしつらえられた本棚だった。

（何なのだ、この蔵書の多さは……！）

しかも、帝王学はもちろんのこと、政治学、経済学から、民俗学や、カムナギを含む、竜族にとっては外^とつ国にあたる国の本まで、

実に多岐にわたっている。

うんうん唸りながら、適当に何冊かを引っ張り出して見たのだが、どれにも確かに読んだ形跡があった。紙の端の部分が折ってあったり、重要な部分に線が引かれてあったり、時には細かい書き込みがあったり……すると、これらは決して「書棚の飾り」などではなく、すべてティエンに読まれたものなのだろうか。

（こんなにも勉強熱心だったのか、ティエンは……）

全く知らなかった——カイの前では、そんな素振りなど全く見せたことがなかったから。

カイとは違って竜の姿と人の姿を自由に使い分け、幻術も使いこなせるティエンは、日頃から、王宮と巷ちまたを気ままに行き来していた。そして、そんな彼を、カイはいつも羨ましいと思っていた。あのような政治手腕を発揮できるのも、そうやって市井しせいを好きなだけ見て回れるからなのだとばかり……

（しかし、それだけではなかったのだ……）

それ以前に、こうして勉学を積み、王族としての基礎固めをしたからこそ……

（それに引きかえ、私は……）

ウナバルにあったときは、確かに書物は読んでいたが、あくまでも、家庭教師が持ち込んできて「お読み下さい」と言われたものだけにすぎなかった。

人質ゆえのはばかりがあって、書庫になど入れないゆえ……自分ではずっとそう思っていたのだけれど、もしかするとそれは、ただ

の言い訳だったのかもしれない。どうせ捨て駒として死に行くか、仮に生き延びられたとしても養父であるウナバル王の命に従うだけの「人形」にしかねない運命ならば、必要以上の勉強などしても無駄だ。それよりも、目に見えて「強さ」が実感でき、時には稽古という形を借りて、あの意地悪な王太子に一矢報いることさえできる武術の鍛錬に精出した方がずっと良い——心のどこかで、そう考えてはいなかったか。

一方、故国に戻ってからは、いきなりついた王位に慣れるのが精一杯で、読書どころではなかった。……と、これも思い込んでいたのだが、その思い込み自体、実は間違っていたのではないか。

時間は与えられるものではなく、作るものだと言ったことがある。勉強する時間とて、作ろうと思えばいくらでも作り出せたのではないのか？ 例えば、これでもか、というほど毒見を重ねて、延々とした時間をかけて運ばれてくる食事をいささか苛立った思いで待っている間であるとか、視察に出かける際に乗る輿こしの中で、「いくら暗殺の危険を避けるためとはいえ、少しは窓を開けて外を眺めたって良いではないか」などと不満たらたらに考えている間であるとか……

「……何と、言葉も喋れぬのに本を読むのか、きゆるるんは！」

感じ入ったような声に我に返ったときには、既に窓の外は夕焼けになっていた。どうやら、読書に没頭する余り、時間を忘れてしまっていたものらしい。

「明日からは、読みたい本があったら、執務が始まる前に儂わしに言いなさい。棚から取ってから出かけるゆえ」

相好を崩したまま続けると、竜神王はカイを手のひらにのせ、く

しゃくしゃと鬣^{たてがみ}を撫でた。

「しかし、よりによって政の本^{まつりごと}を選ぶとは……人を捨ててもなお、王としての矜持までは捨てておらんだか」
「きゅ、る……!?!」

はじかれたように、カイは相手を見直していた。

（この男、今、何と……!?!）

戻れぬ理由

「……これ！　これ待たんかユアン||カイ!!」

「きゅるっ、キイイイーツ!!」

構わず甲高い警戒音を発すると、カイは相手に向かって頭から突っ込んで行った。

「キイツ、キイツ、キイイイーツ!!」

悔しい！

悔しい!!

悔しい……!!!!

最初からこの男は、こちらの正体を見抜いていたのだ。現に今、ぼろりと「ユアン||カイ」と口走ったのが動かぬ証拠。この分なら人に戻れずにいることも、とうにお見通しなのだろう。見通したうえで、「きゅるるん」などと小馬鹿にした名などつけ、心中ではさんざん嘲笑っていたのに違いない。

（それなのに、私ときたら、ほんの一瞬とはいえ、こんな輩に「父親のぬくもり」など感じて……）

あまつさえ、気を許して眠り込んだりまでして……!!

二本の角が熱を持ち、雷の力が溜まってきたのがわかる。

「キイイイイ……ツツツ!!」

さらに一声叫ぶと、カイは一気にその力を放出し……バーン！という衝撃と共に、唐突に意識を手放した。

自分の発した雷に自らまで打たれてしまったのだと気づいたのは、再び意識を取り戻したときのことだった。

「……まったく」

竜神王の苦笑する顔が見えた。

「存外、考えなしに突っ走るところがあるのだな……まあ、何しろ儂^{わし}の子なのだから、しかたがないといえましょうが」
「きゅっ……!？」

「意識が戻らなかった三日三晩の間、何度かそなたは人に戻っていたのだよ。竜であり、人でもある——おまけに、色を除けば十年前のティエンと瓜二つだ。認めぬわけには行くまい？」

驚愕したカイに向かって、相手はあっさり種を明かした。それから、つと立ち上がり、手ずから茶を淹れ始めた。自分とカイの二人分ということなのだろう、円卓の上に大きな湯呑みと小さな猪口を出して茶を注ぎ、ひょいとカイをつまみ上げて、猪口の前にちょこなんと座らせる。そして、カイの目を覗き込み、再び苦笑した。

「何故、今の今までそのことを言わなんだか、と言いたげだな。いや、儂^{わし}とて迷いはしたのだぞ。だが、そなたを『そなたと認めて』しまえば、立場上、そなたをここに留^{とど}め置くわけには行かぬ——国王自ら『敵国』の王に必要な以上の情けをかけたとあっては、臣民に対して示しがつかぬからな。それに……ふと思うたのよ。もしかして、そなた自身も『そなたではなくなることを望んでいるのではないか、とな』

怪訝に、カイは首をかしげた。私では、なくなること……？

「人の姿になったとき、そなたはしきりと呟いておった。『自分が死ねばよかった。あねさまの代わりに逝けば良かった』と……そう、『このままティエンに王位を継いでもらった方が、国のためにもなるのではないか』とも言っておったか」

記憶をたぐるまなざしになって、竜神王は続けた。

「何があったのかは知らぬが、そなたは『人族の王・ユアンⅡカイⅡハシム』であることに耐え難くなっていたのではないか？ そして、いつしか『人であること』自体をやめたくなってしまった——意識が戻ったとたんに竜から人へ戻れなくなったのも、もしかするとそのせいかもしれぬな。ほれ、ティエンが十年の間、そなたに竜の姿ばかりしか見せておらなかったのを覚えておろう？ ちょうど、あれと同じように……」

その表情が、ふとほろ苦く歪む。

「まあ、あやつも一度は自害しようとしたゆえ、そう思うだけなのかもしれぬが」

カイの瞳が見開かれた——彼自身も、その場には居合わせていたからだ。

記憶を失っていたティエンがすべてを思い出したのは、例の竜神王とカイの対決のさなかであった。最初、竜神王は、自ら手を下すのではなく、神通力を使ってティエンの心を操り、彼にカイを倒させようとした。皮肉にも、そのとき加えられた刺激が記憶を取り戻

すきっかけとなったのである。

そして、竜神王の言う通り、カイに出会ってからその瞬間までの十年の間、ティエンは、九割方の時間を竜の姿で過ごしていた。カイの影武者を務めたり、街へ遊びに行ったり……といった目的で人に変化^{へんげ}することはあったが、それは、あくまでも「第三者に変化している」だけ——「ティエン自身」の姿を見せたことは、一度たりともなかったのだ。カイにとっては、それは「ごく当たり前」のことであったし、「以前のことは覚えていなかったのだから」「白髪灼眼のままでは目立ちすぎると思ったのだろう」という頭もあったので、さして気にも留めていなかったのだが……

言われてみれば、ティエンも抱えていたのだった——「心の闇」を。

地上界にあった頃、竜神王は、幻術を用いて角や尾や翼を隠し、カムナギ王宮に程近い森で森番をして暮らしていた。妻・ナナリの父親がもともと森番だったので、その仕事を引き継いだのである。それに、森ならば、うっかり幻術が解けてしまったとしても、そうそう誰かに見つかることもない。

二人の間にティエンが生まれたのは、結婚後七年が過ぎた頃だった。懐妊の兆候が表れたとき、夫婦はもちろん大喜びしたが、生まれてきたティエンを見て、一転、言葉を失った。

サラハン大陸の人々は、天空界に住む者たちを単に「竜」と称しているが、厳密に言えば、そうではない。彼らもまた、もとはといえば「人」であり、カムナギとウナバルの国境に位置する山間^{やまあい}の里に、小さいながらも一国を構えて暮らしていたのだ。

ただ、彼らは、生まれながらに変化^{へんげ}や幻術や飛行といった特殊能力を持った種族であり、寿命も百年単位と桁違いに長かった。このため、他国の「持たざる人々」から恐れられ、徒党を組んで攻撃さ

れた挙句、故郷を追われてしまったのである。

四方を敵に囲まれ、逃げる場所は空の上しかなかった。が、そこで彼らを待ち受けていたのは、地上に比べてはるかに過酷な環境だった。いわゆる「竜」の特徴を持つようになったのは、この環境下でも生きていけるよう、体が適応した結果だったのだ。

それゆえに、彼らは「竜（族）」と称し称されながら、実際には、竜の姿よりも、今の竜神王の如き「角と尾と翼を持った人」の姿をしていることの方が多かった。そして、高速で移動する必要や地上と行き来をする必要ができると、竜体に変じて空を飛ぶのである。

ところが、ティエンは、そんな竜族の赤ん坊とも、さりとて人族の赤ん坊とも違っていた。形としては人に近いのだが、髪の毛一本に至るまで全身真っ白で、額と背中と尾てい骨の、ちょうど角と翼と尾にあたる部分に妙に目立つ瘤ができている異形の体。人族の間でも竜族の間でも滅多に見ることのない真っ赤な瞳。額の瘤に触れてみると、竜体に変わることは変わるのだけれど、大人の親指ほどの大きさしかない。その後だんだんに、角が生え、尾が伸び、翼が生じ、竜体の方も、親指大から手のひら大になり、犬猫の大きさを経て、やがては六尺余りにまで成長することになるのだが、その時点では、そのようなことなど予測できるはずもなかった。

『この子は、人の間でも竜の間でも生きては行けまい。私たちが守ってやらねば……』

そう誓い合った夫婦は、以前にも増して、自分たち一家の存在を必死に隠し続けるようになった。だから、ティエンが友だちを欲しがる年頃となり、たまに森に遊びにやってくる子どもたちを見て「一緒に遊びたい」とせがむようになって、頑としてそれを認めなかった。

だが、幼いティエンには、その親心がわからなかった。それで、

短絡的に思ってしまったのだ――この森を焼いて、その隙にここから逃げ出そう。そうすれば、自分もあの子たちと同じように「自由」になれるのに違いない、と。そして、八つになったある日、とうとうそれを実行に移してしまった。風の向きや強さも災いして火は瞬く間に燃え広がり、森の大半を焼き尽くした。

この火事の責任を取る形で、竜神王は捕縛された。と言っても、彼の親友でもあった先代王ユアンⅡナスルⅡハシム四世は、彼の普段の熱心な働きぶりをよく知っていたので、せいぜい数日ほど拘留するだけで済ませるつもりでいた。また、よもやティエンが火付けの犯人だったなどとは思いもしなかったため、「父親が不在では何かと心細かろう」と、ティエンを母親のナナリともども王宮へ呼び、面倒をみることにした。

しかし、この気づかいが裏目に出た。王宮に入る際、ティエンの姿を人目に晒しては、と、ナナリは彼を仔竜の姿に変えて懐に入れていた。このため、周囲の人間には、ハシム四世がナナリだけを迎え入れたようにしか見えなかった。結果、「国王が妾を作った」というまことしやかな噂が立ってしまったのだ。

やがて、その噂は、王宮の地下牢につながれていた竜神王と、同じ王宮の最上階で暮らしていたハシム四世妃、双方の耳にも入った。激怒した竜神王は脱獄し、ナナリを離縁して、ティエンを連れて天界へ戻ってしまった。一方、ハシム四世のもとに残されたナナリは、嫉妬に駆られた王妃にあの手この手の嫌がらせをされて心身共にぼろぼろになり、カイを産んでももなく世を去ったのであった。

『悪いのはすべて私なのです。私があんな短慮をしなかったら、父上も母上も、きっと今でもここ人界にあって仲睦まじく……』

心を操られた際、姿の方も竜人・白竜皇子はくりゅうのみこに変えられていたティエンは、白皙の面おもてに苦悶を浮かべてそう呟いた。そして、ためらい

ひとつ見せずに短刀を手にし、自害する素振り^{そぶり}を見せたのである。とっさにカイがその頭をひっぱたいて竜体にしてやらなかったら、確実にそのまま命を絶ってしまっていたことだろう。

「あれは……本当は十年前からずっと、あやつが心の奥底で願っていたことだったのかもしれん」

ほろ苦い表情を崩さぬまま、竜神王は湯呑みを取り上げ、茶をすすった。

「あのようなことをしてしまったせめてもの罪滅ぼしに、必死に儂を説得し、ユアンたちと和解させようとしていた。だが、とうとう叶わなかった——それで、絶望してしまっただろう。しかし、たとえ半竜であつても、並みの地上人^{びと}に比べたらはるかに丈夫な体だ、天界から落ちたぐらいでは死にはしなかった。だから、代わりに過去の自分を自分で消してしまっただ。その結果、記憶が消え、ただの竜になってしまっていたのだらうな。

なればこそ、儂は、正体不明の竜の迷い仔として、そなたを扱うことにしたのよ。あのときのティエンと同じように、今のそなたもこれまでの己の一切合財を捨てたがっておるのではないかという気がしてならなかったのだな」

そうしておるうちに、そなたが再び人に戻る気力を取り戻さば、仇敵^{くひ}の首級^{くび}を取るまたとない機会を得ることもできようし、と不敵に笑って付け加える。しかし、それはあくまでも建前であつたろう。何故なら、その双眸には、いまだ「父の慈愛」が確かに宿っていたから……

竜神王の提案

「ともあれ、そなたのその反応からすると、ティエンとは違って、記憶まで失っているわけではなさそうだな」

どうやら、それを確かめるために、竜神王はあえて鎌をかけるようなことを言ったらしかった。

「だとするなら、あとはそなたの心の持ちよう次第なのだろう——まあ、実家に静養にでも来たと思うて、焦らず時を待つことだ」

こくり、とカイもうなずいて、ようやく程良く冷めた茶をすすった。

かくて、それからカイは、「迷い竜・きゆるるん」という立場のまま、天空城で暮らし続けた。

政のことまつりごとも、挨拶ひとつせず^{まつりごと}に別れた形になってしまったリクのこと、気にならないと言ったら嘘になる。けれど、この姿のまま王宮に戻ったとしても、誰も国王ユアンⅡカイⅡハシム五世だとは思えない。それどころか、「よりによって国王陛下のお住まいに『災いのもと』が現れるとは！」とか何とか言われて、家臣・使用人総出で追い出されるのが関の山だ。

一方、リクと行動を共にする道を選んだとしても、相手に迷惑をかけることにしかなるまい。このようなことになってしまった以上、リクを王宮に連れて行って、次期国王として推挙することは不可能だ。ならば、リクは、本人が予定していた通り、商売を始めることになるだろう。それなのに、「災いのもと」がいつまでも傍にいては、商いにも大いに差し障ってしまうに違いない。

朝になると、竜神王がやってきて、約束通り、カイが鼻先でつついて「読みたい」という意思を示した本を出して行ってくれる。

昼間は、もっぱらその本を読んで過ごした。その中には、王位についたばかりの頃、宰相ハクロウに無理やり読まされたものも混じっていた。ある程度国王としての経験を積んだ状態で読み直してみると、以前は単なる文字列でしかなかった記述が、驚くほどすんなりと、頭に――というより、心に落ちて行くのがわかった。「ああ、あの案件はこの法をふまえて処理すれば良かったのか」とか、「あの陳情は、このような見地からも受理してしかるべきものだったのだ」とか……今さらそのように得心できたところで、果たしてこれを活用できる日は来るのだろうか、と時に暗澹たる思いに駆られることもあったが、できるだけすぐに打ち消すように努めた。竜神王の言う通り、人に戻れぬ理由が自分自身の心持ちにあるならば、そういうった負の感情も持たないに越したことはない。

宵の口になると、竜神王が再び顔を見せる。執務はもちろん、夕餉^{うげ}も終えているらしく、その懐からは必ず小皿一杯分ほどの食べ物が出てきた。これが、その日のカイの夕食と、翌日の朝・昼の食事となるのだ。一見すると、「これだけ?」という印象なのだが、ちんまりした体のせいか、はたまた一日中室内にいてあまり動かぬせいか、あまり空腹感を覚えるということがなく、この分量だけでも十分、時には余ってしまうほどだった。

「ちゃんと食わねば、治るものも治らぬぞ」

皿に食べ物が残っているのを見るたびに、毎度毎度心配げに諭していた竜神王も、やがてその可能性に思い至ったらしい。

「そなた、体がなまっておるのだろう」

カイの傷が完全にふさがると、そう言って彼を懷に入れ、湯浴みに連れて行くようになった。

さすが竜族の王が使うだけあって、国王専用の浴場は、彼が竜体となってもなおゆったりと入れるほど広く作られていた。その、さながら大池の如き浴槽に、体を洗い終えたカイを放り込むのである。

最初は何事かと驚いたが、そこはカイも西国の育ち、泳ぎなら心得たものだ。というか、いつ、あの意地悪な王太子に、それこそ湯の中やら庭の池やらに沈められるかわかったものではなかったから、心得ておかざるを得なかった、というのが本当のところだったのだ……

何にせよ、広々とした湯の中で泳ぎ回るのは、思っていた以上に心地良かった。最初からカイを泳がせることを想定して沸かさせていたのか、湯自体もそれほど熱くはなく、前にリクと入ったときのように湯当たりを起すこともなかった。少しくたびれてくると、動きを止め、腹を上にしてぷっかりと浮いてみる。揺れる湯に身をゆだねていると、心にしまい込まれていたすべての憂い事が、すうっと湯に溶けて消えて行くような気がした。

そうして三月みつき近くが過ぎたある日、いつものように湯の中を泳ぎ回ってから、ぷかりと水面に浮かんでいると、竜神王が、感じ入ったように言った。

「いや、見事なものだな。古来、竜は川や水をつかさどると言われているが、まさに水の化身とも言うべき泳ぎぶりよ」

ひょいとカイの体をすくい上げ、耳元に口を寄せて、こそつと囁く。

「ここだけの話だが、ティエンは全くの金づちでな」

「きゆるっ!?!」

意表を突かれて、カイは相手を見直していた。「あの」ティエンにも、苦手とするものがあつたのか……

「ほお、そんなにも意外であつたか」

そんなカイを鼻先まで近づけて、竜神王はにんまりと牙を見せた。

「まあ、あやつは弱みを見せることを良しとせんからな。

ただでさえ地上人^{ひと}との混血、しかも、そのせいだったのか、体の成長も同年輩の者と比べてかなり遅くて……『父方の血筋が直系だというだけで次期国王になるとは生意気だ』『貴様など皇太子でなければただのクズだ』などと、特に王位継承権に近い親せき筋の者らに、やっかみ半分に言われては、随分といじめられてな。そんな連中を見返してやろうと必死に勉強に励み、武術や幻術の鍛錬にも精出し……そうして、連中にぐうの音も言わさぬ力を自力で手に入れたのよ。

あやつがそなたの目に『万能』のように映るのも、いわばその結果。内実は、案外、そなたに侮られぬよう、懸命にあれこれと取り繕うておるのかもしれないぞ——実は水練が苦手だったのだということ、ひた隠しにしていたのと同じようにな」

どうだ、少しは肩から力が抜けたか、と、からから笑う。

「はい、おかげさまで」

素直にカイはうなずいた。実際、「少し」どころか、かなり気が楽になっていた。ティエンもまた、自分と似たような過去を持っていたのだ。そして、血のにじむような努力を重ね、そこから這い上

がって来た——決して「すすいと要領良く」ではなく。

（そんな努力なら、愚直さだけが取り柄の私にもできるやもしれぬ）
諦めずにそれを積み重ねて行けば、あるいは……

「そうか、それは良かった」

竜神王は、満足げにもう一度笑った。それから、彼らは同時に顔を見合わせた。言葉が……通じた!?

「そなた、ちよいと角を触ってみい」

いささか急いた口調で言うと、竜神王はカイを再び湯に浮かべた。

「ここなら、人に戻ったとて何も不都合はあるまい」

「い……いかに……」

何しろ風呂の中である。いきなり全裸の人になったとて、何ら違和感はない。しかも、竜神王は全くお付きの者を伴わずに入浴していたから、誰かに見咎められる心配もなかった。

「で……では、御免」

ちょこんと頭を下げると、その姿勢のまま、カイは両方の角に手を触れた——

……が。

ぽんっ、という音ひとつ、風呂場には響かなかった。

「……ううむ」

ややあって、竜神王が唸った。

「何かはまだ足りんということなのだろうな」

「御意……」

ため息をついて、カイも脱力した。たちまちぶくぶく、と沈みそうになり、慌ててぱちゃぱちゃと体勢を立て直す。

竜神王が風呂から上がって着替え終わるまで、彼らは互いに無言でいた。手拭いで体を拭いつつ、カイは、さらに何度か角に触れてみたが、結果は同じであった。

「どれ、戻るか」

きゅ、と寝間着の帯を締めると、竜神王は、カイをひよいと懷に放り込んだ。

「明日から、執務にも連れて行ってやる」

「え……?」

またまた虚を衝かれて、カイは頓狂な声を上げていた。まるで世間話でもしているかのように相手は言っているが、これは明らかにゆゆしきことだ。

「良いのですか? いくら今は迷い竜となってしまうているとはいえ、いつ『敵国の王』に戻らぬとも知れぬ私に、貴国の政の内情を――」

「戻らねば良いだけの話だろう」

「は……!?!」

「まったく、どこまでもクソ真面目なやつよの、そなたは。普通ならば、むしろ敵国の内情を探れる千載一遇の好機と喜ぶだろうものを、そのように、いの一番にわしに気を遣うて……」

衣の上からカイを撫でて、竜神王は苦笑した。

「だが、そのような好男子だからこそ、再び敵に回すには惜しい。そこで、考えを変えてみたのよ——思えば、中つ国は既に『ティエンの国』のようなもの。ならば、そなたには、今後もずっとここへ留まってもらい、正式に儂^{わし}の第二子としてまわりにも紹介して、『この国の』王位を継いでもらったらどうか、とな。

さすれば、人族の征服という我らの大義も果たせるばかりか、この国の王家も安泰。そなたにしても、無理に人に戻らなくとも良い——いざとなったら、『人の片鱗すら持たぬ、生粋の竜』という触れ込みにすれば良いだけの話だからな。むしろ、その方が民心とてつかみやすかろう。どうだ、双方にとって良いことづくめではないか?」

「なっ……!?!」

愕然と、カイは相手を凝視していた。

迫られし選択

記憶が甦ってからも天空城には戻らず、地上に骨を埋める決心をしたティエンに、竜神王は「人族と馴れ合った罪により、竜族から永久追放する」と申し渡していた。もつとも、それは立場上そう言うしかなかったというだけのことで、本音では、そんな形で息子の罪——いろいろな意味で——をこっそり赦してくれたのだらうと、カイも、それにティエン本人も思っているのだが……

「あれ以来、皇太子の座は空位になっておってな」

戸口へ向かったのしと歩きながら、竜神王は言葉を継いだ。

「皇太子がするべき公務は、代行という形で弟にやってもらっておるのだが、あやつにはあいにく子がなくて、その先を引き継ぐ者がおらんのだ。さりとて、ティエンをさんざん侮辱したような者どもの誰かに、待ってましたとばかりにその椅子に座られるのもシヤクで……」

親馬鹿だと笑われるかもしれんが、と竜神王は肩をすくめたが、カイは笑わなかった。

自分が彼だとしても、同じように考えただろう。後継者に誰を選ぶかによって、国の命運は大きく変わるからだ。親馬鹿ならずとも、信頼できぬ者になど引き継いでもらいたいはずはない。カイ自身にはあとを継がせるべき子はないが、例えば、半年もの間、のほほんとして「巷での修業の旅」などにうつつをぬかし、今もこうして天空城で人に戻る時を待ち続けていられるのも、影武者に立てたのがティエンだったからこそであって――

「……あの」

不意に嫌なことに思い当たって、恐る恐るカイは確かめた。

『「このままティエンに王位を継いでもらった方が、国のためにもなるのではないか」とも言っておったか』

『思えば、中つ国は既に「ティエンの国」のようなもの』

ティエンに代理を務めてもらっていることは、カイの意識の中では既に当然のこととなってしまっていたので、うっかり聞き流していたのだが……

「ここに来た頃に私が口走っていた、その、うわ言、と言いましうか……それは、その、どの程度……というか、貴殿は、どこまで……というか……」

いくら高熱に浮かされ、朦朧としていたとは言え、自らの口から、今玉座に座っているのがティエンであると暴露してしまっていたのだとしたら。また、それ以外の国家機密に関しても、万が一、べらべらと喋り倒してしまっていたとしたなら……仮に人に戻れたとしても、王位に返り咲くどころか、その場で腹搔っ切って全国民に詫びねばなるまい。

だが、すっかり血の気の引いてしまったカイの頭の上から降ってきたのは、あのからからとした哄笑だった。

「心配せずとも良い。先だって言った以上のことは何も聞いてはおらんよ。まあ、だからと言って、全く何も知らぬというわけでもないのだがな。ただ、それを知ったのは、そなたの口からではない。自分の水晶玉を見ておったからよ」

「水晶、玉……？」

言われて、カイも思い出した。ティエンも、小さな水晶玉を持っていた。それを持った者には千里四方が見渡せ、その千里の先からでも、対となる水晶玉を持った者に自らの声と姿を伝えることができるという、摩訶不思議な「竜の水晶玉」――

「地上の動向に目を配るのも国王の大事な務めなのでな、折に触れてあちこちの国の様子を水晶玉に映しておるのよ。特に、各国の王が何らかの動きを見せるときにはな。」

その姿を見れば、自ずと知れる――ほかの者には全くの同一人物にしか映るまいが、少なくとも生まれてから成人になるまでの間ずっと、父親としてティエンに接してきた儂の目はごまかせんよ。

して、今回の『取り替えばや』はどちらの意思なのだ？ たまには玉座に座ってみたいというティエンの遊び心か……いいや、玉座に座っておることに疲れたそなたを、あやつが兄として見かねた、というのが正解かな」

「恐れ、入りましたでございます……」

ちんまりした体を、カイはますます小さく縮めた。

少々長話になりすぎたのだろうか、外から、湯当たりを心配する声がかかった。

「大丈夫だ、今出る」

大声で答えると、竜神王は衣服の上からぽんぽん、とカイの背を叩いた。

「先に儂の部屋に寄るぞ。今話した水晶玉を見せてやる――ティエ

ンのものなどとは比べ物にならんほど大きくて、よく見える代物をな」

「水晶玉を……？」

驚いて、カイは相手を見上げた。確かに、興味はある。竜族の王者が持つ水晶玉とは、いかなるものなのか……

「しかし、それは、もしや門外不出の秘匿品では――」

「どのみち、そなたに引き継ぐものだ。今から見ておいても構うまい？」

「は、はあ……」

……参ったな。

心中で、カイはため息をついた。どうやらこちらの意思とは関係なく、竜神王の頭の中では、既にカイが後継者であると決定してしまっているようだ。

人に戻れるという確たる証がない今、それを否と突っぱねられる理由は、実のところ全くなかった。だいたい、どこにしよう、自分分は所詮「代わり」なのだ。人界にあっては、先代王及び王太子の代わり。それが、「ティエンの代わり」になった――ある意味、それだけのことではないか。それに、今度はいきなり国王になるのではなく、まず日嗣ひつぎみの皇子みこから始めるのだ。経験を積む時間も、人脈を築くゆとりも、十二分にある。無論、特に後者については、決して容易な道ではないだろう。何しろ、敵たる人族の血が半分入っているのだから。しかし、それなら今までとて同じようなものだった。ウナバルにあってはカムナギの、カムナギにあってはウナバルの間者呼ばわりされ、陰口を叩かれて……それが、今度は「人族の」に変わるだけの話だ。

にもかかわらず、強烈な違和感が心をとらえて離さなかった。自分分は、ここにはいけない——あたかも警鐘の如く、そんな思いが明滅して……

『いやあ、あの若さで王位を継がれて、最初はどうなることかと思っていたが……』

『まったく、あの男が国王になってから、どうもやりにくくて困る。誰か、あいつに「中つ国の流儀」ってやつを教えてやってほしいもんだね』

『やれやれ、三日も待たされて、やっと謁見の順番が回ってきたよ。前の陛下のときには、こんなことなかったのにねえ。あれかい？ 言葉がよくわからなくて、はいもいいえも決めかねてるのかね。それとも、実はおつむそのものがトロいとか……？』

『何であんなのが王位についてたりなんかしたのかねえ……それともあれかい、もしかして、前の陛下や王太子様が立て続けに亡くなられたのって、あの男が——』

『しいつ、滅多なことを言うもんじゃないよ!!』

自らが思うほど、「いなければならぬ存在」ではないというのに。

『おのれユアンⅡカイⅡハシム……!!』

……むしろ

『あなたさえいなければ……あなたにここで死んでもらえれば、すべてがうまく行くのです……!!』

むしろ……

突然、ふわりと体がつかまれ、懷から出された。大きな左手の上

にカイをのせると、竜神王は、反対の手でそつと彼の目元を拭った。

「めっ……面目次第もっ……」

恐縮して、カイは思わずくるん、と丸まった。自分でも気づかぬうちに、涙してしまっていたらしい。

「何、恥じ入ることなどない」

竜神王は、しかし、鷹揚に微笑んだ。

「子どもは泣くのが仕事、思う存分泣かせてやるのは親の仕事——それを怠ると、ろくなことになる。現に、儂ら夫婦は、それを怠ったがために、ティエンを火付けに走らせるほど追い詰めてしまった。まあ、そなたはもう子どもという年齢としではないが、見ていると、どうも子どもらしい子ども時代を送ってきていないようだからな。そして、それもまた、明らかに儂の責任だ——儂さえ短気を起こさねば、そなたは最初から儂の子として生まれ、実の両親に思う存分甘え、兄と遊んだり、ときには喧嘩したりなどしながら、『ごく普通に』成長できたはずだったのだから……」

大きな両手が、カイをふんわりと包み込んだ。意識を取り戻したあの日と同じように、ぎゅっと胸元に抱き寄せられる。

「よう聞け、ユアンIIカイ。そなたはな、決して『いなくとも良い存在』などではないぞ。記憶を失っている間、ティエンは、そなたにあたたく受け入れられ、友として遇してもらっておったことに、どれほど救われておったか……さもなくば、記憶が戻りしのちもそなたと共にある道を選ぶはずはない。ましてや、自らの利になるわけでもないのに、わざわざそなたの代わりを務めておるはずなどな

かろう？ 儂とて、このような形で再会できたおかげで、長年ユアンⅡナスルとナナリに抱いておったわだかまりが解け、ようやくと『まっとうな心』を取り戻すことができたのだ。それに……」

しかし、そこで竜神王は言葉を切った。

「……この続きは、部屋に行ってからの方が良いな。何と言っても、自らの目で確かめるのが一番であろうよ」

水晶に映りしもの

もう一度竜神王の懐に入って、相手の執務室へ向かった。やがて、人払いを命ずる声と共に、ギギィ……と古びた音を立てて扉が開く。

「もう出ても良いぞ」

言われてカイは、ぴよこんと懐から顔を出し……息を吞んで目を瞠った。

「これは……」

サラハン大陸全土、それにその周囲を取り囲む海までもがそこにあった――正確には、部屋の半分を占めようかというほど大きな大きな水晶玉の中に。

夜のことで、全体的に薄暗くはあるのだが、ヘキギョクとカムナギの王都は、恐らく繁華街の明かりゆえであろう、かなりはつきりと見て取れる。西の方のウナバルに至っては、^{かた}どうやらまだ日暮れの時刻であるらしく、街も村も海も美しい夕焼けに彩られていた。

「この玉はな、普段はこうして広域を俯瞰して映し出しておる。普通の水晶玉が映せるのは、よく言われておる通りだいたい千里四方だが、この玉に限っては、時間と天候に恵まれれば、海の向こうの、そなたらにとっては未知の島々まで見ることもできるぞ」

誇らしげに竜神王は胸を張った。

「そして……このような使い方もできる」

両手の指をいくつかの形に組み合わせて印を結ぶ。再びカイは息を呑んだ。映っていた大陸の一部が、どんどん拡大され始めたのだ。

「こうして見たいものを念ずるとな、そこに焦点が合うようになっておるのだ」

そう説明を受けているうちにも、見たことのある建物がぐんぐんと近づいてくる。住み慣れた——と、ようやく思えるようになってきた——カムナギ王宮であった。

王宮にはいくつか庭園があるのだが、宮殿の二階の屋根の上にも小体^{こてい}な庭が作られていた。建物正面から見ると裏側にあたるそこは、最上階にある国王とその家族の居室から直接出られるようになっていて、いわば、彼らの専用庭と言っても良かった。

その「裏庭」に、松明の灯に照らされて、二つの人影が浮かび上がっていた。既に執務を終えたのだろう、王冠を脱ぎ、くつろいだ部屋着姿になっているカイそっくりの男と、その腕に抱かれて散策を楽しんでいる幼い少女——カイの許婚、ヘキギョク王の一の姫のユイファであった。

透き通るような白さの肌に艶やかな黒髪、愛らしく整った顔立ち。弱冠五歳にして古今東西の書物のほとんどを諳んじてしまったという聡明さ。まわりの者は、一様に「まさに三國一のお嫁様ですね」と口を揃える——「あと十五年も経てば」という暗黙の条件付きではあったが。

このような場合、普通は婚約のみ整えて、婚儀は姫が年頃になってからあらためて執り行うものなのだが、ユイファは婚約の時点でカムナギにやって来て、そのままこちらに留まった。これは彼女の実家であるヘキギョク側の希望で、実のところ国力はあちらの方が若干勝ってもいたので、「そうですか」と受け入れるしかなかった

のだが、ひょんなことからその理由が判明した。

ユイファは、盲目だったのである。しかも、見えない目を補うべく、まわりの風景や人の気持ちを心で感じ取るという人外の力まで備わっていた。ユイファ本人の話では、それゆえに、故国では二親にすら「気味が悪い」と遠巻きにされ、たまに口をきいてくれたかと思えば、

『目が見えないことと、奇妙な力を持っていることは、誰にも言うてはならぬ』

……つまり、ヘキギョク側としては、政略結婚にかこつけて、ていの良い厄介払いをした、といったところだったのだろう。

そんな彼女の境遇は、カイのたどってきたそれと、どこか通ずるものがあつた。だから、カイは――

「まだ陛下はお戻りにならないのね、ティエン」

ユイファの澄んだ声が、カイを現実に戻した。

「いやあ、姫さんの『心眼』にはかなわねえな」

あはは、と笑って、ティエンは腕に抱いたユイファを揺すり上げた。客人を通すこともあるほかの庭とは違って、裏庭には国王一家以外の者の立ち入りは禁じられ、警備の者も、建物の窓越しに目を配っているだけだ。それゆえに、ユイファは遠慮なく「本物のカイ」の居所を尋ね、ティエンも誰憚ることなく「国王陛下の仮面」を外したのだろう。

「結構気合い入れて、あいつっぱい『気』をまもって見たんだが、

やっぱバレバレか」

「だって、ティエンの『気』には邪念が多すぎるんだもの、すぐわかるわ」

ませた口ぶりで返して、ユイファはふふふ、と笑った。

「真面目な陛下の真似ばかりしていて、息が詰まっているのでしょう？ わたくしは構わないから、たまには街で遊んで来たらいいのに」

「……おいおい、あんたほんとにまだ七つ（数え年）の祝いもまだなのかよ」

ティエンの目が丸くなった。

「こりゃ、カイのヤツと十五近く離れてて逆に幸いだったかもしれないな。下手に年齢が近かったら、間違いない尻に敷——」

「何ですって？」

「い、いえ、何でもないっす……」

……確かに、一理あるかもしれない。

「……しっ、しっかしアレだな、ほんとうがねえよなカイのヤツも」

旗色が悪くなったティエンは、どうやらカイを悪者にする事で難を逃れるつもりらしい。

「あれほど『半年経ったら戻れ』って念押ししたのによ。いったいどこをほつつき歩いてんだか……」

すると、ユイファの表情が、スツと変わった。否、厳密には、「なくなった」——思わずカイは竜神王の懷を飛び出し、玉を覗き込んでいた。覚えがあったのだ。それは……その顔つきは、かつてのカイのそれそのものだったから。どのみち、望んでもかなえられるわけなどない——そう自分に言い聞かせ、何もかもを諦めてしまった末の無表情……

「大丈夫。さみしくはないわ」

むしろ自分自身に言い聞かせるように呟くと、ユイファはいつも持ち歩いている熊のぬいぐるみを、ぎゅ、と抱きしめた。

「いつも、カイと——この子とお話ししているから、さみしくはないの」

ゴン、と水晶玉に頭がぶつかったのにも構わず、カイは身を乗り出していた。ティエンは、決してユイファに「さみしいのか」と聞いたわけではない。にもかかわらず、自然にそのような言葉が出てきた——それは、本当はさみしくてたまらないのだ、と暴露しているのと同じことではないか。

それに、カイが旅に出る前まで、あの熊には名などついていなかった。

『わたくしの大事なくまちゃん』

確かユイファは、そう呼んでいたはずだ。だが、今は「カイ」と——自分と同じ名をつけて……

(ひょっとして、ユイファはあの熊を私に見立てて、さみしさを紛

らわしていたのだろうか)

それほどまでに、私を……私の帰りを……

ズキリと胸の奥が痛んだ次の瞬間、さらに、とどめの一撃が飛んできた。

「それに、陛下は約束して下さったもの――わたくしを守って下さるって」

だから、少しぐらい遅くなっても、きつとここへ帰ってきて下さるわ。そう付け加えて花が咲いたように笑ったユイファを、呆然とカイは見つめた。

(そう、だった……)

目のことをカイに知られたとき、ユイファは、

『わたくしは……実家^{さと}に帰されてしまうのでしょうか』

と不安もあらわに尋ねてきた。「帰されてしまう」――「帰れる」ではなく。彼女にとって、故国へ戻ることは、決して喜ばしいことではなかったのだ。自分を化け物呼ばわりし、心中ひそかに恐れ蔑む人々と再びまみえねばならない。ましてや、一度破談となった娘を再びもらってくれるような国はそうそうないだろうから、恐らく、そのまま宮中に幽閉されるか、あるいは病死と見せかけて……

だから、カイはきっぱりと請け合った。

『大丈夫だ。このことは誰にも漏らさぬ。たとえ誰かが知ったとし

ても、何も心配はない。この手で、必ずそなたのことは守ってやるから――だから、もうそんな顔はするな。安心して、ここに居って良いのだぞ』

そうだ。

そうなのだ。

あれは、決して「安請け合い」などではなかった。あのとき、カイは心底から思っていたのだ。彼女を守れるのは自分しかない、と。似たような境遇を持った自分だからこそ、誰よりも共感してやれる。同じ孤独を知っている自分だからこそ、誰よりもその孤独を理解し、癒してやれる、と……

どんなに政に精通せいしゅうしたティエンにも、「本当の王家の血筋」を継いだリクにも、これだけは、決してできはしない。なのに……それなのに、何故自分はこんなところで蹴躓こついているのだ。ユイファの孤独を埋めてやるどころか、あんな哀しい顔までさせておいて、さも自分ひとりが居場所を失った不幸者であるかのように嘆き悲しみ、挙句にこのようになっていたらくにまでなって……!!

「……竜神王、殿」

水晶玉の上で、カイは両の拳を握りしめた。

「申し訳ありません。私は……私はやはり、ここに留まるわけには行きません。帰ってやらねば……たとえどんな姿であったとしても、たとえ再び王位につけなかったとしても、帰って彼女に深く詫び、あの約定を果たすことだけは……!!」

答えは返ってこなかった。代わりに、ふあさり、と背中に何かが

掛けられた。ティエンの上衣であった。

「まったく……こういうときには幻術で衣服のひとつも出せるようにせんと、目のやり場に困るだろう」

その上衣をさらにしっかりとカイに着せかけ、あちこちを整えながら、竜神王は嘆息した。

「本当なら、その稽古もつけてやりたいところだが……それでは、あの姫君をますます待たせることになってしまいうからな。ま、ティエンにでもきちんと教わっておくことだ」

「え……？」

カイは目をぱちくりさせ……あらためて自分を顧みて、さらに仰天した。ちんまりとしていたはずの両腕が、元に戻っていたのだ。否、腕だけではない。浅黒い胸板も、武術の鍛錬の成果で八つに割れた腹筋も、上衣からはみ出す形ですらりと伸びた両脚も……

「ほれ、ちゃんと鏡でも確かめてみい」

顎をしゃくって、竜神王は、水晶玉の反対側に設えられた姿見を示した。

「そのようなものを見てしまったては、正直、ますます手放し難いのだがな」

「は……？」

怪訝にカイは問い返し……姿見を振り返って、またまた驚愕した。

父との別れ

「行きなさい。そなたの言う通り、そなたの居るべき場所は、ここではない」

姿見に映った竜神王が、深くうなずいて言い切った。

「その姿なら、自力で地上にも戻れよう」

……そう。カイは、厳密には、人に戻ったというわけでもなかったのだ。姿見には、二十年間見慣れた人としての自分の顔が映っていた。けれど、その額の生え際あたりには、以前はなかった灰色の角が二本、によきつと突き出ている。上衣の裾からは、黒くて長い尾がしゅっと伸び、背中に開いた穴からは、大きな黒光りする翼が一对、これも伸びやかに広がっていた。

「あ、あの……」

「なあに、ティエンだとして、それと人の姿とを使い分けておろう？ その稽古も、あやつにつけてもらえば良いだけのことよ」

戸惑いを隠しきれないカイを、竜神王はあっさりと笑い飛ばした。

「それとも何か、ついさっき、『どんな姿になっても良いから戻る』と言うたのは嘘だったか。ならば、やはりここに残って儂^{わし}のあとを継ぐか？ 今のそなたならば、もはや誰ひとりとして異論など――」
「いいえ、それだけはっ！」

ぶんぶん、とカイはかぶりを振った。ええいままよ、とばかりに、先ほど竜神王がやっていたのを真似て指を組み、人の姿をした自分

を必死に頭に浮かべてみる。とたん、ぽんっ、という音と共に、角と尾と翼が消え失せた。

「……ほお。やればできるではないか」

竜神王が、にんまりと牙を見せた。

「やはり、気の持ちようの問題であったな。戻りたい、あの姫君を守ってやりたいという気持ちだが、迷いを凌駕し、新たな力をそなたに与えたのであろうよ」

「御意にございます」

素直に、カイは首肯した。

「それに……父上にも、自信を与えていただきましたゆえ」

一瞬、沈黙が流れた。

「そなた……今、儂を父と呼んだのか？」

ややあって、竜神王が確かめるように問いかけた。

「こんな儂を……一度は、そなたに刃さえ向けた――」

「三月みつきの間に、二十年分の御心を掛けていただいたのです。これで父上とお呼びせねば、天罰が当たりましょう」

相手の自責にかぶせるように言葉を継ぐと、カイは微笑んだ。それから、あらためて相手に向き直り、深々と頭を下げた。

「いろいろとお世話になりました。それに、本当に申し訳ありませ

んでした。せっかくあれこれご心配いただいたというのに――」

「ああ、あれはただの試みよ」

「試み、でございますか……？」

「左様。ああでも言えば、さすがのそなたも尻に火がついて人に戻る気になるかと思うてな、試してみただけのこと」

ふん、と竜神王は肩をそびやかした。

「だいたい、儂はまだ後継者が必要なほどの年齢としではないわ。あと五百年は現役でおるつもりゆえ、万一気が変わったとしても、しばらくは譲ってなどやらんぞ」

小さくカイはふきだした――そんなことを言いつつ、一向にこちらを見ようとせず、あまつさえ、しきりと目をしばしばさせてまでいるのがよくわかったから。

空を飛ぶためにあらためて竜人の姿となり、衣服も上下とも整える。竜神王に導かれて天空城の門まで出てみると、空はほとんど雲ひとつなく晴れ渡っていた。月明かりと、例の裏庭をはじめ城内各所に焚かれた松明のおかげで、帰るべき王宮の場所も十分に視認できる。

そんな下界の様子と門柱の上の風見鶏の両方に目をやって、竜神王が断じた。

「うむ、この天候と風の強さなら容易に下界したまで降りられよう。あとは風向きがうまく変われば、瞬時のうちにあちらに帰れるはずだ。では……」

続けかけた声が、ぐっと詰まる。ゴホン、と咳払いして、竜神王

は顔をそむけた。

「何と……ここからも、上中下三国^{かみなかしも}が一望できるとは！」

あえて気づかぬふりをして、カイは話柄を変えた。

「水晶玉を通しての眺めも素晴らしいものでしたが、こうして直接眺めるのも、また格別ですね」

すると、思いがけず、はずんだ声が返ってきた。

「そうであろう？ 幼き頃、初めてこのさまを見たとき、実に美しいと思うた。ずっと、ただ飽かず眺めていたいと……眺めるだけで十分だ、とな。それゆえに、『大義』を振りかざしてこの世界を攻めんとする父親の心が理解できなんだ。一度は地上に下ったのも、そのためよ。自分自身の不徳でユアン・ナスルに私怨を抱いていた間だけは、そんなことなどすっかり忘れておったが……」

再びこちらを振り返った黒い眼^{まなこ}が、まっすぐにカイを射る。

「繰り返しになるが、すべてそなたのおかげぞ。そなたと再会し、それをきっかけとして、過去のわだかまりが完全に消えたからこそ、また昔のような心を取り戻すことができた——まこと、感謝しておるぞ。」

案ずるな、儂の目の黒いうちは、決して軍部に勝手な真似などさせん。その代わり、儂の命数が尽きようとしたときには……今度こそ、ティエンと共にここに帰り、儂のこの意思を継いでくれぬか。竜族の寿命は長いゆえ、その頃には、そなたらも、地上人^{びと}の間にとどまっていたは何かと不都合にもなってくるであろうしな。

そなたは生真面目で、まっすぐな心を持った努力家だ。そして、

ティエンは柔軟な思考を持ち、人心掌握の技にも長けておる——それらを両輪として、ぜひ竜族と人族との架け橋となってほしい。この通りだ」

驚きのあまり、とっさに返事が出てこなかった。あの誇り高き竜王が、自分のような小童相手に、地につくほど頭を下げている……

「どうか……どうか面をお上げ下さい、父上」
おもて

その手を取って、カイは言った。

「父上のお気持ち、しかと承りました。その約定、必ずや果たしに参ります」

「まことか!？」

「はい。二言はございません」

それどころか、願ってもない話だとさえ思っていた。五百年……は誇張であるにしても、この分なら、「そのとき」が来るのは、あと五十年は先だろう。その頃には、カイも人としては老齢の域に達しているはずで、周囲からは「いい加減に引退して下さい」などとそれとなくほめかされすらしているのではないか。ユイファとて既に孫のひとりや二人いるような年齢で、「守ってやる」必要など塵ほどもなくなっているのに違いない。

その機をとらえて、政の舞台からこっそり姿を消し、天上界へと上って、今度は竜神王の——父の意思を継いで、人と竜との架け橋となる。老後の過ごし方としては、まさに理想的だと言えよう。それに、何より「ティエンと共に」と言ってもらったのが嬉しかった。やはり父は、心の底ではとくにティエンを赦していたのだ。そして、その行く末をこっそり心配してもいた——カイに対してそうだったように。

風見鶏が、風の流れがカムナギ王都の方向に変わったことを告げた。

「さ……」

言葉少なに促すと、父は、またしてもくると後ろを向いた。カイは、それを咎めなかった。例によって、こみ上げてくるものをこらえているのだろうと察しがついたから。

「では……父上も、お達者で」

今一度頭を下げると、カイはバサリと翼を広げ、地面を蹴って風に乗った。このように大々的に空を飛ぶのは初めてだったが、風の流れをうまく見計らったおかげか、妙な方向に飛ばされることもなく、ぐんぐんと見慣れた王宮が近づいてくる。

（ユイファ、ティエン……今帰るぞ！）

それに、リクにも謝らねば——黙って急に消えてしまったことと、それゆえに、きつと相当な心配をかけてしまったであろうことを。

（ティエンとユイファに挨拶を済ませたら、さっそくリクの行方を追ってみよう）

この前会ったときの様子を考えると、ティエンはあまり良い顔はしないだろうが……

（そうだ、先ほど父上の水晶玉を拝見させていただいたときに、リクがどこで何をしているのかも確認しておくのだった……）

ちらりと後悔が心をよぎる。だが、たとえそうしたとしても、恐らくは無駄であつたろう——いみじくもティエンが推測した通り、竜の王者の神通力をもつてさえも見通せないような場所に、リクは幽閉されていたのだから。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

何者の力も及ばぬよう、幾重にも張られた結界——

その内側に作られた小部屋に、リクは横たわっていた。この三月の間、ずっとそうして寝かされていたのだ。腕には太い注射針が刺さり、眠り薬と栄養補給の薬が流され続けていた。

口から食べ物を摂っていないせいか、頬はこけ、唇は真っ青を通り越して紫にすらなっている。その顔が、不意に悪夢でも見ているかのように歪んだ。

「ち、が……カイは、そん、な……うあああつ!!」

引き裂かれるような叫びと共に、背中が弓なりにのけぞった。まるで雷にでも当たったかの如く、びくん、びくんと体が痙攣する。

「まったく、見かけ以上にしぶといやつよ」

ぐったりとなつたリクを見下ろして、ぶつぶつと文句を言ったのはドウタクであつた。この三月の間、みつぎ彼は何度となく、催眠状態にしたリクの心に侵入し、術をかけ続けてきた。無論、リクを思うままに操り、一日も早く、王位を篡奪させるためである。ところが、

毎度毎度この調子で、術自体を拒絶されてしまうのだ。「罰」として、そのたびに苦痛を与えるようにもしてみたのだが、結果は同じであった。

「しかたない。もっと強い『術』を施してみるか」

続けてそう呟くと、竜神王のそれによく似た印を結び、念をこめる。とたん、再びリクの口から絶叫が上がった。絶叫は、今度は間断なく半刻ほど^{とき}続き……それが止んだとき、ようやく茶色い瞳がゆっくりと開いた。

「我は、リクⅡナスルⅡハシム六世――」

唇から、うつろな声が漏れる。

「現国王ユアンⅡカイⅡハシム五世は、祖父ユアンⅡナスルⅡハシム四世と、父ユアンⅡリク王太子を毒殺し、母ユナ妃を斬殺せし仇敵なり。我の最大にして崇高なる使命は、これを打倒し、必ずやカムナギ王家を『正統なる血筋』に戻すこと……」

国王、帰還す。

夜風がすうっと吹き過ぎて、ユイファが小さくくしゃみをした。

「もう入った方が良さげだな」

彼女を揺すり上げて、ティエンは言った。

「ごめんな、ほんとには散歩なんつーのは昼間にするもんなんだろうけど……」

「わかっています。昼間はお仕事があるのですもの、しかたがないわ」

にっこり笑って、ユイファは答えた。

「それに……お仕事の合間には、陛下のことも捜しているのでしょう？ 本当はとくに王都へ戻みやこってきてらっしゃるはずなのに、全然お城に戻ってらっしゃらないから……そうそう、そう言えば、リク様ってどなた？ その方のことも、一緒に捜しているのよね？」

「あー……」

片目をつぶって、ティエンは首の後ろを掻いた。まさに「おっしゃる通り」だった。下手をすれば王室転覆とカイ自身の生命の危機を呼びかねないだけに、やはりどうしても放置してはおけず、自分なりに、竜の能力やら独自の情報網やらを駆使して、二人のことを捜し回っていたのだ——残念ながら、全く成果は出ていなかったのだが。

「ほんと、姫さんが相手じゃ、何の隠し事もできねえな」

「いいのよ、わたくしを心配させたくなくて黙っていたのでしょ？」

これまた鮮やかに看破して、ユイファはもう一度につこりした。

「でも、たぶん、陛下のことはもう捜さなくても大丈夫だわ」

「へ？」

ティエンは怪訝に聞き返し……次の瞬間、ぶったまげた。

「でええ〜っつ！？」

雨雲ひとつかかっていないというのに、夜空を貫いて雷が落ちてきたのだ。

「危ねえっ！！」

とっさに伏せて、ユイファをかばう。

（あんなの食らったら、ひとたまりも……ね、え……！？）

ところが、予想に反して、物音ひとつ起こらなかった。雷——だと思われた光は、むしろ、ゆっくり、ゆっくりとこちらに下りてきて……ばさり、と羽音を立てて目の前に降り立った「それ」を、穴のあくほどティエンは見つめた。

「おまえ……カイ、だよな？」

その証拠に、顔はカイ本人のものにはかならない。が、頭には角が、背中には翼が生えていて、立派な尾までついている。これは、まさか……

「まさか、仮装大会にでも出てたとか」

「……貴様にだけは言われたくないわ!」

思いつ切り、カイは仏頂面になった。

「自分とて、『素』の姿は早い話がこれの色違いではないか。だいたい、久方ぶりの再会なのだぞ? もっと気の利いた言いようはないのか」

「ねえな」

にべもなくティエンは片付けたが、無論、それは方便だった。本当は、うまく言葉が出てこなかったのだ。「何やってたんだ今まで!」とか、「心配したんだぞ!」とか、「どんなわけで、いきなり竜人化なんかしちまったんだよ!」とか、心の中では、あれもこれもと渦を巻いているのだけれど、いざ口に出そうとすると、その手前で引っかかってしまう、というか、胸が一杯になってしまう、というか……

「どうされましたか、陛下!? 何やら妙な光も見えたようですが……」

建物の方から、警備兵の声がかかった。

「あ、いや……何でもない!」

とっさに応じたのはカイだった。そのまま目を閉じ、指を組んで何事か念ずる。ほお、とティエンが感嘆した。カイの体から、角と翼と尾が瞬時のうちに掻き消えたのである。しかも、身に着けている物まで、ティエンが纏まとっているのと全く同じ部屋着になっていた。

「随分な『進化』っぷりじゃねえかよ」

「まあな。これも父上のおかげだ」

ごく自然な動作でユイファをティエンから抱き取りながら、カイは言った。

「ふうん……」

何となく相槌を打ちかけて、ティエンは眉をひそめた。

「ちょっと待て。おまえ、今『父上』つつた!？」

黄泉の国に行って先代王ハシム四世に会っていた、とても言うなら話は別だが、そうでないとするならば、それは、つまり……

「おまえ、親父んとこにいたのか？ 何でまた……つつーか、聞いてねえし!！」

がっくりと肩を落としたのは、いつの間にやら隣で「許婚たちの喜びの再会の図」が大々的に展開されていたからであった。

「お帰りなさいませ、陛下!」

「ただいま、ユイファ。長いこと留守をして、本当に申し訳なかったな」

「いえ、ユイファは、陛下がご無事でお戻りになられただけで十分でございます! しかも、あんなご立派なお姿にまでなられて……ええ、わたくしも、心眼でちゃんんと『見られ』ましたのよ? もう元に戻られてしまったなんて、本当に残念だわ。翼とか尻尾とか、ぜひとも触れてみたかったんですのに……」

「何と、あの姿をそのように……嬉しいぞ、ユイファ。まったく、どこぞの阿呆とは大違いだ。とはいえ、ここでは人目について騒ぎにもなりかねない。あとで、いくらでも見せてやろうぞ」

「まあ嬉しい！ では、わたくしのお部屋で……あ、でも女官たちに見られるのもまずいのですよね？ そうしたら、わたくし、夜中にこっそり陛下の御寝所に忍んで――陛下？ どうされたのですか陛下？ お鼻から血が」

「い、いや、これは、その……も、問題ない」

「……なあにが『問題ない』だよ」

幻術で姿を消しつつ、ティエンはぼそりと突っ込んだ。

（十七ならともかく、七つ前のガキに「夜中に御寝所に忍んで」と言われたぐらいで鼻血なんか出しゃがって……）

しかも、さりげなく「どこぞの阿呆」と形容されたような気がしたのは空耳だろうか。

（まったく、そうやって姫さんに鼻血拭いてもらってるその顔こそ、よっぱど阿呆^{アホ}っ面^{ツラ}じゃねえかよ……！）

だが、そんなティエンの内心をよそに、二人はすっかり彼らだけの世界に入ってしまったていた。

「……まあ、全然止まらないわ！ どうしましょう、このままずっと血が出続けて、陛下がお亡くなりになってしまわれたら……！！」「何を申すかユイファ、この程度で私は死んだりはせん。だいたい、そなたを置いて死ぬるわけなどなからうが。ずっと守ってやると約束したのだからな」

「陛下……！！」

「ユイファ……！！」

(……あーあーあーあーもう！)

盛大にため息をついて、ティエンは天を仰いだ。

（勝手にやってろ馬鹿夫婦っ！！）

[illegible]

「……しかし、まさかあの親父がおまえの命を助けるたあな」

カイの部屋に戻って一通り話を聞くと、ティエンはあらためて目を丸くした。

「ああ。要するに、良くも悪くも情の濃い方なのだろうな。それゆえ、先代王陛下と母上の一件では烈火の如くお怒りにもなったのだろうが……その点、今回は、私がちんまりした仔竜の姿をしていたせいもあつたのだろう、まるで孫を溺愛する祖父様じじのようであつたぞ」

その溺愛ぶりを思い出したのか、カイは小さく苦笑を漏らした。彼の腕には、相変わらずユイフアが抱かれている。今までよほど気を張っていたのだろうか、城内に入ろうと歩き出してすぐにユイフアは寝入ってしまったのだ。いくら声をかけても揺すっても起きない。うえに、無理に引き離そうとするとかえってぎゅうっとしがみついてしまうので、結局ここまで一緒に連れてきたのであった。

「どうやら、執務室の水晶玉にて、息も絶え絶えになっている私の様子をご覧になったらしい。そして、すぐさま駆けつけて下さったのだ。てっきり、あれは女性にょしょうとの連絡つなぎに使うものだとかばかり思っていたのだが、違ったのだな」

「嫌味かい！」

たちまち、ティエンは渋い顔になった。

「俺だってあれだ、声かけた女の子たちが困ってねえかな、とか、さみしい思いしてねえかな、とか、随時あれで確認してだなあ——」

「それはそうと、リクのその後の行方のことなのだが」

「無視かよ！」

ますますティエンは渋い顔になった。その顔のまま、鉄瓶に入っていた茶を湯呑みに注ぎ、ずずず、とすすする。

「つつーか、俺は、おまえら二人、一緒にいるもんだとばかり思ってたんだ。で、あの坊主を利用しようとしてる連中に、二人まとめて拉致られたんじゃないかって……だけど、水晶玉には一向にそれっぽいもんなんか映んねえし、聞き込みしてもなしのつぶてでさ。ただ……」

「ただ？」

「あ、やっぱ教えねえ。そうだな……さっきの嫌味の件と、それから、この三月みつき、さんざんひとに心配かけた件について、土下座して詫び入れるんだったら話してやってもいいかな」

「はあ？ 何やそれ」

今度はカイが、ウナバル訛り丸出しで顔をしかめた。しばしの間、彼は何事か考えるように視線を巡らしていたが、やがて、おもむろに立ち上がった。

「ならええわ。オレはオレで、聞くあてがないわけやないし……ユイファを部屋に送ったついでに、そっちにも回ってくるけん、おまえは、そんな茶あでも飲んで待っとけ」

「……へ？　ちよ、おいっ……！？」

さっさと出て行こうとする弟を、慌ててティエンは追いかけた。

V S. 宰相!

「……なあ」

その部屋——宰相ハクロウの執務室の扉の前で、ティエンが不安げに囁いた。二人して同じ外見で歩いているのは当然大騒ぎになるので、今は警備兵のひとりに身をやつしている。

「ほんとに、やつに聞いてみるつもりなのかよ？　つつーか、あのこうるさいオッサン相手にすんだったら、ちゃんと正装してきた方が良かったんじゃない？　髪だって、そんな伸びっぱなしじゃ……」

ティエンの指摘した通り、カイは、相変わらず、さっき幻術で出した部屋着姿のままだった。髪も、旅から戻ってきたままの長さのものを後ろで軽くまとめただけだ。つい数刻前までティエンが国王の執務室で家臣たち皆に見せていた、短髪で王族服をきっちり着込んだ「国王陛下」とはあまりにも落差がありすぎる。

「『これが』良いのだ」

カイは、しかし顔色ひとつ変えずに言い切った。

「それより、ここから先もついて来るつもりなのならば、頼みがある」

「頼み……?」

おうむ返しにティエンは尋ね……その「頼み」を聞いて、さらに面食らった。

仕事熱心な宰相は、幸いまだ下城してはいなかった。畏まって国王を迎えた彼は、その姿を見て啞然とし、さらに続いて入ってきた「自分がさっきまで見ていた国王陛下」の姿を見て、引きつけを起こしたように立ちすくんだ。

「な、何故陛下がお二人……！？　　というか、貴様……貴様は、あのときの――」

「そう、そなたが旅先で会った男だ」

蓬髪の男の方が、あとを引き取った。

「そして、そなたは決して『見間違えた』わけではなかったのだ――私こそが、本物のユアンⅡカイⅡハシムなのだからな」

完全に言葉を失ったハクロウに、これまでの経緯をざっと説明する。

視察だけでは見えてこない国の内情をどうしても自分の目で確かめてみたくて、こっそりと旅に出たこと。

とはいえ、玉座が空になるようなことはあってはならないので、母が王宮に上がる前に産んだ子で、自分にそっくりな顔をした兄のティエンに影武者を務めてもらっていたこと。

そろそろ帰途につこうとしていたところで偶然ハクロウと鉢合わせ、騒ぎを起こしたくなくてとっさに逃げてしまったのだということ……

「謀^{たはか}るような真似をして、本当に申し訳なかった」

そう話を結ぶと、カイは深々と頭を下げた。答えは、すぐには返ってこなかった。ハクロウは一度大きいため息をつき、それから、

今聞いたことを頭の中で整理するかのように、目を閉じて、とんとん、と指で額を叩いた。

「信じ難い……と申し上げたいところですが、信じぬわけには行かぬのでしょうか」

ややあつてようやくカイに視線を戻すと、おもむろにハクロウは言った。

「正直、いささか妙だとも思っではいたのです。失礼ながら、陛下は御即位後三年も過ぎようとしていらっしゃるのに、いつまで経ってもどこか自信なげで、大丈夫だろうかとこちらが心配になってしまふようなところがありませんでした。それが、ちょうど半年ほど前を境に、嘘のように消えてしまった――あたかも別人になってしまったかのようですね。しかし、本当に別人だったのだということならば、それも納得できようというものです。それに……」

白い髭の下で、唇がわずかにほころんだ。

「半年前に比べて、随分と良き面構えになられた。さぞや得るものの多かった旅だったのでございましょうな」

「ああ、無論だ！」

カイの表情が、ぱあっと明るくなった。この先の話を進めやすくするために、あえてこうして旅に出ていることを告白したのであったが、ここまで色好い反応が返ってくるとは思っていなかったのだ。

「この経験、必ずや今後の政務に生かしてみせようぞ。……だが、その前にひとつ、ぜひとも断たっておきたい憂いがあるのだ」

「憂い、でございますか？」

「そうだ」

大きくカイはうなずいた。

「旅に出て間もなく、私は義姉上——亡き長兄上の奥様であらせられるユナ妃殿下にお会いしてな……」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「何と……」

すべてを聞き終わったハクロウは、ますます目を瞠った。

「ユナ様が御所用で旅に出られ、その旅先で病に斃れられたということは伺ってりましたが、まさかその裏に、そのような事情が隠されていたとは……」

しかも、あの少年が王太子殿下の……ですが、言われてみれば、確かに顔立ちといい、あの機転の利かせ方といい、在りし日の殿下にどこか似ていたような気もいたします。

私がそう思うのですから、ほかにも同じように感ずる古参の家臣は必ずおりましょう。仮にその者が、畏れ多くも陛下が玉座にあられることに不満を抱いている不逞の輩であり、少年の所持していたという懐刀も見たというのなら、彼を手中に収め、王位を篡奪させようと考えたとしても不思議はないでしょうな。さらに、その者が私利私欲に駆られた野心家であったならば、少年を傀儡として政界を操り、間接的に我が国全土を支配しようという不屈き千万な野望を抱く可能性も、全くないとは言いきれませぬ」

「であろう？」

得たり、とカイは身を乗り出した。

「それで、そなたに心当たりの者がないか尋ねに参ったのだ。そなたならば、政界のことにも誰よりも詳しいうえに、誰であろうと隔てなく、厳しく評価できる目も持っておるゆえ、きっと有意義かつ客観的な意見が聞けるのではないかと思うてな。

それに、もしかすると義姉上も、同じ人物に唆されたのではないかという気がするのだ。義姉上の御心の内に、もともと弟御を討つた私への恨みがあったことは事実だろう。しかし、そうだとしても、ああして狙いすましたかのように私の前に現れるためには――」

「そうですね。日頃から御傍にあった私ですら、今の今まで陛下が旅に出ていらしたなどは夢にも思わなかったのです。普段、陛下とほとんど御接触のないユナ様であれば、なおのこと――陛下を亡き者とせんと図る第三者によって陛下がどこに居られるのかを教えられ、『今こそ仇討ちの好機』などと囁かれたと考えた方が、はるかに自然というもの……」

もう一度目を閉じると、ハクロウは額をとんとん、と指で叩いた。

「陛下の居場所と少年の出自に関する諸々の両方を知っている、となれば、その者は政界の中枢もしくは隠密方に限りなく近い立場にいるとみて間違いないですな。なおかつ、生前のユアンⅡリク殿下とある程度の交流を持っており、人ひとり拉致できるほどの手練れでもあり……ふむ、ひとり居りましたぞ。先代王様のもとで、まさにその隠密の頭を務めていた男で、名をドウタクと言うのですが」

「ドウタク……」

その名を、カイは口の中で繰り返した。

「うむ、思い出したぞ。私の即位と同時に、年齢的なことや健康上の理由で職を辞した家臣が何名かいたが、そのうちのひとりだな」
「左様にございます」

ハクロウは首肯した。

「ドウタクは、持病が悪化したという理由で職を辞しておりますが、その後も病にかかる心配すらなく、現在は王太后陛下のお屋敷で、執事として働いているとか」

「義母^{はは}上の……!？」

カイが驚いた声を上げたそのとき、ティエンが不意に動いた。つかつかつか、と扉に歩み寄り、勢いよくこれを開け放つ。

「誰だ、そこに――」

いるのは、と続けかけた声が、そこで呑み込まれた。

「何だ……姫さんじゃねえか」

「ごめんなさい……」

身の置き所をなくしたかのように、ユイファは小さな肩をすぼめた。女官たちの姿はない。ということは、自分の判断で、心眼だけを頼りにひとりでここまで来たのだろうか。

「心配だったの。陛下、いつも宰相様に叱られてばかりいたから……」

「……何と、私は嫁女殿にそのような気苦労までかけていたか」

カイが苦笑した。今度は自分が彼女に歩み寄り、高々とその体を

抱き上げる。

「だがな、宰相はいつも私のためを思っていて、厳しいことを言うてくれるのだ。それに、今回は相談があつて、こちらから出向いてきたのだよ」

「ご相談……？」

「ああ。平たく言えば、この国の誤った部分をどう正し、どのようにしてより良き国として行くべきか、といった話だ——そうであつたな？ 宰相」

「はい、仰せの通りにございます」

「ほんとかしら」

如才なく応じた宰相に、ユイファはまだ疑惑の残る表情を向けた。

「でも……まあ、いいわ。確かに喧嘩や言い合いの気配はなかったし。だけど宰相様、あまり陛下をいじめてはいけませんよ？ 陛下は、本当はとても泣き虫でらっしゃるんですからね」

「……これ、ユイファ！」

「こりゃカンペキかかあ殿下確定だな」

慌ててたしなめたカイを、にんまりと八重歯を見せてティエンが小突いた。

とりあえず伝えるべきことはすべて伝え、女官たちも心配して捜し回っているであろうと思われたので、その後間もなく、カイはユイファを連れて彼女の部屋へ去った。

ティエンは、この場に残った——正確には、一旦出て行こうとしたところへ、カイたちを見送りに出てきたハクロウに目配せされたのである。

「ま……あんたの言いたいことは、何となくわかるよ。俺も、実はさっき言った『野心家』のひとりなんじゃねえかって疑ってんだろ？」

「ええ、ありていに言えば」

あっさり認めて、ハクロウは自分の椅子に戻り、ティエンにも来客用の椅子を勧めた。

「聞けば、あなたは陛下の実のお兄様だという。しかも……陛下の影武者を務められたのは、今回だけではありませんか？ 上中下三国首脳会談の折と、それに、下つ国の王太子様の首級を挙げられたあの戦も……でございましょう？ いずれも、今回の場合同様、失礼ながらあの陛下とはとても思えぬほどの手並みでございましたかな。」

なればこそ、解せぬのです。そんなあなたが、何故影武者などに甘んじているのか……無論、建前としては、『直接王家の血筋を引いているわけではないから』ということなのでしょう。けれど、それだけ面差しがそっくりなのならば、極端な話、そのようなことなど何とでもなるというもの——

「例えば、あの『あねさま』をけしかけて、旅先の事故に見せかけてカイを殺せば……ってか？」

自分から言って、ティエンは肩をすくめた。

「いやいや、冗談じゃねえよ。だいたい、そうまでして手に入れたと思うほど興味も関心もないんだわ、『あの立場』には——三度あつたかい飯が食えて、誰にも邪魔されずに落ち着ける寢床があつて、時々きれいなねーちゃんでも抱ければ十分に満足って至極お手軽な性格なもんでね。」

ただ、俺、いろいろあつて目下『家出状態』でさ。カイは、そん

な俺のこと、何かと面倒見てくれてて……そのくせ、自分からは決して助けなんか求めやしねえんだ。三国会談しものときだって、下との戦のときだって、体調崩して床とこから頭さえ上げられずにいるっつのに、『これは国王たる者の務めなのだから』とか何とか言ってる、這いずってまで出かけようとしてさ。だから、つい見かねちゃったっつーか……ま、早い話が『兄馬鹿』ってやつ？」

結局、勧められた椅子には座らずに、踵を返す。

「それはそうと、あんたこそ、蓋開けたら実は自分が首謀者でした、なんつーことはねえだろうな？ ……ま、たとえそうだとしても、下しもの王太子とおんなじ目に遭わせるだけの話だけだよ」

ちらりとハクロウを振り返った双眸が、刹那、鮮血の色に染まった。

〈第三章 了〉

傀儡王子

軽い頭痛と共に、目が覚めた。

「ああ良かった。気が付いたのね、兄様……！」
あにさま

安堵の声と共に、黒髪をゆるく二つに束ねた少女の姿が見えてくる。顔立ちにまだ幼さが残っているところを見ると、年の頃は十とお前後か……

（誰、だ……？）

自問しかけた瞬間、痛みががキリでも差し込まれたかのような鋭さに変わった。頭を押さえたまま、「彼」はしばらく呻き……その痛みが治まったのと同時に、いとも簡単に「思い出した」。

「ミオナ……」

そうだった。この少女は、故ユアン＝リク王太子一家の一の姫ミオナ。そして、「彼」の二人いる妹のうちのひとり……

「私はいったい——うっ！」

「いけないわ、無理をしては！」

身を起こそうとして再び呻いた「彼」を、ミオナは慌てて押しとどめた。

「母様も、二の姫も、もう……なのに、このうえ、あにさまにまで何かあったら……！……！」

声が詰まり、ミオナは着物の袖で顔を覆った。

「わかったわかった。今しばらくはじっとしているゆえ、もう泣くな」

苦笑して、「彼」は震えている妹の背をそっと撫でた。

（と言っても、無理かもしれぬがな……）

「彼」の名は、リクⅡナスル。ここカムナギの王太孫（国王の嫡流の孫）として生まれ育った。

ところが、三年前、父の末弟ユアンⅡカイが、はやりやまい流行病と見せかけて父と祖父を毒殺し、王位を篡奪してしまった。「母」ユナ妃は、篡奪王を誅（ちゆう）そうとして返り討ちに遭い、遺されたリクⅡナスルと二人の妹たちは、住み慣れた王宮から遠く離れたこの山荘に幽閉された。

それからはずっと、兄妹三人で肩寄せ合ってひっそり暮らしてきた彼らだったのだが、そんな生活もまた、決して長くは続かなかった。数え七つの祝いを目前にして、「二の姫」こと下の妹のアイナが、和平を維持するための人質として西の隣国ウナバルへ送られてしまったのだ。ミオナも、遠からぬ将来、北の隣国ヘキギヨクの王族に輿入れすることが決まった——当然のことながら、これも事実上は「人質」だ。一方、嫡子であり、本来なら父や祖父と共に殺されていてもおかしくないリクⅡナスルがこうして生きながらえているのは、病がちで床に臥（と）してばかりいる身であるということでは侮られたか、あるいは、ユアンⅡカイにはまだ嫡子がないため、嫡子ができるまでの「つなぎ」として「生かされている」のか……

（いずれにせよ、その判断、きっと後悔させてみせる！）

幸せだった日々を、家族を、ことごとく奪った憎き篡奪王ユアン
||カイ——絶対に、あの男をのさばらせておくわけには行かない。
この体が癒えたら、必ずや、必ずや……!!

『……ちよつと待て!』

だしぬけに、頭の中で声が響いた。

『何が「必ずや」だって? つつーか、カイのどこが「篡奪王」なんだよ! 俺の父ちゃん——前王太子様は、普通に流行病で死んだんだ。カイは、そのせいで突然王様にされちまって……むしろ、そのことでさんざん悩んでたぐらいだったんだぜ?』

それに何なの、その「オータイソン」って。俺は、ただの「リク」だ。父ちゃんとじいちゃんなんか顔も知らねえし、王宮にだって足一步踏み入れたこともねえ。北部の田舎の村で、「イヅチ」って名前の母ちゃんと二人で生きてきた、立派な一般庶民様なんだよ……
『!!』

それは、ドウタクによって封じられた「本物のリク」の意思が発したものであった。

一向に自分の思い通りにならないリクに業を煮やしたドウタクは、とうとうリクの人格そのものを封印し、その上から自分と志を同じくする全く別の人格を植えつけてしまった。この「別人格」こそが「リク||ナスル」であった。先ほどの記憶も、無論ドウタクに与えられた「偽物」である。ちなみに、枕元にいる「ミオナ」も、ドウタクが紙人形に魂を吹き込んで作り上げた「精巧なる傀儡」にすぎなかった。本物の「ミオナ姫」は、今も祖母の王太后と共に母屋の方にいる——自分には腹違いの兄がいるのだという事実すら知らず

に。

王太后自身に「リクを何が何でも王位に……」という意味があれば、事情を話して、ミオナ姫ともども「こちら側」に加わってもらっても良かった。だが、実際に王太后が取った行動は、あの通りだった。となると、下手に抱き込もうとするのは逆に危険だと思われる。

もし王太后が「そなた、もしや謀反を企てているのではあるまいな!？」の一言でも発しようものなら、この山荘に常駐している警備兵すべてがあつという間に敵に回るだろう。彼らは全員ドウタクの息のかかった者たちであり、それゆえに、今現在は、ドウタクがどんな不審な行動を取ろうともすべからく黙認されているのだが、「王太后様がお疑いになられている」とあらば話は別だ――王宮を去ったとはいえ、親族が豪商であつたことも手伝って、彼女はいまだ国王に次ぐ影響力を保持していたからだ。

そこでドウタクは、王太后には「リクは無事に街へ戻った」と思わせておいて、自分ひとりで動く道を選んだ。自身が寝起きしている離れの一室に強固な結界を張り、ここを「旗揚げ――と、あくまでも彼は思っていた――の拠点」とすることにしたのだ。傀儡を置いたのは、自分が母屋で執事の仕事をしている間、囚われ人の世話及び監視をする者が必要だったからで、それがミオナ姫の姿を取っているのは、「偽の記憶」通りの状況を作り上げるためだった。

結界のおかげで、王太后も本物のミオナ姫も、離れで何が起っているのかはもちろん、そこに誰かが閉じ込められていることにさえ、全く気付いてはいない。そして、「捏造された記憶」しか持たぬリク・ナスルもまた、そんな諸々の事情など知る由もなかった。今まで意識を失っていたのも、病にかかり、高熱が出たせいなのだとばかり思っている。

（な……何を言うか、慮外者めが！）

激しくかぶりを振ると、心中でリクⅡナスルは叫んだ。

（私は王太孫リクⅡナスル、ハシム六世となるべき者だ！ 篡奪王
ユアンⅡカイは、我が生涯の仇――^{かたき}）

その言葉が終わらぬうちに、またしても差し込むような痛みが頭を貫いた。

「ううつ、あうつ……うあああーつつ！！」

「あにさま！？」

傀儡のミオナが腰を浮かせた。枕元に置いてあった呼び鈴を取り上げると、彼女は戸口へすっ飛んで行って、激しくそれを振った。

「ドウタク！ ドウタクはどこ……！？」

『……っ！ ダメだ、あいつのことなんか呼ぶな……！！』

制止の声を上げたのは、「封じられているリク」の方だった。ドウタクが来たら、また「良く効くお薬」と称して眠り薬を打つのに決まっている。そして、もっともつと強い術を施されて……そうしたら、今度こそ「自分」は――「リクの意味」は、完全に葬り去られてしまうかもしれない。

だが、その声は、先ほどと同様にリクⅡナスルの頭の中に響き渡っただけであった。程なく慌ただしい足音が聞こえ、ドウタクが入ってくる。

「もう大丈夫でございますよ。今すぐお薬を――」

「……や、だ……」

「はい？」

「いや……打って、くれ……」

喘ぎながら、リクⅡナスルは言い直した。その表情があからさまに苛立ちを帯びているのは、勝手に唇が動いて「嫌だ」と口走ったからであった。

（無礼な……我が身中に巢食いし下賤の輩が……!）

実は自分こそがリクの身に巢食う偽りの人格であるなどとは露ほども思わず、リクⅡナスルは憎々しげに心で吐き捨てた。

『嫌だ……嫌だ……!!』

頭の中では、相変わらず「下賤の輩」が騒いでいたが、構わずドウタクに向かって腕を出す。すかさず、ぶすり、と太い注射針が刺された。

『嫌——』

声が、止まった。刹那、リクⅡナスル自身も意識を手放した。

次に意識を取り戻したときには、頭痛はきれいさっぱり消えていた。「下賤の輩」の声も、もう全く聞こえてはこない。

（ドウタクの薬が効いたのだな……）

満足して、リクⅡナスルは起き上がった。とたん、腹の虫が、ぐうっと音を立てる。

(それはそうだろうな、三月みつきもの間、薬のみで命をつないできたのだから……)

苦笑すると、リクⅡナスルは呼び鈴を鳴らした。すぐに扉が開いて、ミオナが姿を見せる。

「済まないが、何か食べる物を用意してくれぬか」

「まあ、食欲が……お元気になれる前兆ね、きつと!」

本物の人間のように喜色満面になると、ミオナの傀儡は弾んだ足取りで厨房へ消えた。ややあって、黒塗りの盆に、重湯を入れた椀と白湯を入れた湯呑みを載せて運んでくる。

「ごめんなさい、あにさま。病み上がりだから、最初はこんなものしか出せないのだけど……」

「いや、長いこと絶食していたのだ、しかたあるまい」

鷹揚に応じて、リクⅡナスルは盆を受け取り、重湯をすすった。

「うん、旨いぞ。五臓六腑にしみ渡るようだ」

「本当?」

「ああ」

不安げに覗き込んできた相手に、リクⅡナスルはにっこりしてみた。
せた。

「そなたが用意してくれたと思うと、なおさら旨いな」

「まあ……あにさまったら」

面映ゆげにミオナは微笑んだ。そのようなさまも、本物のミオナ姫さながらに見えた。

彼女が予見した通り、その翌日からリクⅡナスルの体調は徐々に回復して行った。そして、一月が経った頃には、部屋ひとつきの前の庭で武術の鍛錬ができるまでになった。この「前庭」も、ドウタクが結界を張って周囲からは見えないようにしているのだが、例によってリクⅡナスルは知るはずもない。

「あまりご無理はしないでね、あにさま」

手拭いを持って出てきたミオナが、気づかわしげに見上げてきた。

「ああ、大丈夫だ」

振っていた剣を鞘に納めると、リクⅡナスルは相手から手拭いを受け取り、流れ落ちる汗を拭った。

「具合が悪くなるどころか、動けば動くほど、力がみなぎってくるほどだからな」

それに、長いこと寝込んでいたせいか、体がすっかり痩せこけ、筋肉も落ちてしまっているのが気になってしかたがない。こんな有様では、いつまで経ってもあの男を――篡奪者ユアンⅡカイを倒せないではないか……！

「もう少し素振りをしてから戻る。先に朝餉を食べていなさい」

くしゃり、と相手の髪を撫でると、リクⅡナスルは再び剣を握り、天高く振り上げた。

新年の儀

一方、結界の外では新たな年が明けていた。

商いは正月三日を過ぎてから行われるのが常なので、日頃は賑やかな城下も別の街であるかのようにしんと静まり返り、休日特有のどこかのんびりした雰囲気に含まれている。

けれど、カイだけはいつも通り——否、それ以上に大忙しだった。「新年の儀」を執り行うためだ。

まずは、普段より一刻（約二時間）ほど早く起床。例によって毒見を重ねて——しかも、宰相ハクロウに謀反勃発の可能性を知られて以来、以前にも増して時間をかけている様子さえ見受けられる——冷え切った朝餉^{あさけ}を、今後の段取りを気にしつつそそくさと食べる。次に浴場に移動、普段の倍近くの時間をかけて体を清める。いわゆる「禊」の儀式である。

それが済むと、神殿にこもる。ここには先祖代々の国王が「神」として祀られており——なればこそなおさら、王家の血筋ではない自分が同じ場に交じるべきではないとカイは思っているのだが——、その御霊^{みたま}に昨年一年間を無事終えられたことを感謝すると共に、ますますの国家安寧と五穀豊穰を祈念するのである。古式に則って行われるそれは数刻余りに及び、すべてを終えて出てくる頃には、とつくに昼を回っている。

しかし、のんびりと昼餉^{ひるめし}を食してはいられない。今日のような祝事のある日には、宮殿正面の大庭園が民人^{たみびと}たち——といっても、豪商をはじめとする富裕層限定だが——にも開放されているので、頃合いを見計らって宮殿の二階から張り出した棧敷へ立ち、彼らに向けて祝辞を述べることになっているのだ。それが終われば、大広間に移って各地から年始の挨拶に訪れる貴族たちとの謁見。さらに

続いて、この貴族たちや側近の大臣一同を招いて行われる祝いの宴への出席……

それらすべてが完全にお開きとなり、自分の居室へ戻ってきたときには、とつぷりと夜が更けていた。

『……よっ、おつ！』

「とうとう『お疲れ』まで省略か貴様」

籐籠の中で丸まったまま、はたはたと尻尾だけ振った白竜を、本気でカイは睨みつけた。實際泥のように疲れ切っているだけに、言葉にも口調にも容赦がない。

「いい気なものだな。こちらは、ただでさえ忙しいところへ、irikuchigatachiが現れるかもわからんからと、ずっと緊張しまくっていたというのに……」

多くの人々が王宮に集まる機会は、謀反を起こす好機でもある。人波に紛れることで、より容易に城内に侵入できるし、大勢の人間の前で現政権を倒して新政権を打ち立てれば、内外に自分たちの力を誇示することもできるからだ。ゆえに、何かが起こるとしたら今日なのではないか、というのが二人とハクロウの共通見解であり、当然、それに備えて厳戒態勢も敷いていたのである。

『だから俺だって「代わってやろうか」つつたんじゃん』

しれっとティエンは切り返した。

『それを、どっかの誰かがヘンに意地張って——』

「別に意地なんぞ張っとらん！ rikuchigatachiと向かい合う人を人任せにし

とうなかつただけじゃ!!」

眉を吊り上げると、カイは乱暴に卓上の水差しを取り上げた。湯呑みになみなみと湯冷ましを注いで、一気に飲み干す。

「つちゅうか、そもそも貴様、今朝は二日酔いでほとんど討つ死んどつたろうが! あん有様で、誰が身代わりなんぞ任せられるつちゅうんじゃ……!! まったく、義理があるんやら何やら知らんが、ええ加減あがいな店に出入りするんは——」

『ほお』

遮って、ティエンはにんまりと牙を見せた。

『「御指名」の相手が王太后のバアサンだとしても、同じことが言えるか?』

「……………何やと!?!」

カイの目つきが変わった。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

城下の花街の一角に「極楽鳥」という名の酒場がある。王都でも選りすぐりの美形の男が給仕を務め、主に貴族や大商人といった大身の奥様方やお嬢様方に最上級のもてなしと癒しを提供する、という趣向でちょっとした人気を博している店であった。

まだカイと共にカムナギに來たばかりだった頃、ティエンは、ふと思い立ってぶらりと城下に足を運んだ。初めての街をあちこち見

物してみたかったというのもさることながら、カイが慣れぬ政務に手一杯で、全身から今以上に剣呑な「気」を放っていたので、何となく同じ場に居づらくもあったのだ。

ところが、たまたま「極楽鳥」の近くを通りかかったところで、もつと厄介なことが起きた。例の珍妙な「変装」をした王太后に呼び止められ、店に引きずり込まれたのである。あとでわかったのだが、王太后もまた、あの界限を訪れたのはあのときが初めてで、ティエンのことを「極楽鳥」の給仕だと思い込んでいたものらしい。無論、「お忍びでのお出かけ」であつたので、ティエンの方でも相手がまさか王太后であるとは思ひもしなかった。

かくて、互いに何者なのかも知らぬまま、二人は夜明けまで「極楽鳥」で過ごした——厳密には、ティエンは早々に帰リたかったのだが、王太后が彼を離してくれなかったのだ。ティエンに酌をさせつつ王太后は浴びるように酒を飲み、繰り言を聞かせ続けた。

夫が囲った妾^{めかけ}への嫉妬から、彼女と彼女が産んだ男の子に刃を向けてしまったこと。

もともと心の臓が悪かった妾は、その場で発作を起こして帰らぬ人となつてしまったこと。

まるでその罰^{ばち}が当たったかのように、その後、三人の息子と夫が立て続けに亡くなり、結局、外へ養子に出していた妾の子が家督を継ぐことになつてしまったこと……

『その子はどうやら何も話を聞かされていなかったようだな、戻ってきて早々、「母上様、お会いしようございました」とそれはそれは屈託なく声をかけてきて……その瞬間ほど、心が痛んだことはなかった。だから、顔も見ずに実家^{きと}へ逃げてきてしもうた』

ほんに愚か者だと笑^{わろ}うてくれて良いのだぞ——そう話を結んで化

粧が崩れるほどおんおんと泣きじゃくった王太后は、「迷惑料じや」と言って、店の建て替えができるほどの額の飲み代しろを置いて帰って行った。その「迷惑」を最もこうむったティエンは、もちろん堂々とおこぼれにあずかり、「ま、たまにはこんな夜があってもいいか」と思いつつ、店をあとにしようとした。

ところが、そこへ店主から声がかかった。

『あんな上客をつかまえられるのは一種の才能だ。ぜひウチで働いてくれ』

そんなつもりなど毛頭もなかったティエンはさんざん固辞したが、「店に座っているだけでもいいから」と言われて押し切られた。以来、「ツクヨミ」という源氏名で、手元不如意になったときと、いつの間にか常連となり「大奥様」と通称されるようになった王太后の指名があったときに限って働いている。

もともと、王太后の方は、いまだ「ツクヨミ」が何者であるのか全く知らない。酒場の給仕はあくまでも「一夜限りの奉仕者」だし、ティエンの場合、自分について語ると「実は俺、あなたが目の仇にしていた妾のもうひとりの息子なんですよ」ということまでペろりと喋ってしまいそうなので、あえて口をつぐんでもいたからだ。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

『ってことだからさ、俺があのお店に行くのは、あくまでも「お仕事」！ 若干の実益を兼ねた情報収集っつーの？ それに、おまえの影武者やってた間は、さすがに行くこと自体不可能だったしさ。だから、昨夜はほんと久々で——』

「それで？ 何かわかったのか」

『……まあた無視かよおまえは！』

はあ、とため息をつくとき、ティエンは、ぽんつ、と角を叩いて白髪灼眼の人の姿になった。自分も湯呑みに湯冷ましを注いで一気飲みし、

「まあな、一応わかったっちゃわかったぜ——あのバアサンは、どうやらこの件には関わってねえみてえだっつーことがな」

「関わっていない……！？」

「ああ。確かにあのバアサン、秋口に、生き別れてた孫と会って山荘に招待もしたらしい。けど、その晩のうちに街へ帰したんだそうさ。『リクという名で、若い頃の長男そっくりのなかなかの美形なのじゃ。そなたも、どこぞで会^おうたらよしにな』なんて、手まで握りしめられて頼まれちゃったよ俺」

その折のことを思い出したのか、うええ、という顔になって、ティエンは咳払いした。

「……何だよ、その疑り深げな目は？ あの人シラ切ってるのも？ 言っとくけどな、俺は話振ってすらいねえんだぜ。俺の顔見るなり、『ツクヨミ、聞いてたもれ。実は孫が……』って向こうからべらべら喋ってくれたんだ。それに、あの人の場合、酒が入ったときの方がむしろ本音全開だしな。おかげで、毎回ロクな目に遭わねえんだけど……あ、ちなみに聞く？ そんなときの苦労話」

「そうか……となると、今さら義母上にお会いしても無意味だな」

またしてもきれいに相手を見無視して、カイは眉をひそめた。

「あの山荘が怪しいと前におまえが言っておったし、今なら年始の

御挨拶という名目も使えるゆえ、明日にでも様子を見に行こうかと思っていたのだが……」

千里を見通せるはずのティエンの水晶玉だったが、どういうわけか、ぼんやりと靄がかかったようにしか映し出せない場所がひとつだけあった。そこで、この場所がどこなのかを具体的に調べてみたところ、王太后の山荘のある場所とぴたりと一致したのだ。カイが戻ってきたその日、ハクロウを訪ねる前にティエンが言いかけたのはこのことであり、今現在、彼らが、リクは謀反の計画に巻き込まれて行方不明になったのだとほぼ断定して動いているのも、この事実とハクロウから聞いた話とを考え合わせた結果だった。

「そうだな、やめといった方がいい」

自分でも本気で「苦労話」を語るつもりはなかったのか、ティエンも今回は突っ込みなしで話を進めた。

「つつーか、もともとあそこは下手にいじんねえ方がいいんだよ。

あんなだけあからさまに術者の気配がするんだ、たとえばバアサンが絡んでなかったとしても、何かが起こってんのは確かなんだろ。ただ、俺らがそれに気づいたって知られたら、逆に警戒されて、もつとわかりにくい場所に移動されかねえからな。

やつらが何を考えてんだかは知んねえが、もうしばらく泳がせて、あっちから尻尾を出したところを一気に叩くのが得策だと思うぜ。何、向こうにとっちゃ、坊主は『大事な次期国王様』なんだ。そうそう無体な扱いはしてねえさ」

「だいいいのだ、が……」

不安げに呟いたカイの声が、不意に揺らいだ。見ると、座ったまま舟を漕ぎだしている。

（……ほんと、正月早々働き詰めだったもんなあ）

くすりと微笑んで、ティエンはそつと弟の頭を撫でた。ぽんつ、とチビ黒竜に変わった相手をぽいと懷に放り込む。さっきまでの相手と寸分違^{たが}わぬ姿に変化^{へんげ}すると、ティエンは何食わぬ顔で「国王陛下の御座布団」に座り直した。

傀儡姫の悲劇

ところが、それからさらに時が過ぎ、山荘の庭の梅の花がほころび始める頃になっても、リクⅡナスルが起つ気配はなかった。

……起てなかった、と言った方が正しかったのだが。

早い話が、心は上書きできても、体の持ち主のほとんどの身体能力の限界までは変えられなかったのだった。年が明けてからは、ドウタクや彼の「協力者」となった配下の者たちが毎日のように顔を見せて、剣術や柔術の相手をしてくれるようになったのだが、どちらの武術も全くといっていいほど上達の気配を見せない。それどころか、受け身や反撃に失敗し、派手に転んだり、ひどく体を打ちつけたりして、相手を青ざめさせることも二度や三度ではなかった。

「……あにさま。あまりご無理なさらなくても……」

体のあちこちにできた傷や痣に膏藥を塗り込みながら、ミオナの傀儡が眉尻を下げた。

「いざとなったら、ドウタクたちも援護してくれるのでしょし……」

「だからと言って、それに甘えてばかりいるわけには——痛っ！」

答えながら、リクⅡナスルは顔をしかめた。ミオナも懸命に手当てしてくれているのだから、なるべくこらえるよう努めているのだが、それでも、触れられた場所の具合によっては、つい声が出てしまう。

「私は、いずれ一国を背負わねばならぬ身なのだ。まわりに手伝わってもらわなければ敵ひとり倒せないようでは――っ、痛っ、痛たたたっ……！」

「ご、ごめんなさい！」

慌ててミオナは手を引っ込めた。ますますその眉尻が下がり、唇から、ぽつりと小さな眩きが漏れる。

「あにさま……ミオナは……ミオナは、今のままでも……」

「何を言っておるのだそなた！」

瞠目して、リクⅡナスルは反駁した。

「このままでは、そなたとて、望みもしない異国へ嫁にやられてしまうことになるのだぞ！？ 良いか、絶対に二人であの王宮へ帰るのだ。アイナのことと呼び寄せて、三人で、お祖父様や父上、母上の分まで幸せにならなければ……！！！」

「あにさま……」

ミオナの瞳が、複雑な色に揺れた。

まだリクⅡナスルの人格が宿る前から、ミオナはずっと彼の傍に置かれていた。彼自身は眠ったままだったし、ドウタクは、王太后や「本物のミオナ姫」に怪しまれぬよう、術をかけるとき以外は滅多に離れには姿を見せずにいたから、定期的に点滴されている薬を取り替えたり、注射針を刺した場所を消毒したり、体を拭いたり……といったことをする者が必要だったのだ。

ゆえに、重々承知していた。すべては偽りなのだ、と――ユアンⅡカイⅡハシム五世が自分たちの仇なのだというこれも、自分が異国に嫁に出されてしまうのだということも。

（それに、もし、あにさまが本当に国王様になってお城に戻ったとしても……）

確かに、ミオナさえ望めば、リクⅡナスルは彼女と王宮で暮らすことになるのだろう。けれど、その「ミオナ」は自分ではない。本物のミオナ姫なのだ。

（だって、ミオナ姫は二人も要らないのだもの……）

そして自分は、恐らくその時点で紙人形に戻され、そのまま焼かれて捨てられるのに違いない。ドウタクにとって、「真実」を知っている者は邪魔な存在でしかないのだから……

ズキリ、と胸が痛んだ。作り物の体であるはずなのに。痛むべき「心」など、どこにも宿っていないはずなのに……

「……ミオナ!？」

リクⅡナスルの茶の瞳が、ますます怪訝に見開かれた。

「やっぱり、嫌……」

ひし、と相手の胸元にしがみつくと、ミオナはかすかに訴えた。

「ここにいて、あにさま……ミオナと一緒に、ずっと、ずっと、ここに……」

「どうした、ミオナ。珍しいではないか、そのようなわがままを言うなど……」

戸惑ったように、リクナスルは妹のつややかな黒髪を撫でた。
その口から、ややあって苦笑が漏れる。

「もっとも、これまで文句ひとつ言わずに尽くしてくれたのだ、たまにはそのぐらい良いのかもしれないが……それに、つまりは私が頼りないのだと言いたいのだろうか？ 確かに、今の有様でのこの出かけて行ったら、冗談抜きに一発で相手に打ち取られかねないからな」

「いえ、あにさま、その――」

「良い良い」

皆まで言わせず、彼は相手の背をぼんぼん、とあやすように叩いた。

「そなたにそのような心配をかけぬよう、もっと精進せねばな。……そうだ、この低い背丈も問題なのかもしれん。少々苦手だが、明日から牛の乳も頑張って飲んでみるか」

「あにさま……」

そうでは、ないのに――そう言いかけて、しかし、ミオナはその先を吞んだ。捨てられ、焼かれてしまうのが嫌なのだと言えば、自分が傀儡だということが知れてしまう。かと言って、離れるのが嫌なのだと言えば、「どうしてだ」という話になり、やはり何もかもが明るみに出してしまうだろう。そうなれば、相手の出陣後どころか今すぐお払い箱となり、下手をしたらこの場でドウタクに燃やされてしまうかもしれない。

（それは、もっと嫌……！）

身震いすると、ミオナはさらにひしっと相手にしがみついた。そ

れ以外に、
 どうすることもできなかった。

「何だ何だ、今日のミオナは随分と甘えん坊だな」

再び苦笑を漏らすと、リクナスルは、今度はしっかりとミオナを抱きしめた。無論、その仕草は、あくまでも兄が妹にするその領域を出てはいない。が、それでも、ミオナの体の芯に、じわり、と温かい何かを灯すには十分だった。

「あにさま……大好き」

知らず知らずのうちに零れ出た言の葉に、自分でもはっとする。そして、唐突に腑に落ちた。だからこんなにも、焼かれて消えてしまうのが怖いのだ。だからこんなにも、たまらなく離れがたいのだ……

~~*~*~*~*~*~*~*~*

そんなミオナを冷ややかに見つめる一対の目があった。

(
⋮
愚かな
)

ふん、とドウタクは鼻を鳴らした。

（たかが傀儡の分際で、人に惚れた、だと……？）

配下の者に武術の稽古を任せたのにもかかわらず、彼自身がこうしてあらためて足を運んできたのは、「そろそろ王宮に乗り込む準

備を始めても良いのではないか」とリクⅡナスルを促すためであった。

実のところ、リクⅡナスルが思っているほど、ドウタクは彼に武術の技量を求めてはいなかった。極端な話、旗印にさえなってくれば、あとは後方でぼーっと突っ立っていてくれても構わないとすら考えている。君主など、そのぐらいの方がちょうど良いのだ――あまりにも文武に秀ですぎたり、現君主のようにクソ真面目すぎたりしては、こちらの思い通りに動かせないではないか。

ところが、再三仇だ仇だと吹き込みすぎたせいか、あるいは「リク」であった頃にその手の芝居やら絵草子やらを見すぎてでもいたのか、リクⅡナスルは、相手を何が何でも一騎討ちで倒そうと心に決めている様子で、「そのためにも、せめて自力で十人抜きぐらいはできねば」などと夢物語のようなことを言っている。まったく、冗談ではない――そうなるのを待っている、十年経っても、あの男を玉座から引きずり下ろすことなどできないだろう。

というわけで、「いくら何でも、桜の咲く頃までには決着をおつけになった方が……」とでも言おうかと思いつつ、離れの庭先までやって来たのであったが……

（あの傀儡、もう使えんな）

何が「ずっとここにいて」だ。操り人形なら操り人形らしく、こちらの言うことだけ聞いておれば良いものを、その「分」を逸脱したばかりか、よりによって、そのような余計なことまで……あまり幼すぎると、言われた仕事をこなせなかったり、場合によっては命令自体を理解できなかったりもするので、精神年齢は「器」の年齢より若干高めの十五歳前後に設定して作ったのだが、どうやらそれが裏目に出てしまったようだ。

（さて、どうするか……）

考えに落ちようとしたドウタクの視線の先で、ミオナの肩を抱いたリクⅡナスルが部屋に入って行くのが見えた。突然あの様な様子を見せられてよほど動揺したのか、「今日は私がお茶を淹れてやる」だの、「ずっと閉じこもっているから、そのように鬱々としてもしてしまうのだ。ドウタクに頼んで、今度、気晴らしにどこぞへ連れて行ってもらおう」だのと、下にも置かぬ扱いようである。

（やれやれ、まさに「妹が泣き所の兄様」といった風情だな）

小さくドウタクは肩をすくめ……不意に、にまりと口角を上げた。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

翌朝。

「リク様！ リクⅡナスル様……！！！」

血相を変えて飛び込んできたドウタクに、リクⅡナスルは叩き起こされた。

「大変でございます！ ミオナ様が……！！！」

「ミオナが……？」

がばりとリクⅡナスルは起き上がった。

「ミオナが、どうしたのだ……！？」

満開となった白梅の根元に、ミオナは倒れていた。それも、腹を刺され、首を落とされた無残な姿で……

「申し訳ございません！ 警備の者の中に、王宮からの刺客が……」

呆然と立ち尽くすリクllナスルの足元で、ドウタクが平伏した。もちろん、演技である——実際に手を下したのは、ほかでもない彼だったのだから。

「傀儡の分」を越えてしまったミオナのことは、昨夜のうちに紙人形に戻して灰にしまっていた。本当は、「器」だけでも残して、こちらを惨殺死体に仕立て上げたかったのだが、傀儡の「魂」を完全に消してしまうには、それが宿っている紙人形自体を燃やさねばならなかったのだ。今、目の前に転がっている「ミオナの遺体」は、そのあとに別の紙人形で作った「空^{から}の器」であった。

「すべては、この山荘の管理を任された私の落ち度。かくなるうえは、この皺腹を搔っ切って——」

「いや、良い」

低くリクllナスルが遮った。その両の拳が、固く固く握られる。

「責任ならば、王宮にて存分に取ってもらうゆえ」

「では……！」

「ああ。もはや、四の五の言ってなどはおられぬ」

はじめたように顔を上げたドウタクに、深くリクllナスルはうなずいてみせた。

「皆を集めよ。ミオナを埋葬し——」

一瞬、声が詰まる。ぎゅっと目をつぶり、こみ上げたものを抑え込むと、決然と彼は言い切った。

「この仇、絶対に取らせてもらう……!!」

謀反勃発！

リクⅡナスルのもとへ、ドウタク一派が集ったのとはぼ同じ頃――

王宮二階の屋根に設えられた「裏庭」こと王族専用庭で、カイは剣術の朝稽古にいそしんでいた。

暇を見つけて刀を振ること自体はウナバルにいた頃からの習慣だったが、ここ半月ほどは、特に意識してその時間を多めに取るようにしている。街に出ては情報収集をしているティエンと、城内の言動にそれとなく注意を払い続けている宰相ハクロウの両方から、家臣の一部や、彼らに日頃から取り入っている豪商たちに不穏な動きがあるようだ、との知らせを受けていたからだ。

殊に、茶屋や料亭の付近を実際に見て回っているティエンからの報告は詳細だった。

『「^{ウチ}極楽鳥」は奥様お嬢様御用達の店だからアレだけど、まわりの店の連中の話じゃ、王宮の偉いさん方と^{あきんど}金持ちの商人連中のお越しが前年比で十倍はカタいらしいぜ。一応、名目は新年会だの^{せつぶんえ}節分会だの雪見の集いだの梅見の宴だのってことになってるんだが、ま、早い話が双方で^{まつりごと}根回しし合ってたんだろうな。ドウタクにしてみりや、できるだけ^{まつりごと}楽に政牛耳れるようにしつかり足元固めときたいとこだし、呼ばれた連中は連中で、少しでも甘い汁吸えるように鋭意奮闘中ってとこなんだろう』

ただ、ではすぐにでも捕り方を向かわせた方が良いのか、というと、そういうわけでもないらしい。

『一度、俺自身もやつらが集まってくる場に居合わせたことがあつ

たんだ。で、ドウタクらしきジジイの姿も見ただけど……何っつーのかな、その……ヘンなんだよ。確かに本人はそこに立ってるんだけど、何でだか、人の気配っつーの？　そういうのが全然なくてさ。もしかしたら、幻術で姿だけ見せて、本人は別の場所にいるのかもしれない——例の、バアサンの山荘とかな』

だとすれば、たとえ捕えようとしても、あっさり姿を消されて逃げられてしまうだろう。ほかの出席者たちにしても、もともと何かしらの「表の名目」はあるのだから、それを前面に押し出して白を切るばかりなのに違いがない。挙句に警戒を強められて、会合そのものをもっと秘密裏に進められるようになってしまっっては、本末転倒というものだ。

かくて、カイは、彼らの動きや、全くもって見えてこないリクの安否を気にしつつも、相変わらず「待ち」に徹している。稽古を増やしたのは、いつ何時、何が起こっても良いように備えておくのと同時に、こうした気がかりに伴う苛立ちを少しでも紛らしたかったからでもあった。相手は、いつもの如く警備兵に化けたティエンが務めてくれていた。

晴れた空に高々と差し上げられた刃が、朝日を浴びてきらりと光る。

「きええええいつっつ！！」

気合いの声と共に、すうっとティエンに向かって伸びてくる光は、どこまでもまっすぐだ。人質としてあれだけ虐げられて育って、王位に就いてからも苦勞の連続だったというのに、歪みひとつ見られない、気持ちいいほどきれいな太刀筋——

——であるだけに、非常に見切りやすくもあるのだが。

「……くっ！」

ティエンにあっさり刀をはじかれて、カイは悔しげに歯ぎしりした。

「もう一本——」

しかし、そこで表情がふっと緩んだ。自分の部屋の窓からひよっこりと覗いた顔に気づいたのである。

「ユイファ。また、ひとりで出歩いているのか」

刀を鞘に納めると、カイは大股に許婚に近づき、その頭をくしゃくしゃと撫でた。

「しばし待っておれ。一風呂浴びてくるゆえ」

もともと、そろそろ沐浴の時間でもあった。けれど、ユイファは大きくかぶりを振った。

「いえ、その前に……こちらにおいで下さいませ、陛下。大事な話があります」

「お、何だ何だ？」

横合いからティエンが混ぜっ返した。

「『大事なお話が……』だなんて、まるで離縁でも切り出しそうな勢いじゃねえかよ」

無論、冗談で言ったのである。どうせ、女官たちのお喋りを小耳にはさんで、自分も真似して言ってみただけなのだろう、と高をくくっていた。

ところが、ユイファは真顔を崩さなかった。

「どうか、おいで下さいませ」

見えぬ目をまっすぐにカイに向けて、彼女は繰り返した。

「事と次第によっては、本当に離縁というお話にもなるかもしれないませぬゆえ」

「なっ……!?!」

カイとティエンは、顔を見合わせた。

「話」は、四半刻しはんとき（約三十分）以上にも及んだ。

「……まことに、それで構わぬのか」

やり取りが一段落したところで、カイがおもむろに確かめた。こつくりとユイファはうなずいた。

「それ『が』、最上の策かと」
「最上の……か」

カイの口角に苦笑が浮かんだ。つと手を伸ばすと、許婚をそつと抱き寄せる。

「よくぞ話してくれた。それに……よくぞ決心してくれたな。やはりそなたは、私の自慢の嫁女だ」

「いいえ、陛下こそ……」

応じかけて、ユイファはうつむいた。

「本当によろしいのですか？ わたくしのような――」

不意に声が途切れ、瞳が大きく見開かれた。頬が、耳が、首筋が、みるみるうちに真っ赤になって行く――カイの指が顎に触れた、と思う間もなく、その顎をつまんで引き寄せられ、唇を重ねられたのだ。その場に同席していたティエンが思わず身の置き所を失ったほど、深く、長く、情熱的なくちづけであった。

「……これが、オレの答えじゃ」

ユイファの耳朵にも軽く唇を落とすと、カイは、ぎゅうっと彼女を掻き抱いた。

「おまえは、ナンも心配せんでええ。何があっても、絶対におまえんことは離さんけん。何、いざとなったら、二人してどこへでも逃げればええんじゃ。地ん果てまでも、海ん果てまでも、空ん果てまでもな」

「陛下、下……」

果然と、ユイファは呟いた。おずおずと、その両腕がカイの背中に回される。相手の広い胸板に、こつん、と額を当てると、彼女はしばし、小さな両肩を震わせた。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊

「……何考えてんだよ、おまえ」

警備兵の姿のままカイの一步後ろを歩きながら、ティエンがぼそりと問いかけた。ユイファを部屋まで送った彼らは、その足で沐浴場に向かう途中であった。

「ああ済まん済まん」

視線を動かすことなく、淡々とカイは答えた。

「やはり、あの接吻は少々刺激が強すぎ——」

「そのことじゃねえよっ！ ……まあ、あれも十分『何考えてんだ』だったけどっ」

苦虫を噛み潰した顔で、ティエンは反駁した。

「俺が言ってるのは、そのあとのおめえの発言のことだよ。いくら話の流れが流れだったからって、あんな、まるで最悪の事態が起こるみてえな物言いして……言霊って言ってな、ああして口に出しまうと、案外ほんとにそうなるっちなうことも多いんだぜ」

「そうだな」

「そうだな、っておまえっ——」

「まあ、こちらもそれなりに策は練ったのだ、何とかなるだろうよ」

ますます目を三角にしたティエンを、事もなげにカイは遮った。

「それとも何か、おまえは失敗するような策しか考えつかないよう

な阿呆だったのか？」

「うっ……」

前言撤回。やっぱこいつどっか歪んでるわ……内心でティエンがそうひとりごちたそのとき、バタバタバタ、と慌ただしい足音が響いた。

「陛下！ 陛下はいずこに……！！」

「ここだ、ハクロウ」

手を挙げると、カイはぜいぜいと息を切らしている宰相に歩み寄った。

「もしや、のんびり風呂に浸かっている暇はなくなったということか」

「御、御意に、ござい、ます……」

ようやくのことでそれだけ言うと、ハクロウはその場にへたり込んだ。

一旦部屋に戻ってとりあえず体を拭き清め、王族服に身を固めると、カイはハクロウを伴って執務室へと足を向けた。階段を下り、目指す部屋へ続く廊下へ出たところで、怪訝にその眉根が寄せられる。

「……静かではないか。謀反のむの字も感じられぬが」

「それが、逆に問題なのです」

厳しい表情を崩さず宰相は応じた。

「ともかく、ご自分の目でお確かめになって下さりませ」

軽く頭を下げて先に立つと、執務室の扉に近づき、恭しくこれを開ける。次の瞬間、カイはあっけにと取られて立ち尽くした。

そこでは、既に朝の閣議が行われていた。明らかに異例なことであった――国王であるカイを差し置いて、大臣たちが勝手に会議を始めるなど。

しかも、各大臣の席についていたのは、カイが顔すら知らぬ者たちばかりだった。本来ならハクロウが座るべき宰相の椅子にも、別の人間が座っている。白髪をぴたりと七三に撫でつけ、針金のように細い体を灰色の緋の着物で包んだ、眼光鋭い老爺――彼が、かのドウタクなのであろうか。

そして、最高級の濃紫の王族服を纏い、カイがかぶっているのと全く同じ形の王冠を頭に載せて、悠然と玉座に腰かけていたのは、今年の秋、短い期間ながら一緒に旅をした「友」その人であった。

……姿かたちだけは。

「リク――」

「馴れ馴れしいぞ、無礼者!!」

ぴしり、と言い切ったその口調は、完全に別人のものだった。否、口調ばかりではない。目つきも、全身から発している「気」も、何もかも……

茶色の双眸が、憎悪も露わにカイを睨んだ。

「自分からのこのこ出てくるとは、随分といい度胸ではないか。我

が祖父と父を密かに毒殺し、母と妹を無残に斬り殺した篡奪者風情が……!!」

「何、だと……!？」

愕然と、カイは相手を見つめた。

(どうということだ……)

何故、自分が父と長兄を毒殺した事になっている？ おまけに、
リクの母親と妹までもを斬った、とは……

「リク。その話は、誰に――」

だが、その言葉は最後まで続かなかった。短い呻き声と共に、カイは床に顔くずおれた。その手首があつという間にねじり上げられ、縄できつく縛られる。それを確かめたドウタクが、満足げにほくそ笑んだ。

「よくやったぞ、ハクロウ」

カイの首筋に手刀を見舞い、その体を縛り上げたのは、誰だろう、ハクロウだったのである。

「……は」

深々と、ハクロウは頭を下げた。もう一度ほくそ笑むと、ドウタクは警備兵たちに向かって厳かに命じた。

「この場で処刑しても良いのだが、それでは新王陛下の御前を穢れた血で汚すことになる――ひとまず、地下牢にぶち込んでおけ。あ

とのことは、追って沙汰する」

そう、ただでは殺さない。じっくりと時間をかけて、なぶり殺しにしてやるつもりだった——それもまた、ドウタクが今回の一件を起こした「真の目的」のひとつだったから。

（姫様。二十一年前の失敗、今こそ償わせていただきますゆえ……
！！）

虚空に向かって語りかける。そのまなざしは、どこか狂気を孕んでいた——

脱獄

同日、昼過ぎ――

カリカリカリ、と何かを引っ搔くような音と共に、「ふみいゝ」
とかすかな声が聞こえた。

「あら、こんなところに仔猫が！」

「まあ、黒猫ではないの。不吉な……」

女官たちが言い合っている。はっとユイファは身じろぎした。

「リーアン――」

「わかっております、姫様」

皆まで言わないうちに、最も年若い女官が反応した。年齢こそ最年少だが、ヘキギヨクの隠密部隊から選ばれた精鋭で、主にユイファの護衛や故国との連絡を担当している。それだけに、こういうときの察しも人一倍良かった。

窓ががらりと開けられ、再び閉まった。

「姫様」

とだけ呼びかけて、リーアンは連れてきた黒猫をユイファに抱かせた。とたん、ユイファがびくりと身をすくめる――仔猫は満身に手傷を負い、ぐったりしていたのだ。

「リーアン、布団を。それから、簾も」

「心得てございます」

阿吽^{あうん}の呼吸で応ずると、リーアンは部屋の最も奥、普段はユイファが夜具を敷いて休む場所に床をのべ、周囲に簾を下げて内部が見えないようにした。そこへ、ユイファが仔猫を横たえる。軽く掛布団を猫にかぶせると、彼女はそっと囁きかけた。

「もう大丈夫ですよ」

その言葉を待っていたかのように、ぽんっ、と小さな音がした。布団が人の大きさに盛り上がり、低い呻き声が漏れて出る。

「陛下!？」

「だ、いじ、ない……」

途切れ途切れに答えて、カイは口角を上げてみせた。つまり、黒猫は彼が変化^{へんげ}した姿であり、その姿であったからこそ、ここまで誰にも見咎められることなく逃げてこられたのであった。

「下（つ国）に、あった、頃は、もっと、酷い、仕打ちを、何度も、受けた……それ、ゆえ、打たれ、強さ……には、いささか、自信、が……」

最後まで言わぬうちに、苦痛に顔が歪み、体が海老のようにのけぞる。

「ああ……ああ、陛下、もう、何もおっしゃらないで……」

激しくいやいやをすると、ユイファはカイの手をしっかりと握りしめた。その傍らで、リーアンが手際良く体の傷に膏薬を塗って行

く。ほとんどが、打ち傷であつた。地下牢につながれてすぐ、ドウタクが直々に足を運んできて、鞭や棒で拷問に近い勢いで叩きのめしたのである。

（おかげで、ハクロウには、あとでさんざん泣かれたがな……）

ユイファがカイに伝えた「話」は複数あつたのだが、その中のひとつが、「ハクロウの心に異変を感じる」というものだった。そこで、着替えるために一度部屋に戻った折、カイはハクロウのことも部屋に入れ、その場で彼を問いただした。

すると、ハクロウはたちどころに平伏し、何もかも打ち明けた。家族を人質に取られ、恭順を迫られていたのだということ。その証として、城門を開けることと、警備兵を下がらせることを命じられ、このため、ドウタク一味はとつくの昔にすなりと城内に入り込んでいるのだということ。こうしてカイを迎えに来たのも、一味の前に彼を誘い出し、自らの手で縄をかけろと命じられたからだのだということ……

『この脅しに屈してしまったそのときから、どのような形にせよ、事が終わり、家族が解放されたら、すぐさま腹を切ってお詫びいたそうと心に決めておりました。それが、多少早まっただけのこと……』

最後にそう付け加えて懷から短刀を取り出そうとしたハクロウを、カイは慌てて押しとどめた。

『早まるでない。実を申さば、私も、もともとあちらの手中に飛び込もうとしていたのだよ。それゆえ、そなたが捕えてくれるというのなら、むしろ好都合というものの……』

今回の一件で最も厄介なのは、あらゆる要素が未知数であることだった――ドウタクの思惑も、その幻術や体術の力量も、どの程度の人間が彼の意思に賛同し、協力しているのかということも、リクがどのような形で事に関わらされているのかも。

それらがはっきりしない限り、闇雲にこちらから仕掛けるのは危険だ。下手をすれば、仕掛けたこと自体を逆手に取られ、「見よ、ハシム五世というのは、罪もない人間にあらぬ疑いをかけ、攻撃してくるような卑劣漢なのだ」などと言われて、かえって立場を危うくしかねない。あるいは、リクを人質として使われ、彼の身を危険に晒してしまう可能性もある。

そこで、一旦ドウタクらの手に落ちたと見せかけ、彼らを油断させて、次の出方を見ることにしたのだ。無論、黙って囚われっぱなしになっているわけではなく、頃合いを見てティエンに牢の鍵を開けてもらい、彼を身代わりにして脱獄するつもりだった。その後は城内のどこかへ身を隠し、ティエンと水晶玉で連絡を取り合いつつ、反撃の機会を窺う――これが、彼ら二人の立てた「策」であった。

『こちらこそ、そなたには何も告げず、まこと申し訳なかった。敵を欺くにはまず味方から思うてな』

……本当のことを言えば、最後の最後までティエンがハクロウを警戒していたからだっただが。

『わかっております』

それを知ってか知らずか、深くハクロウはうなずいた。そして、自ら申し出てきた。

『なれば、このハクロウめが牢の鍵を開け、陛下の身代わりも務め

まする。ティエン殿は有能な御方ゆえ、自由に動けた方が何かと都合がよろしいのでは？　それに、幸い私は陛下とさほど体格が違ひませぬ。衣服を取り替え、牢内のござをかぶって寝ている体でも装えば、多少の時は稼げましょう』

『うむ……そうだな』

確かに、事実上ひとりで戦いに臨むよりは、ティエンと直接力を合わせた方が、はるかに勝算は高くなるだろう。

『ただし、それならば、私の身代わりとなるのではなく、「私に捕えられ、牢の鍵を奪われた」ことにせよ。さすれば、そなたが裏切っておらぬことを連中に印象づけることもできようからな』

そんなわけで、ハクロウは、一通りカイをいたぶって満足したドウタクが完全にその場から消えたのを確かめると、すぐさま人払いをして牢の南京錠を開け、縛めを解いてくれたのであった。

『ああ、何とおいたわしい御姿か……！　まさか、ドウタクがあそこまで外道であったとは……こんなことなら、やはり私があの場で腹を切り、陛下をお逃がししておけば……！！』

涙ながらにそう呟きつつ……

『何を、言うか――』

こちらこそ、これから、こんな牢内でそなたにつらい思いをさせてしまうというのに……そう続けたかったカイだったのだが、間断なく襲ってくる激痛が、それを許してくれなかった。やっこの思いで立ち上がると、よろめきながら彼は牢から出た。

鉄格子と南京錠を元通りに閉め、入れ替わりに牢に入ったハクロ

ウがなおもかすかに嗚咽しているのを背中では聞きながら、一番近い厠を目指す。そこで仔猫に姿を変え、着ていた物をすべて便壺に落とし込むと、カイは窓から飛び出し、一目散にユイファの部屋へ向かった。この分では、自分の許婚であるユイファもまた、どのようなことをされるかわかったものではない。それを一刻も早くリーアンたちに知らせ、自分もまた、盾となって彼女を守らねばと思ったのだ。

カイの体と手足にすべて膏藥を塗り終えると、リーアンは、さつと簾の外へ下がった。

「……だいたい事情はわかりましたわ」

ややあつて、ユイファがうなずいた。カイは何も言っていないのだが、握った手から彼の記憶を感じ取ったものらしい。

その手を、ユイファはそつと自分の頬に寄せた。

「あのような仕打ちに、よくぞ……しかも、こんなにもひどい御怪我をされたというのに、まず一番にわたくしのもとへ……」

一瞬声が詰まり、伏せられたまつ毛が震える。

「でもね、ご無理はいけませんよ？　まずは少しお休みになって、体の力を回復させなければ」

握っていない方の手が、撫でるようにカイの額に触れた。とたん、ぽんっ、とカイはちんまりした仔竜に変じた。

「ぎゅっ……！？」

「いいから、このままお休みなさい」

目を瞠った仔竜をひよいと膝に抱き上げて、母親のような口調でユイファは命じた。

「きゅ、きゅきゅきゅ（いや、しかし）……」

カイは反駁しかけたが、ユイファの方が一枚上手だった。それこそ猫の仔をあやすが如く、首筋から背中にかけてをつまむような手つきでくしくしと撫でる。たちまち「きゅうん……」と仔竜は悶絶した。

「そうそう。そうやって良い子にしていたら、あとで、おいしいお団子をたんと買って差し上げますからね」

満足げに微笑むと、ユイファは仔竜に頬ずりし、その体をさらにしっかりと腕の中に抱え込んだ。

そんな彼女の見立ては、確かに当たっていたらしい。正体を悟られぬよう、それから間もなく薄衣をかぶせられたこともあって、カイはいっしょか、ぐっすりと眠ってしまった。

「……アン。リーアン！」

ユイファが女官を呼ぶ声に目覚めたときには、既に窓の外から夕陽が差し込んでいた。

（しまった！ 守ってやるどころか、逆に守られてしまっているではないか……！！）

忸怩たる思いでユイファを窺うと、彼女はリーアンに手のひらを
出させ、その上に指文字のようなものを書いていた。手が止まると、
女官は心得顔にうなずいて、足音も立てずにその場から消えた。

（何事だ……？）

だが、その問いをカイは口にできなかった。竜体だったから、と
いうだけではない。いきなり部屋の扉が開き、ずかずかと誰かが踏
み込んできたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6683w/>

黒竜異聞

2011年12月7日00時52分発行